

東方蒼魔塞

因田司

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

八雲紫の姉を名乗る女性が

幻想郷の全てのものから赤色を抜き取ってしまった！

辺境は、青色の幻想に包まれていく……

青色に変わってしまった霊夢とレミリアが、

異変を解決すべく、彼女の館に乗り込む。

蒼い巫女さんと、蒼い吸血鬼さんの藍と群青に包まれた戦いが幕を開ける。

此の小説は、展開、内容といろいろ、本家様の『東方紅魔郷』からの

引用が多いです。また、少々『東方妖々夢』の要素も入っています。恋愛要素いっさいなし、もはや戦闘オンリーです。

時系列は『弹幕アマジック』が終わったあたりです。

今書いてる別の作品より早く終わると思います。

時々、アナログ感満載の挿絵も載せております。

サブタイトルに「◎」が付いている回がそうです。

ですが、原作のイメージを崩したくない……

または苦手だと思った方は、ブラウザバックをお勧め致します。

目次

蒼魔の少女達（キャラ紹介）

オリキヤラ（？）達の解説①◎

1

オリキヤラ（？）達の解説②◎

10

プロローグく蒼ざめる幻想郷

青より蒼い夢◎

20

赤色の下に立つ者

ほおずきに宿りし蒼い魂

42

夜明けへの夜行

59

ファイリーエルフ

76

恋以上に焦がれたおてんば娘

100

赤光の蒼要塞

赫光と星空の挟間で

115

暁の器くCasket of Dawn

n

く

130

赤と配下は使いよう

149

赤と蒼の境くAzure Land

167

ソレユ魔法図書館

187

双赤角の蒼魔

203

陽光の館くOpen the min

d

く

216

アンラクトガールく少女解放く前編

230

アンラクトガール	少女解放く中編	247	紅月に秘められしはく後編く	402
アンラクトガール	少女解放く後編	265	紅月を囲う紫雲くRED、BAD、MA	
◎			D	421
赤張られた秘密			Red Homunculi	◎
赤き気炎		284	439	
レッド・ペナルティ		301	血塗れた狂者の落とし子	457
少女裁判く人の命弄びし少女		315	虹の双極に立つ者	473
二律背反の吸血鬼		331	蒼魔の本性(キャラ紹介②)	
レッド・マシン、ブルー・ヴァンパイア		347	オリキャラ(?)達の解説③◎	493
蒼月の下で……		366	東方双魔塞	
紅月に秘められしはく前編く		382	くSister of	
			Azure	
			人工少女達の前夜祭	502

アリアドニ・オリヴァは彼女の主な

か？

ベジタリアン・ライトネス

536 519

蒼魔の少女達 (キャラ紹介)

オリキャラ (?) 達の解説①◎

No. 1 (?) 八雲 赤 (やくも ふち) ①

幻想郷にて突然明るみに出てきた、今回の異変の張本人。

八雲紫の双子の姉と言われている。

紅魔館とは博麗神社を挟んで反対方向に、自分の館「蒼魔塞」を構えて暮らしている。

また、九人の配下を従えているらしい。

姿は顔や容姿、服装など驚くほど紫にそっくりだが、

服は紫色ではなく赤色を基調にしている。

道士服もドレスも存在するが、どちらも愛用しているようだ。

また、いつも赤色の角縁眼鏡をかけている。

スキマの中で寝ている妹と比べ、勉強に励んでいることが多い。

(眼鏡をかけてるのは、其による視力低下が原因だとか)

妹の紫より計算スピードは速いらしい。

物事を数学的に、利害を中心に考える事が多いが、ときどき感情的になり、熱弁をふるう事もある。

其の時はたいてい誰かを励ましたり、自分の考えを言い聞かせたりする時である。

今回、幻想郷の全てのものから赤色を抜き取り、自然や人工物、更には住民達の服装からも赤だった部分を青色に変えてしまった。

抜き取った赤色を自分の館に持ち帰ろうとしているが、其等を何に使うかは不明である。

只、自分の配下達に、其の一部を新たな力として分け与えているという事が判っている。

彼女いわく「赤色」はどの色より崇高な色であり、何よりも愛でる存在だという。

種族は、妹と同じくスキマを操れるというところから妖怪の様だが、

抜き取った赤色を手の中で螺旋状に保つ事が出来る、赤色を使用していないスペルを無効にする等、紫には無い能力も持っている。

いずれにせよ、今のところ詳細はまだはつきりとは判っていない。

名前の由来は

虹色で最後にある紫色とは逆にある最初の色である赤色、其の読みは

紫の「ゆかり」の由来となったと思われる「縁」の別の読み方「ふち」から。

No. 2 〈暁闇の妖怪〉ゴーラ (G o l a)

赤の館「蒼魔塞」への道中で見張りをしている、赤の一人目の配下である妖怪。

見た目はルーミアそっくりだが服装や髪、目の色が異なる。

また両目には放物線を重複させた様な、紅い丸を重ねた幾何学模様がある。

闇を操るルーミアとは逆に、此方は光を操る事が出来る。

ただし人の言う事を鵜呑みにするなど、知能はルーミアとあまり変わらないようだ。

ルーミアとは違い、家畜の肉や人肉は苦手の様で、逆に野菜を好んでいるらしい。

ただし、赤い色の野菜に限る。

ルーミアと同じようなスペルを使うが名前が一部変わり、全て赤紫か、赤黒い光を使った攻撃となり、範囲が広くなったりと全体的に強化されている。

フェアリー・ロードやウォルモとは仲が良く、いつも三人で遊んでいる。

名前の由来は

おそらくルーミアの一種の由来になっただろうスペイン語で「ルーミア」(lumi
a)が

意味する「のど」をラテン語に訳した「ゴーラ」(gola)から。

暁符『ライト・アダプテーション』

赤から授かった「赤色」の影響より使えるようになった

ゴーラのスペル。

体内に「赤色」の作用で光を生成・貯蓄していき、数十秒後に其を轟音・衝撃波と共に一気に発散させ、周辺を焼き払う大技。

威力・範囲ともにトップクラスを誇るが其の分モーションが大きく、

日中以外で使用すると威力が半減、更に一度使うと反動でしばらくは使えなくなる

という欠点をもつ。

名前の由来は

瞳に起こる現象の一つである「明順応」の英名、

「ライトアダプテーション」(Light Adaptation)から。

No. 3 フェアリー・ロード (Fairy Lord)

No. 4 〈湖上の焰精〉ウォルモ (Warmo)

「蒼魔塞」への道中を巡回する赤の二人目、三人目にあたる配下。

見た目は大妖精、チルノにそっくりの妖精達だが、

どちらも赤色が基調で、ウォルモは氷ではなく炎の羽根を持つ。

要するに「アチチルノ」である。

またフェアリー・ロードは向かって左目に、ウォルモは右目に、

紅いハニカム構造の様な幾何学模様がある。

身体が赤色なのは、赤から授かった大量の「赤色」が原因らしく、本当の色はフェアリー・ロードは紫色、ウォルモは黒色を基調としている。

フェアリー・ロードはウォルモを「ちゃん」を付けて呼び、親しくしている。

その一方で、赤の事は「マジエステイ」と呼び、敬語で接して忠実である。

大妖精と違い、実は狡猾で嗜虐的で特にウォルモ一筋であり、彼女の機嫌を損ねた者は徹底的に痛めつけないと気が済まないらしい。

要するに「Die妖精」である。

ウォルモはフェアリー・ロードの事を「フェーちゃん」と呼び、親しくしている。

基本的にはチルノとは性格は変わらないが、本物と違いすごく簡単な計算問題や何故か二倍になっていく掛け算なら解く事が出来るらしい。

チルノと同じようなスペルを使うが名前が一部変わり、全て炎と蒸気、溶岩を使った攻撃となり全体的に強化されている。

双方ともゴーラと仲良しで、巡回を命じられる前はいつも一緒だったという。

名前の由来は

フェアリー・ロードは元の大妖精が妖精の中では強い部類に入る事より

「妖精の有力者」を意味する「フェアリーロード」(Fairy Lord)から。

……其のままである。

ウォルモは、チルノの一種の由来になったと思われる「寒気」を意味する

英語「チル」(Chill)に対し、「暖かい」を意味する英語「ウアーム」(Warm)から。

暁符『フェアリー・ルーラー』

赤から授かった「赤色」の影響により使えるようになった

フェアリー・ロードのスペル。

自身から「赤色」の作用で生成された自分を模した赤色の影を大量に

放出し、相手に殺到させる技。

其のまま一体が対象を拘束し、その他大勢で持ち運んだり、本体も一緒になって集団でダメージを与えたり好き放題が出来る。

まさに彼女にとってはおうってつけのスペルである。

ただし力も分散してしまい、本体を含む一体の与えるダメージは極端に少なくなるため、致命傷を与える事は出来ない。

名前の由来は

「妖精の支配者」を意味する英語「フェアリー ruler」（Fairy Ruler）から。

暁符『ミラーージュ・マルチプリケーション』

赤から授かった「赤色」の影響により使えるようになった
ウォルモのスペル。

自身の身体から「赤色」の作用で生成された紅い蒸気を大量に発散させ、
其の中から自分の分身を作り出す技。

其の数は二人から四人、四人から八人と数分で二倍ずつ増えていく。

二倍の掛け算をウォルモができるのは、此のスペルの為かも知れない。

分身は全てウォルモ自身のスペルを使い、更にフェアリー・ロードのものとは違い

力も分散されないため、それぞれがスperlによつて致命傷を与える事も可能である。しかし此の分身は、蒸気が蔓延している場所でしか存在出来ないため、蒸気が吹き飛ばされる、空気を冷やされる等で消えてしまうのが難点。

名前の由来は

「蜃気楼」を意味する英語「ミラーージュ」(Mirage)と、
「掛け算」を意味する英語「マルチプリケーション」(Multiplication)か
ら。

オリキヤラ（？） 達の解説②◎

No. 5 〈色想の境界〉 八雲 赤（やくも ふち）②

前回にも紹介した今回の異変の黒幕であり、八雲紫の双子の姉である。

最近はこの御方の作品の感想世界を見てまわっている内に、前まで気付けなかった新たな事象に取りつかれ、喋り方も少しフランクになっている。

更には恋愛について考えるようになったらしい。どうやら恋い焦がれている相手もいるとか。

此の章で新たに、彼女が『英知の結晶』と呼んでいる精密機械を製造して利用している事が判った。

其の形は様々で攻撃手段として用いたり、自身の身体能力の上昇、更には自身の生活に役立てたりと用途も多岐にわたる。

また、配下からの要望に見合った『英知の結晶』を造り、其等を給与している。前回に紹介した赤色を帯びていない攻撃を無効にするという能力も、

此の『英知の結晶』が原因の様だ。

しかし、無効にできるのはあくまでスペルに限られ、赤色を帯びている帯びていないに関わらず、直接攻撃は受けてしまうという弱点を晒している。

好きなもの、事は赤色、頭に良い食べ物、勉強、読書、実験、そして想定内の成功、嫌いなもの、事は赤色を侮辱した者なら誰でも、怠惰、そして想定外の失敗である。

化者『赤色之他人（あかいろのほかひと）』

現在、判明している赤のオリジナルのスペル。

「赤色」を身に纏い、幻想教に住むあらゆる住人に化ける事が出来、

化けた住民が使用するスペルと似た様なスペルが使えるようになる。

主に赤い部位を多く持っている住人を好んで化けている様だ。

其でも赤い部位が少ない、または無い住民に化ける場合には「赤色」で無理やりにも、服や髪等を赤く染め上げて化ける。

そして化けると必ずと言って良いほど、赤と化けた住民の語尾が混ざってしまう。

・例（魔理沙に化けた場合）「私は至って普通の人間だぜですわよ？」
 （マミゾウに化けた場合）「ホホホ：其は其は面白い冗談であるのうね」

もはや文章としても怪しいものとなるが、此は化けた後でも自分も大事にしたいという赤の見解が招いてしまったものである。

他にもオリジナルスperlは沢山存在すると言われているが、未だ確認は出来ていない。

名前の由来は「全く縁のない人」を示す「赤の他人」から。

No. 6 〈華人小姐〉藍 雪（らん しえ）

「蒼魔塞」の門を守る赤の四人目の配下。

紅 美鈴とそっくりの外見を持っているが髪や服の色が異なり、帽子の文字も「龍」か

ら「蛟」に変更されている。

顔の右半分から右腕にかけて紅い菱形の幾何学模様がある。

美鈴と同様に門を守りながらもシエスタをとり、赤や二人の側近、そして彼女が認められた

来客に対しては非常に丁寧で、来客に関しては快く迎え、親切に要塞を案内してくれる。

しかし本性は其の者以外や自分が格下と判断した者はぞんざいに扱う、非常に陰険なものである。

皮肉、罵詈雑言は勿論、暴挙に出る事も珍しくはない。

よっていつもトラブルの中心に存在し、他の配下達からの印象は最悪となっている。

特にヘフェリー・ウイズダムとは対立関係にあり、彼女や司書のリトル・シファーに怪我を負わせた事は少なくない（詳しくは後述参照）。

名前の由来は「赤」を意味する中国語「紅」（読み方：Hong2）に対して

「蒼」を示す中国語「藍」（読み方：Lan2）と、

「美鈴」（読み方：Mei3 ling2）同様に中国で実在する名前である「雪」（読み方：Xue3）から。

暁符『近朱者赤（きんしゆしやせき）』

赤から授かった「赤色」の影響により使えるようになった

雪のスペル。

全身を「赤色」で構成された鎧で固め、外部からの攻撃を防御する。

更に赤と同様、赤色を帯びていないスペルも無効にするようだ。

完璧な防御を伴う半面、かなり重い鎧を纏うため動きが鈍くなってしまうが……

名前の由来は「交わる人によって良くも悪くもなる」という意味の中国の成語

「近朱者赤、近墨者黒（朱に近い者は赤く、墨に近い者は黒い）」から。

No. 7 リトル・シファー（Little Cipher）

No. 8 〈英知と日向の少女〉ヘフェリー・ウィズダム（Hefeli Wisdom）

m)

「蒼魔塞」の四階の外に存在する大図書館の管理をしている、小悪魔とパチュリーにそっくりな

赤の五人目と六人目に当たる配下。

やはり他の配下と同様、姿形は似ているものの赤色は一切無く、主に青色を基調とした

配色になっていて、ヘフェリーの帽子には月ではなく太陽の飾りが付いている。

シファーは向かって右目に荊の様な幾何学模様、ヘフェリーは向かって左目に五角形の幾何学模様がある。

シファーは基本的にヘフェリーの補助を行っている。

格上、格下の者に関わらず優しいが、主にヘフェリーの対しては忠実でもあり、危険が及べば身を挺してでも守ろうとする。

最近ではヘフェリーが外出した後の図書館の管理の代理を務めている。

彼女が「赤色」の力を使用し、館内で着替える際は図書館の入口を守っている。

立ち寄る者が例え赤であっても通さない（彼女は其を知ってて敢えて立ち寄らない

が)。

ヘフェリーはパチュリー同様、今までは大図書館の管理を任せられ、館内で本ばかりを読んでいたが最近はその外の世界に興味を持ち始め、赤から支給された『英知の結晶』である「魔導メモ帳」に

外の世界の魔法を収める為に出掛けるようになり、非常にアグレッシブになった。胃潰瘍を持病に持っている。

主に「魔導メモ帳」に収めた他の魔法使いの弾幕を扱う他にパチュリーの七曜の魔法による弾幕を蒼くし、強化した様な自身の弾幕も放つ。

双方とも雪とは相性は悪く、彼女からしょっちゅう怪我を負わされている。

名前の由来は

リトル・シファーは元の小悪魔にもある「小さい」を意味する英語「リトル」(Little)と

暁の墮天使「ルシファー」(Lucifer)から。

ヘフェリーは名前はパチュリーの由来ともなったと言われる植物「パチュリー」(Pa

tchouli)と同じシソ科の植物「ポゴステモン・ヘルフェリー」(Pogostemon helferi)、

名字はパチュリーの名字である「知識」を意味する英語「ノーレッジ」(knowledge)の類似語に当たる「英知」を意味する英語「ウィズダム」(wisdom)から。

暁符『ミドル・シフアー』

赤から授かった「赤色」の影響により使えるようになった
リトル・シフアーのスペル。

自身の細胞に「赤色」が作用し、細胞の成長、強化を促す。

そして頭の翼の根元に新たに紅い二本のねじれた角が生え、其の影響か

全体的にサイズアップし、着ていた服がキツキツになるが、本人は気にしていない。
むしろ相当に喜んでいる模様。

動きも全体的に速くなり、更に大玉弾幕のほか、角で突くという近接攻撃も

加わった為、全体的に隙が少なくオールマイティな戦法が可能となる。

但し威力は上がらず、変身前と同じく此という決定打が無いのが弱点。

名前の由来は、「中間の」を意味する英語「ミドル」(middle)と変身前と同様、暁の墮天使「ルシファー」(Lucifer)から。

暁符『クリムゾンドラゴン』

赤から授かった「赤色」の影響により使えるようになった

ヘフェリーのスペル。

恐らく名前はパチュリーの金符「シルバードラゴン」を真似して付けられたと思われるが、

此方は実際に龍に変身する。

幾何学模様と同じ五角形に近い堅牢な鱗をもった紅い龍であり、大きさは上半身は博麗神社と同じ大きさであり、下半身を組み合わせると其の倍以上になる。

翼と腕は別になっている。

暁符『ミドル・シファー』とは違い、「赤色」を自分の細胞に作用させ、

崩壊と再生を素早く繰り返して巨大化させるので、当然着ている服は引き裂けてしま
う。其の為

シファーは其の時の為のヘフェリーの服のスペアを沢山所持している。

「赤色」の影響で吐く炎や弾幕は全て赤色に変わり、腕の薙ぎ払い等、広範囲に及ぶ肉弾戦も行える他、制限時間もないため、強力無比なスペルである。

しかし、其の膨大な霊力の消費と疲弊により一日に一回以上使用すると、完全に変身出来ずに身体の一部を舌に残したまま不完全な状態になるという短所がある。

名前の由来は其のまま「赤い龍」(Crimson Dragon)から。
余談だが赤い龍は悪魔の王、サタンの化身ともされている。

プロローグく蒼ざめる幻想郷

青より蒼い夢◎

REIMU

く博麗神社

私、博麗霊夢は目を開けていた。

私は、多分寝てたんだと思う。

上半身を起こして目をこする。

床が固い。神社の縁側ね……此処は。

変に頭も痛かった。

あたりはすっかり暗くなっていて、顔をあげると神社の真上に青白い満月が出ていた。

「？」

すると目の端で、私は隣に誰かが寝ていることに気付いた。

ソイツの方に顔を向けた。

私の知ってる顔だった。気持ちよく寝ている。

でもその姿を見たたん、私はギョツとした。

急いでソイツを揺さぶって起こしにかかった。

「ちよつと、アンタ……！起きなさいよ……！」

肩を持って執拗に揺さぶる。何度も何度も……

「くくさん……何よ、霊夢う……?!」

寝ぼけながら紅魔館の主、レミリア・スカーレットは目を開けた。

そうか……私は、いつものように神社に遊びに来た彼女と

一緒に桜を見ながらお酒を飲んでいたんだっけ……

そして酔っぱらって、知らない間に寝てしまったのね。

此の頭痛も、其が原因か……

レミリアが眠そうにしながら上半身を起こした。

でも私は、其の姿から目が離せなかった。

………変わりすぎていたからよ。

?姿かたちが変わってる?

違うわ。化け物にはなってるない。

能力は化け物じみているけど、見た目は、ちゃんと幼い少女の姿のままよ。

じゃなかったら、肩を揺すって起こせる訳ないじゃない。

……ひとつ、言葉が足りなかったようね……? ?

……『色』が変わりすぎていたからよ。

リボン、大きな瞳……本来、血の様な赤色であるべきポイントが
全てが青色になっていた。

おまけに羽の内側や服の薄いピンクの部分は水色になっていた。

「!!な、何よこれ……!!?」

レミリアが自分の身体の異変に気がついたみたい。

自分を見下ろした青い瞳が、驚きのあまり縮んでいくのが見えた。

「アンタ、何が起こったの……!!?」

「判らないわ……気がついたらこうなってたのよ……!!」

すると、私の方を見たレミリアが両手を口にあてた。

常時カリスマがあふれている彼女にしては、あまりにも似合わない動作だった。

「?..?..どうしたのよ?..?」

私は聞いたけど……何となく、嫌な予感がした。

「そういう霊夢も、青くなってるわよ……!?」
「!?何ですって……!?」

私は慌てて自分の姿を見下ろした。

レミリアの言うとおりに、私の服の赤い部分が全て青色になっていた。
頭から外したリボンも見事に青色になっていた。

「私まで……どうしてこんな……!?」

訳が判らなかつた。

きつと、酔っぱらって寝ていた時に何か起きたに違いない。

でも、その何かが判らなかつた。

本当に……いったい何が……?

するとレミリアが、こんな事を言い始めた。

「判った、霊夢……寝ている間に私を着換えさせたんでしょう!?」

で、自分も着替えて御揃い……なんて言わせないわよ!!」

「!? バツ……／＼／＼そんな事するわけないでしょ!」

私だって酔っぱらって寝たんだもの!! そんな余裕なんて無いに決まってるじゃない!!」

「どうするのよ、此じゃあ……スカーレットじゃなくなってしまうわ……!」

「霊夢!! 私の元の服は何処だ!?! 返して頂戴!!」

「! だからそんな事聞かれても、私は知らないって……!」

「危ないから其の青い槍、しまつてよ!!」

「!? あああ……! 『スピア・ザ・グングニル』まで……!!」

其から責めたり、反論したり、弾幕で威嚇しようとしたり……

私達が口論を続けていると、

「お困りの様ね……二人とも?」

声が聞こえた。

私はそれを聞いて顔をゆがめた。

……異変の原因が判った気がする。

ジビビ……バチチチチ……!!!

そして雑音とともに、私達の目の前で空間が裂けた。
思わず溜息がこぼれる。

レミリアも察したらしい。顔に嫌悪の表情があった。

「まったく……やっぱりアンタが原因なんでs」

そう言いかけた私の口が止まった。

目の前に開けられたスキマから現れたのは例の如く、大妖怪である八雲紫だった。

でも、いつも見ている紫とは違和感があった。

見慣れた道士服の服の紫の部分が、全て赤色に変わっていたからだ。あと、何故か赤色の眼鏡をかけていた。

「ゆ、紫………アンタも………色がおかしくなってるわよ!？」

私は、紫の服を指差して震えた声を上げていた。

紫は黙っている。

そして口を開いた。

「……………私を紫と間違えるとは……………」

……………え？

「どうやら……相当な程に、紫が世話になつてる様ね」

……お酒の飲み過ぎたかもしれない。

紫の口からそんな幻聴が聞こえたんだから。

だが隣を見るとレミリアも啞然としている。

此の幻聴は、彼女にも聞こえていた様だ。

「…アンタ……紫じゃないの？」

「じゃあ誰だ？……名前を言え!!」

私とレミリアはそんな幻聴を真に受けて立ち上がり、
身構えようとしたが、フラフラだった。

……ちよつと、本当に飲み過ぎたかもしれないわね……
目の前にいる赤い紫は、静かに答えた。

「私の名前は八雲 赤（やくも ふち）。紫の双子の姉よ」

しばらくの沈黙。そして、

「はああああああああああああああああああああああああああああああ
!!!!????????」

私とレミリアは驚いた。

いや！え……………?!

紫に……………紫に、姉がいたなんて……………！しかも……………双子の……………!?

確かに、顔や容姿は妹の紫と瓜二つだった。

だが、マイペースでいつも私達から迷惑がられている紫に対して、

こっちは完全に落ち着いていて、紫よりも知的なイメージがあった。

「お前……………どうして眼鏡をかけてるの？」

「私はぐうたらな妹と比べて勤勉でね……………どうしても視力が落ちてしまうものなのよ」

そして、朗々と話し始めた。

「貴方は一度は聞いたことがあるはず……妹達の名前の由来を。」

紫、そして其の式である橙、藍も、虹の色から来たと言われるという事を」

……あつた。

紫についての話は、前に香霖堂でその店主、森近霖之助と何度かした記憶はあつた。

恐らく、ほんの一説に過ぎないであろう紫の名前の由来……

そして彼女の、紫の私に対する役割……

「橙は夕焼け、藍は夜空の色……紫は……その中間にあたるわ。」

でも、もっと大事なことを忘れているわ……最も大事な事を」

「？大事なの……？」

そして、赤紫は赤色の眼鏡を指でくいと上げて言った。

「其は赤。紫とは対をなし、夜明けを表す色……終焉を意味する紫に対して

始まりを意味し、活発、行動力を象徴する色ね」

ピンときた。

「!まさか……お前が、私達から赤色を……!?!」

だが、レミリアが私の先を越して紫の姉に叫んでいた。

「……そうなるわね」

否定の色は微塵も見せなかった。

するとレミリアが、怒りをあらわにして構えた。

いきなり両手を前に出し、偽紫に向ける。

「運命『ミゼラブルフェイト』!!!」

両手から出る無数の青い鎖の様なオーラが、相手に殺到した。しかし、其が到達する前に、其等は消えてしまった。

「！え……！？！」

レミリアが驚いている。自分の技が消えた理由を理解できてない様だった。赤紫は顔に微笑を浮かべていた。

舌打ちをしながら、今度は姿勢を低くした。

！此の構えは……！！

「『デーモンロードクレイドル』！！」

次の瞬間、回転する青いオーラを纏いながらレミリアが偽紫に高速で突進を仕掛けていた。

しかし赤い紫の顔を突こうとした瞬間、青いオーラが消え、勢いを失って、横様に地面に転がった。

辛うじて見えたレミリアの横顔は茫然としていた。

其の上から偽紫が、何もせず彼女を見下ろしている。

そして、彼女は素早く立ち上がり、

バックステップをして私のところに戻って来た。

レミアアの攻撃はすべて、赤紫に届く前に消えていた。
どうなっているの……!?! 吸収されてるの……!?!

「……私は赤色を帯びた攻撃でないと、ダメージを与えられないわよ……?」

赤い紫が不敵に笑った。其処は本物の紫にそっくりだった。

むかつく……!

でも、赤色でないと攻撃が効かないの……!?!

そんなの……今まで聞いたことがなかった。

……何か小細工を仕掛けていそうね……

特定の攻撃を無効・吸収する特殊な結界か、あるいはその類の別の手段か……

「貴方達も其の赤を纏う者達……しかし残念ながら、

貴方達には其の役割はふさわしくない様なのよ……まず、博麗霊夢」

いきなり呼び捨てで呼ばれた。不快で仕方がなかった。

「貴方は巫女ながら活動的なのは良いけれど……物事に対する区別が付かなくなってるわ」

「あー?」

「意味もなく妖怪を退治する……其にはある意味活発を超えて狂的な嗜虐性が垣間見える。」

巫女には本来不必要な感情が芽生えてる。

其は即ち、幻想を乱す原因にも成りかねないのよ……

妹の手を此以上焼かせたくもないしね」

コイツ……紫の姉だけに、私と紫の関係も知ってるのね……

レミリアと同じ様に、小さく舌打ちをした。

「貴方もよ。紅魔の吸血鬼」

赤紫は、今度はレミリアに顔を向けた。

「吸血鬼なら、首から血を吸うだけなら良いもの……

部下に命じ、意味もなく、ただ己の悦楽の為に人を殺し過ぎている。

人間と妖怪のバランスが何よりの幻想郷で、今に脅威になるわ」

「お前に説教される筋合いはない」

「だから、一旦落ち着いてもらう必要があるのよ……

貴方達だけじゃなく、殺伐とした此の幻想郷全てがね。

……其の為にはいったん一つにまとめることが必要な……

だから赤色はすべて私が貰うわ。赤は青となり、幻想郷に静寂が訪れる」

「！ふざけるんじゃないわよ！！下らない事して……！！

其じゃあアンタ、身勝手な紫と変わりが無いじゃない……！！てか、アンタも妖怪な

ら、

何処かで必ず人を襲わないといけないんじゃないっけ!?

レミリアの事は言えないわ!!」

「人を襲うなんて、利己的な妖怪がする事よ」

「！変理屈ばかり言わないで……色を元に戻しなさい!!」

すると赤紫はクツクツと笑いながら言った。

「其は……私の配下を全員倒してからにしない？」

「！え……!?」

「紅魔の吸血鬼……お前の館と反対方向に、私の館がある。

あの蒼い月の出ている方向よ。

其処の屋上までの道中に、私の配下を九人配置した。

全員を倒し、私のところまで来ることが出来たら、其の意見……考えてみるとするわ」

式ではなくて、配下……?しかも、館まで……!?

「流石、姉上様はスケールがでかい様ね……?」

まあ、雑魚じゃなかったらいいけど」

私は辛うじて皮肉を言ったが、完全に無視された。

「妹を倒した貴方達の実力……見せて貰うわよ……?」

ジビビツ……ジビビ……!!!

雑音が聞こえたかと思うと、突然彼女の後ろにスキマが開いた。
マズい……逃げられる……!!

『ホーミングアミュレット』……』

弾幕を放とうとした手を止めた。

手中のお札に書かれていた文字も青色に変わっていたからだ。

「だから効かないんだって……でも、手を止めたのは賢いわね……」

気付けば赤紫はスキマに入って、中から私達を見ていた。

「バイバイ……待ってるわよ……赤本でも読みながらね♪」

「！待ちなさい!!」

ジバチヂイ……!!!

しかし、赤い電気を放ちながらスキマは閉じられた。

青い桜の花びらが散る中、私達二人は立っていた。

レミリアは服に付いた土を払い、青白い満月を見上げている。

私は口を開いた。

「…嫌な夜ね……まったく……楽しく花見をしていたのに……」

「こんな異変、野放しにするわけにはいかないわ！私の手で解決してやる……！」

「！アンタ、珍しくやる気ね、レミリア？」

「プライドを奪われたの同じだからね。霊夢、貴方も当然行くでしょ？」

「当たり前じゃない……つたく、厄介な姉がいたものね……紫にも」

ふと、私の頭にレミリアに聞いておきたいことが浮かんだ。

「でも……咲夜達にはどうするの？ 帰りが遅くなるって伝えた方がいいんじゃない？」

「こんな異変ごときで、知らせる間も要らない……」

夜明けまでには、全てを終わらせる予定よ」

「……アンタと組むのは初めてだけど、

其処までやる気になってくれると此方も異変解決がはかどるわ」

「互いに利害が一致してるからよ」

「どっちでも良いわ……行きましょう！ 夜は短い!!」

そして私達は、夜空に浮かぶ蒼白な月……赤紫の館の方向に向かって
颯爽と神社から飛び立った。

赤色の下に立つ者

ほおずきに宿りし蒼い魂

REIMU

＼月見の森　上空

私達は、とある森の上空を飛んでいた。

目の前には、青白い大きな満月が浮かんでいた。

でも、どれだけ飛んでも其には追いつけなかった。

無論目標は違っていたわ。

其は、此の森の彼方先にある赤紫の館よ。

でも……其の満月を見て、思わず言葉が漏れる。

「……最初はああ言ってしまったけど、やっぱり夜は気持ちが良いわね……」
「……貴方もそう思う？夜は神秘的なものなのよ」

隣で飛んでいたレミリアが私の方を向き、相槌を打ってくれた。

「だからこそ、その夜をけがしたアイツを許せないのよ」

視線を戻したレミリアの顔には、明らかに殺意がこもっていた。
私も月から目を離して、まっすぐに飛んだ。

突然、まぶしい光が辺りを包みこんだ。

あまりのまぶしさに思わず目をつぶる。もちろん急停止もしたわ。

「助けてえ……私、光はダメなのよお!!!」

レミリアが悲鳴を上げながら、私の影に急いで隠れる気配を感じた。

臉の裏から感じるほど強烈な光だ。

たまらず両腕で顔を覆った。

全てが真っ白になった。

瞼の裏から透ける光の量が少なくなったように感じ、私はゆっくりと両腕を下ろし、目を開けた。

私達の目の前に、巨大な光の塊が浮かんでいた。

「!誰!」

私はお札を構えながら叫んだ。

レミリアも恐る恐る私の影から出てきて構えていた。光の塊がだんだんと小さくなっていった。

そして、其の中心から現れたのは……

「!ルーミア!?!」

気がつけば名前を叫んでいた。
レミアアも目を細めている。

ルーミア。

私の神社の周辺に住んでいる闇を操る妖怪。
最近湖の妖精達とグループを作ってるようだけど……
でも、光を操れるようになってたなんて聞いたことがなかった。

其に今の私達や、赤といった紫そっくりの人物のように
服装の色がおかしかった。

リボンや首元のリボンの赤色の部分は青く、

服も白黒が逆になっていた。

黄色いの髪の毛も白く、月の光に輝いていた。

そして両目の周りに、赤い波紋の様な幾何学模様が施してあった。
ルーミアに似たソイツは首をかしげて、

「…ルーミア？あんだ、誰の名前を言ってるの？」

こんな事を言い始めた。

「！え……でも……ルーミアと色違いだけど、同じ格好してるじゃない!!」

私は思わず反論した。

するとそのルーミア似の妖怪はこう叫んだ。

「私はルーミアじゃないわ！私の名前はゴーラよ！」

「！ゴーラ……!？」

今まで聞いたことのない名前ね……

！という事は……！

彼女に揺さぶりをかけてみる。

「……八雲赤が何処か知ってるかしら？」

すると、たちまちにして彼女の態度が変わった。

「！赤様が、此処に立ち寄るものは通さないように仰つてたけど其聞いて納得した！

あんたが『赤色』を取り返しに来たのね!？」

「なら、アンタが赤紫の最初の配下って訳ね……!？」

……にしても、ルーミアが紫の部下って……

妖怪同士といえど、奇妙な組み合わせね？

「答える……お前の馬鹿主はなぜこんな事をする!？」

レミリアが叫んだ。

遠まわしに、『赤色を返せ!!』と言ってるのは私からでも判った。

偽ルミアは答えた。

「平和な幻想を保つにはこうするしかないのよ。

其に青色つてほら、見ていると落ち着くじゃない？人々は争いを起こさなくなるの。

おまけに目にもいいから、鳥目にも効くのかな……つて」

「鳥目はヤツメウナギを食べるのがベストな治療法なのよ。後、目に良いのは青じゃなくて緑色！そんなに青を見ていたら、逆に目がおかしくなるわ！」

レミリアがいかにも「へえ……」つて顔をした。

私の博識に感心していた。

「……とにかく、夜明けが来たらもう此の世界に『赤色』は戻らないわ!!」

永久に赤様のもの!! そうなれば此の世界は、永遠に静かになるのよ!!」

「……そう言ってるお前が静かじゃない」

レミリア、上手いわ。

「だけど良い事を聞いたわ！ちょうど私達もお前達を此の一晩で倒そうと思つてたのよ!!」

レミリアが構え、私も其にならった。

偽ルーミアは両手をバツと広げた。其処はルーミアそつくりだった。ところどころでは、本人と似たところがあるらしいわね……

にしても、此処までルーミアに似るとは……

いったい何者……?!

青いお札は効くのかしら……?!

赤紫の配下なら効かない可能性も……

私は青い模様や文字が書かれたお札を出しながら、そんな事を考えていた。するとその時、

オオオオオオオオ………
!!!!!!

偽ルーミアの両手が赤黒いオーラに包まれた。
そして判り切った、此処に立つ目的を言う。

「赤様は、妹様の為に頑張ってるんだから!!
邪魔はさせないのかああー………!!!」

REIMU

VS へ暁闇の妖怪 ころら

く月見の森 上空

「日符『サンライトレイ』!!」

ころらと名乗ったルーミア似の妖怪は

赤黒い弾幕をバラ撒きながら、両手から赤黒いレーザーを放ち、
其で私達を挟んできた。

まるで本物のルーミアが使う、月符『ムーンライトレイ』みたいな攻撃ね……
フン、そんなレーザー、私達までは届かないもの……怖くなんてないわ!!
私はお札を偽ルーミアに投げようとした。

「危ないわ、霊夢!!」

「!..え……?」

其の瞬間、レミアが私を抱きかかえて上に飛翔していた。

「何するのよ、レミアア!?!」

「さつきまでいたところを見なさいよ……!!」

レミアアにそう言われさつきまでいた場所に視線を向ける。

なんと、私達がいいたところで一对のレーザーが閉じ、更に交差までしていた。
偽ルーミアが私達を見上げて、にやりと笑う。

「危なかったわね……もう少して真つ二つに出来たのに……」

「まさか……本当に閉じてきたの……!?」

「……油断してたわ……ありがとう、レミリア」

「いつもの勘はどうしたのよ！色を抜かれて、調子でも狂ってるの？」

感謝したけど、逆にレミリアに怒られる。

まさか、本人がやらなかった事をやってくるとは……どうやら、
本物のルーミアよりも強いみたいね……！

「どういう原理で似た技を出すのかは知らないけど、退治してしまえば同じよ!!
レミリア、私を持ったまま突っ込んで頂戴!？」

「！どうするつもり……!？」

「良いから行くのよ！早く!!」

そしてレミリアは私を抱え、其のまま後ろに宙返りをして、

「『デーモンロードアロー』!!!」

其処から、高速で偽ルーミアに突っ込んだ。

「!?させないわ……!朝符『ヌーンバード』!!」

対するルーミアもどきは広げた両手を片手ずつを振り、その動きに合わせて

羽根状に広がった赤紫色の弾幕を放って迎え撃ってきた。

弾の数が多くなってるけど……まるで、本物のルーミアの

夜符『ナイトバード』の様な……!!

そんなもの避けるのに苦労もいらぬ筈よ!!

レミリアは向きを微調整し其の弾幕の一波を丸ごと、時には

隙間に入ったりしてかわし、偽ルーミアに接近した。

「今よ!私を投げ飛ばして!!」

レミリアが其の言葉に質問する間はなかった。

私は勢いそのまま放り投げられ、弾幕の間をまるで狭い穴を通る一本の矢の様に
かいくぐり、突っ切った。

遂に私とルーミアの偽者の間に弾幕はなくなった。

私は飛ばされた勢いそのままですぐにしていた体勢を変え、
脚を思いっきり振り上げた。

「『昇夢』!!!」

ゴツツツツツ

!!!!!!

私の脚はタイミング良く、偽ルーミアの顎をとらえ、

其のまま大きく上に弾き飛ばした。回転しながら飛んで行く。

私は完全に勢いを殺して、敵が飛んで行った方向を見上げた。

ルーミアもどきは何とか体勢を立て直し、

自分の唇をぬぐい、手の甲に付いた青い血を見ていた。

赤色が抜かれた影響は自分にまで及んでいるのね……

私からしたら、其処までしてあの赤紫に仕える気がしれなかった。

でも……疑問があつた。

あの目の周りの模様はどうして赤色なの……？

レミリアが私のところに飛んできたのが、目の端で見えた。

私と同じように敵を見据えている。

「つゝゝゝ……な、なかなかやるね……!?!」

唇をもう一度擦りながらそう言ってきた。

口についていた青色は完全に消えている。

「じゃあ……」

彼女は再びにやりと笑い、

「赤様から授かった、とっておきのスペルを見せてあげるわ!!」

そう言うと、いきなり身体を縮ませた。

すると両目の周りの波紋模様が赤く輝き出した。

と同時に、偽ルーミアの両目がグルンとひっくり返り白目になった。

其の直後、ルーミアもどきの身体も光り始めた。

身体から数本の赤い光の筋が漏れてくる。

「!え……!?!」

此のスペルは……私が見たことがあるルーミアの残りのスペルは

闇符『デイマーケイション』だけだった。

でも違う……あのスペルはこんなに溜めが長くはないわ……!

今まで見たことがないスペル……!!?警戒しないと……!!

「レミリアー!」

「判ってるわよ……!」

そう言いつつも、レミリアは苦しそうだった。
だんだん強くなる光に抵抗しているのだろう。

今や偽ルーミアの身体からは大量の光の筋が溢れている。

其の時、私の脳裏に此の後に起きる、ある最悪の予想が浮かんで来た。

此は……まさか………自爆
!!?????

でもその時には、既に偽ルーミアは光の中から大きく叫んでいた。

「暁符『ライト・アダプテーション』!!!」

夜明けへの夜行

REMILIA

VS〈暁闇の妖怪〉ゴーラ

く月見の森 上空

「暁符『ライト・アダプテーション』!!!」

体中だけでなく両目や口からも赤い光の筋を発している、偽ルーミアがこう叫んだ。
其の時霊夢が叫んだ。

「マズいわ!!アイツ、自爆するつもりよ!!」

「!?何ですって、自爆……!?」

其の瞬間、激しい赤黒い閃光が、私達に殺到した。

落ちてるわね……日中の方が力を発揮出来るからかなあ？」

「まあそれは置いて、任務も完了したし、さっさと館に帰って夜明けを待つとしましょう！赤様が計画を完遂なさるのを見届けるのかー♪」

「……くっ……待ちなさい……!?!」

「！あら……誰もいない煙の中から声が……?」

「まだ……ハア……終わって……ないわ……!」

「！煙の中から巫女さんの幻覚が……?後で赤様に、ヤツメウナギを頼んでみようかしら?」

「私は……現実よ!!」

煙の中から、霊夢が出てきた。

水色の結界に包まれている。

「ハア……ハア……」

「!!此は驚いたわ……!森の大半を吹き飛ばした爆風の中を、よく生きていられたわねえ……其の結界のおかげ?」

「……神技『八方龍殺陣』よ、此で……閃光と爆風をしのいだって訳……」

「……アンタこそ、自爆したなら……バラバラに吹っ飛んで……死んだんじゃなかったの?」

「嫌ね、そんな物騒なこと言つて……私は、『赤色』の作用を利用して

体内で作つた光と熱を一気に放つたのよ。使つたらしばらくは撃てなくなるけど」

「くくこ、此れほどの破壊力……アンタ……やっぱルーミアより強いわね……!?!」

「だから、ルーミアつて誰なのさ!?!」

其処でルーミアもどきは、白い目で霊夢の周りを見ながら言つた。

「……でも、もう一人は何処に行つたのかしらね?」

「!?レミア……!?レミア!!」

「どうやら、もう一人は回避できずに焼き尽くされた様ね?……骨も残らずに」

「！そんな……」

「赤様に逆らうからそんな目に遭ったのよ。さ、あんたも青ざめてないで空の藻屑になりたくないなら、帰った帰った！」

……貴方達って、本当に馬鹿ね……？

「!?」

私は、霊夢の後ろに姿を現した。

其を霊夢の肩越しに見た偽ルーミアが、白目をますます丸くした。

………遅いわよ？

「神槍『スピア・ザ・グングニル』!!!」

ドオツツツツツツ

!!!!!!

次の瞬間には、偽ルーミアのお腹に青い槍が深々と突き刺さっていた。其と同時に、剥いていた彼女の白目もグルンと元に戻った。

「~~~~~!!!」

偽ルーミアは、引き抜こうと懸命にもがきはしたが、刺さってるのは青い『光』の槍。其は不可能に等しかった。

やがて力尽きて上半身が垂れ、其のまま動かなくなつた。刺さっていた槍も消えていった。

「まずは……一匹ね」

私は両手をパンパンと払った。

ふと見ると、前の方にいた霊夢がこつちを見ていた。
驚いているようだ。

「……貴方、私が死んだと思った？ 蝙蝠に分身して、貴方の弾幕をかわしてた事くらい覚えてて欲しいな？」

それでも納得してくれる様子はなかった。

「……どうしたのよ？」

「どうしたって……何も…殺す事はないじゃない!!」

……なんだ、そんな事で……

「……言ったわよね？ 私と貴方は利害は一致している、と……」

でも、やり方までは一致しないわよ？ 退治で済ませたところで奴等の意思は

変わらない」

其でも嫌悪の表情をあらわにしていた霊夢に、私は一言付け加えていた。

「……其に赤紫と違って、青い攻撃は効くって判ったんだし」

霊夢は半ば納得して、半ば納得できない様子だった。

パキツ……バキキツツ……!!

「!!」

すると、息絶えたはずのルーミア似の妖怪の身体が、嫌な音を立てて身体や服が青色に染まり始めた。

「……まだ生きてたのね……!?!」

私は、もう一度スペル発動の準備をした。

今度は、其の素首を打ち抜いてあげるわ……！
でも、スペルを発動しようとした途端、

バシユウウウウウ……！！！！

偽ルミアは爆散した。

！！？

ゴーラだった青い塵芥は、其のまま下の森の中に降り注いでいった。

「……………」

しばらく私達は沈黙した。

……赤の配下なのに、蒼い塊で出来ていたの？…………妖怪って判らないわね……

私は沈黙する霊夢に言った。

「…………嫌いになった？偽物が嫌いなら、本物が残る様に調整すれば良いだけなのに…………」

霊夢は黙ったままだった。

私は其を一瞥して無言のまま、再び蒼い月に向かって飛び出した。

霊夢が後ろから付いてくるのが判った。

………霊夢………私は、貴方が考えてる程甘つちよろくはないのよ………？

H U C H I

く
???

ジババ………ヂヂバチイ………!!!

赤い電気とともにスキマが開き、私は其処から降りて地面の土を踏んだ。

「………どうやら、ゴーラがやられてしまった様ね………」

目をつぶった。

冥福を祈るしかないわ……

そして目をあげ、眼鏡を押し上げて私は歩き始めた。

歩いて行くと……いたいた。

あつちも私の存在に気付いたらしく、私がもう一度歩を進めると、数歩もしないうちに片膝をついてうやうやしく礼をした。

目の前にきた私に対して、静かに言った。

「……御待ちしておりました、マジエステイ」

「！良いのよ、そんな堅くならず……肩の力を抜いて？」

緊張してるといざという時に本気を出せないわよ？」

「！では……御言葉に甘えさせて頂きます……」

そう言ったものの、やっぱり緊張してる。

礼儀正しいのは良いけど……やっぱり私としても話しづらいわ……

「御用件とは何でありましょう？」

「！そうそう、貴方達に渡したいものがあるのよ」

そういつて懐から取り出したのは、手の上で渦巻く赤色の螺旋……
其を見た相手はギョツとする。

「!?こ、此は……!」

「そう……『赤色』よ？」

かなり慌てふためいていた。その顔もなかなか面白いわね……

「し、しかし……此を……どうして……貴方様の……」

計画を成し遂げるための……大切な……キーアイテム……では……!？」

「貴方達には特別に『赤色』を多めに御裾分けしてあげましょう。」

貴方達には少し期待しているからね？」

「!!……ありがたく……頂戴させて頂きます……!」

そして片膝をついたまま頭を深く下げ、私に両手を差し出した。

私は、まるで水を流すかのように赤い螺旋を其の手に渡した。

其を大切そうに懐にしまう相手。

「もうすぐ……此処に来る筈だから、しっかり見張るのよ？」

相手は思った以上に強敵らしくてね……ゴーラが葬られたのよ……」

「!!ゴーラが……!？」

「ええ……あの娘にとっては、辛いでしょうけど……」

其処で私は首を回す。

「と……ここで……彼女の姿がないけど……」

「私が貴方様と謁見を賜る間は、一人で見張ると言っていました」

「!……頑張ってるようね?」

「はい、少なくとも貴方様の館の者……そして私以上に励んでいると思われま

「感心、感心♪」

「ですが……ゴーラがやられたと聞いたら、どう思うのでしょうか……?」

其の問いに、私は口を閉じた。

そしてしばらく黙った後、私はこう言った。

「……じゃあ、あの娘にも此の『赤色』を渡して来なさい」

そう言つて私は、別の赤い螺旋を取り出した。

「!!こんなにも……良いのですか?私の分を、彼女にあげるといふのは……」

「貴方達に期待してる分、それだけサービスしてるのよ。貴方の『赤色』は貴方で使いなさい。此は彼女にゴーラの敵討ちをさせる分よ？判った？」

「……恐縮です、マジエステイ……」

もう一度出される相手の両手に、其を流し込む。

今度はしまわず、両手で大事そうに持っている。

「私は行くわ。貴方も早く彼女のところに行ってあげなさい？」

すると相手は弾かれた様に立ち上がった。

「では、私は此で失礼させて貰います……貴方様の計画が完遂される事を……心より願っている所存です」

「ありがとう。くれぐれも気をつけるのよ」

そして相手は、森の中に消えていった。

「さて……館に戻る前に……もう少し戦いを見物させて貰うとするわ」

バチチ……!!!

赤い電気を走らせながら、開けられたスキマ。

其の中の中に入り込みながら、私は眩いた。

「貴方達は何処まで頑張ってくれるのかしら？代えはいくらでもいるけど『赤色』をあげた分……私をどん底までがっかりさせないでよ？」

そして、スキマは閉じていった。

フアイリーエルフ

REMIILIA

く海月の湖 上空

……霊夢……進みが遅いわね……

さっきの事……まだ悩んでいるのかしら……？

私達は、ある一つの大きな湖に差し掛かっていた。

此の湖は空に浮かぶ蒼い月が湖面に反射して、まるで巨大な生物が浮かんでいるように見えた。

博麗神社からはかなりの距離を飛んだ……

もうそろそろ奴の館が見えてもおおしくはないはず……そう思った。

と……

霊夢が叫んだ。

今度は、霧の湖にいる妖精達ね……？

でも、其の姿はさっきの妖怪の様に違和感があった。

普通青色をのチルノは全体的に紅く、

背中には炎の羽がメラメラと燃え盛っていた。

大妖精も紅色だったが、羽がボロボロになっている。

そして表情は柔和なところがあるものの、少し狡猾的な印象もあった。

そして、偽ルーミアにもあった赤い幾何学紋様が

チルノは左目に、大妖精は右目のまわりにあった。

偽ルーミアが円に対して、二人は紅い六角形を組み合わせた様な模様だ。

「チルノ？大妖精?!馬鹿か?!アタイ達はそんな名前じゃないわ!!」

偽チルノが顔を真っ赤にして言った。

そして自分を指し、

「アタイはウォルモ！焔の妖精ウォルモだ!!」

そして大妖精似の妖精を指差し、

「そしてこっちはフェーちゃんだ!!妖精の中でもさいきよーなんだぞ!」

「!?さ、最強だなんて、ウォルモちゃん……私ちゃんとフェアリー・ロードって名前があるんだから」

「!」

少し驚いてみた。

名前があるの?……にしては、変な名前ね……

「二匹ともまつかつかで……赤様の忠実な配下のおでましか……」

私はぼそつとつぶやく。

すると案の定、二匹が即座に反応した。

「！フェーちゃん！コイツ等か！？赤様って言ったぞ！？」

「貴方達……マジエステイを御存知なのね？」

「！マジエステイ……！？！」

私は思わず嘔き出した。

どんな狂信的な臣下……？咲夜もそう私を呼んだ事はないわ。
其を、咲夜より弱い妖精が使うなんて……

「……愚の骨頂だわ」

私は無表情になって言った。

下らん……始末してやる。

「ようし、アタイ達のフェーちゃんいわく、

『まじえすてい』のために頑張っちゃうもんね!!」

すると大妖精もどきが、

「ウオルモちゃん……まずは、私から行かせて?」

「!フエーちゃん?」

「マジエステイの敵は私の敵よ?ウオルモちゃんは力を蓄えておくべきだわ」

「……よし!!ならばアタイは、後ろから『えんどしやげき』だ!!」

「!其処は『えんごしやげき(援護射撃)』だよ、ウオルモちゃん……」

でも、私、頑張るから、ウオルモちゃんは見てるだけで大丈夫だよ?」

「ようし、なら!アタイは『おーえん』を頑張るぞ!!」

フエーちゃん、頑張れえ!!」

そして前に進み出る偽大妖精。

後ろに下がる偽チルノ。

……バカさ加減は本物と変わってない様ね……

「オーエンは、フランだけで十分なのよ!!」

私達は構える。

「フェーちゃん!!いきなりあの力を、見せつけてやれえ!!」

すると其の偽チルノの声に応えるかのように、偽大妖精は眉をしかめて少し怒った表情になった。

!うう………///?ここ、此は………此で………!

「赤様の為にも………お願いします!」

礼儀正しくペコリとお辞儀をした。

其の馬鹿正直な態度に思わず構えを緩めてしまう。

しかし上げた顔には………

輝く赤い六角形模様、剥かれた白い両目、そして残虐に歪んだ笑みがあった。

R E M I L I A

V S フェアリー・ロード

く海月の湖 上空

掌を返した偽大妖精は、ニヤけたまま私達に突っ込んできた。

敵は最初に霊夢の方に狙いを定めた様だった。

彼女に向かって真つすぐ手を伸ばす。

「つ… 『刹那亜空穴』!!」

霊夢が両手を交差させ、構えた。

でも、お互いが接触しようとした瞬間、

消えたのは霊夢ではなく、大妖精もどきの方だった。

「!?」

霊夢が、呆気にとられている。

「! 霊夢、妖精はテレポートが使えるのよ!!」

でも私がそう言った時には偽大妖精は、霊夢の真後ろにいた。

霊夢は気付いて慌てて振り向いたときには、偽大妖精が叫んだ後だった。

「暁符『フェアリー・ルーラー』!!!」

大妖精もどきの紅く輝き始め、其処から大量の赤い彼女そっくりの影が飛び出してきた。

そして霊夢と私達を羽交い絞めにし、メチャメチャに殴ったり、くさび型弾幕を打ち込み始めた。

「!!!
~~~~~」

~~~~~痛い…わね……!?

てか……名前だけでなく……スペカまで……!

有能ね……お前の…配下は……!!

無茶苦茶にされながら内心、内心赤に毒づいた。

「フン、どうやら……アタイが出る幕もないわね!?!」

自分がやったわけでもないのに

羽を更にメラメラ燃やしながらふんぞり返る偽チルノ。
アイツ……コイツの豹変に……気付いてないの……!?

「ウォルモちゃんには力を使ってほしくないわ……」

自分の赤い影達に暴行を止めさせ、羽交い絞めにしたまま偽大妖精は私達の耳元で囁いてきた。

「ウォルモちゃんは今、マジエステイから『赤色』を大量に頂いて

上機嫌なのよ……?」

「!? あ……『赤色』……!?」

霊夢が苦痛混じりに呻いた。

そう言えば森を大半吹き飛ばした、あの偽ルーミアも言っていたわね……

『赤色』を、攻撃に利用してるの……!?

「そう、だからゴーストを失った悲しみが紛れてるの……邪魔をしないでくれる?」

其の『赤色』の影響か、少し赤色に染まった荒い息が霊夢の顔にかかるのが見えた。

「ウォルモちゃんが悲しいのは貴方達のせい……」

なら、私が……ウォルモちゃんの代わりにいたぶる。そして……」

「ウォルモちゃんが、貴方達に止めを刺すのよ!!」

其の声があきつかけに、赤い偽大妖精の分身が一斉に手を振り上げた。

また、私達にダメージを与えるつもりなのだろう……

「!!くくくそんなに……アイツが好きなら……!」

お前がああ世で待っていれば良いわ!!」

私は身体が青色に輝かせた。

「!?」

敵全員、そして霊夢が驚いた。

「霊夢、衝撃に備えて頂戴!!」

霊夢は、何が起こるかが判った様で、羽交い絞めされながらも顔を下にして出来るだけ身体を丸めた。

「紅符『不夜城レッド』!!!」

私の身体から……屈辱的だけど、十字架を模した蒼いオーラが大きく広がった。

「!?フェーちゃん!!!」

偽チルノが叫んだ。

霊夢は備えがあつたからか、それ程喰らつてはないようだった。

でも其以外の至近距離にいた赤色の大妖精達は青いオーラに飲まれ、消滅していった。

本物もオーラからの連撃をまともに喰らつて上空に飛んで行く。

勿論、其を見逃す筈はなかった。

両手を前に出し、飛んでいく偽者に狙いを定めた。

「『チェーンギヤング』!!」

両手から蒼い鎖のオーラが一本、大妖精もどきに伸びていき、

ドズウウウ

!!!!!!!

其のお腹を貫いた。

「~~~~~」
「!!!!?」

妖精は此の程度じゃ死なないのは判つてた。

次は……こうよ!!

消えゆく鎖のオーラに沿って移動し、私はもがく偽物の前に出現する。

「!!?」

いきなり目の前に出てきた私に驚いた様ね……?

白目をますますひん剥いちやつて……逃げがさないわ!

翼を使って偽大妖精の両肩を掴んだ。

さつき霊夢にした様に、私も彼女の耳元で囁いた。

「ちゃんと……友達も連れて行ってやるから、安心なさい?」

そして……

『バンパイアキス』

青い血がしたたる口に私の口をつけた。

「!?>NN>NN>NN>NN>NN>NN>NN>NN>NN>NN>NN>NN>NN>NN>NN」

……私は吸血鬼だが、少食だ。

食事の際に、血を吸いきれずにいつもこぼしてしまう。

だが今回は、出来るだけ大妖精もどきの生気を吸い取ろうとした。

「熱符『瞬間昇華ビーム』!!!」

其の瞬間、三本の赤いレーザーが飛んできて私をかすめた。

大妖精もどきを吸い続けながら、目だけを動かして其の出所を探す。

上空から赤チルノがさつきと同じレーザーを断続的に撃ちながら、叫びながら突進してきた。

「其以上はやらせないぞお!!!」

今の私は動けなかった。流石にアレを乱発されたらマズいわね……

折角…私が捕まえてるのに……

すると何処からか声が聞こえたわ。

『空中昇・天・脚』!!!』

此方に真つすぐ飛んでくる偽チルノのお腹を、霊夢が横からタイミング良く蹴りあげた。

偽者といえど、大きさは只の妖精と同じ。

蹴りの衝撃に耐えられず、乱入できないまま真上に吹っ飛ばされていた。

「ムグヴウツ……!!?」

其の直後、霊夢がすぐに此方に叫んできた。

「此方は私が相手してるから!!やるんだたら完全にやりなさい!!」

其じゃあ後味が悪いわ……!!」

……貴方、やっぱり判ってるじゃない……

ニヤリと笑いたいところだが、そう出来なかったのが残念ね。

「~~~~~!!?!?」

不意に口の中が空しくなるのを感じ、私は口を離した。
偽大妖精は服が赤から元の色だろう、紫色に変色していた。
瞳は目に戻っていたが、顔も痩せこけて皮膚もやや黒ずんでいる。
まるで食べ物数を日間とってないみたいな様だったわね。

「……妖精って、容量が小さいのね？私でもいけたわ」

そして両肩を掴んでいた私の翼が、其のチルノもどきの友達の身体を紙の様に容易く引き裂いた。

再生する様子はなかった。

生気と『赤色』を吸われたから、再生がままならなかったのかもしれない……

バシユオオオオ……！！！！

其のまま大妖精もどきだった断片は、蒼い塵芥となって消滅した。

突然周りの空気が、一気にむしむしとし始めた。

「!?」

な、何と言う湿気……清々しい夜が台無しよ……
でも……

「レミリア!!」

原因はすぐに判った。

「く〜ゴーラだけでなく、フェーちゃんまでもお……!!!」

赤チルノが私の前に立つ霊夢の前で、怒気を纏って浮いていた。

炎の羽根が、此以上ないというくらいに激しい勢いで燃えている。

アイツの羽根が湖の水を蒸発させて、此の湿気を起こしてる様ね……？

(ろくに手伝わなかった、天罰よ)

そう言いたかったけど、此以上刺激して湿気を上げられるのは得策じゃないわと
考え、心の中でだけ其の言葉を投げかけた。

「もう怒ったぞお!!!アタイも『まじえすてい』から貰ったすんごい力、使つてやるうう!!!」

偽チルノが喚いた。

すると、右目の周りの六角形模様が赤く輝きだした。

そして両目が偽大妖精と同じく、グリーンと白目になった。

シユウウウウウ………シィィウウウウウウウウウ………!!!

でも次に偽チルノの身体から噴き出たのは、紅い光ではなく紅い蒸気だった。辺り一面に充満していく。

また湿気が……でも、此は………!

「!・霊夢! 吸い込まないで! 此は私の時の霧と違うわ!!」

「其を私に言う!?!」

私達が口を塞いでいると、やがて蒸気が消えていった。

そして視界がある程度開けると、私達は自分達の目を見張ってしまった。

チルノが四匹に増えていたからよ。

……何……フランの技でもパクったつもり……？

だが蒸気が更に消えて徐々に視界が晴れると、そうではない事に気付いた。

？いや……違うわ……、!?後ろにもう一組……!?

……八匹も……いる!?

ウォルモと名乗った八匹が、普通のチルノでもまず見る事ができない怒りで白熱した顔で同時に叫んだ。

「暁符『ミラーージュ・マルチプリケーション』!!!
アタイ達がお前達を！ゴーラとフェーちゃんのところに入れて行ってやるう!!!」

恋以上に焦がれたおてんば娘

REIMU

VS<湖上の焔精>ウォルモ×8

〜海月の湖 上空

「どうして八人も……!?!」

「相手が多いわ!!気をつけるのよ!!」

湖の上空。ほんのり紅い蒸気から出てきた偽チルノ。

其の誰もが皆、怒りに燃え、歪ませた白い両目を此方に向けていた。

そして私は気付いた。

「もしかして……蒸気から分身体を作ってるの!?!」

でもレミリアが其に応える前に相手が動き出した。

『リトルヴォルケーノ』!!!』

「焰王『ラーヴァキング』!!!」

四人が攻撃を仕掛けてきた。

最初の二人が両手を上に掲げると、赤く光る巨岩を瞬く間に生成した。

そして其を私達に、思いつきり放り投げてきた。

残る二人は浮遊する溶岩を生成し、其処から赤い弾幕を放ってきた。

かわす。軌道は単調だった。

でも、

『マグマチャージ』!!!』

更に四人がいつせいに白く発光し始め、まるで小さな流星群の様に炎の尾を引きながら順番に突進してきた。

何故か魔理沙を思い出したわね……此の流星群は、アイツのよりも荒々しいけど。

横でレミリアが小さく呻く。

「蒸符『パーフェクトスチーム』!!!」

今度は八人が全員大量の弾幕を放った。

此は……凍符『パーフェクトフリーズ』がモチーフね……

「しばらくしたら弾幕が止まる筈よ……凍って……という訳じゃなさそうだけど！

其処から切り抜けるわよ!？」

そして予想通り途中で止まった。さあ、落ち着いて抜け道を見つけないと……
ところが、

ボツゴオオオオーーーーーーン
!!!!!!
バツコオオオオーーーーーーン
!!!!!!

何と弾幕は再び動き出さず、其のまま爆発し始めた。

!?!まさか、爆発し始めるなんて……!?!

「レミリア!!此方に来なさい!!」

来た。…傍を離れないでよ!?

「夢符『封魔陣』!!」

札を足下に掲げ、青白い結界を出現させた。

ボカアアアアアア—————ン
!!!ドカアアアア—————ン
!!!!!!

私達は何度も爆風に飲まれた。

でも…何とかやり過ごせた。

私は息を切らせながら、八人のチルノを見た。

レミリアも私から離れて見ている。

すると、

「三……二……一……」

偽チルノ達が、一齐に何かを数えだした。構える。

…カウントダウン？……何が起ころの…？

「……ゼロオオ!!!」

シューウウウウウー……!!!

すると同時に、蒸気の中からさらに偽チルノが出てきた。

え…一、二……八人から十六人に増えた…倍の数を一気に……!?

「増えたわ増えたわ…早くしないと、次はアタイが三十二人になるよ!!」

…なんでアンタが計算ができるのよ…!!?

「次増えたら…タコ殴りにして!!燃えカスにして!!あの世でも二人に

タコ殴りにされるが良いわ!!」

数では有利になっても、敵達の顔には余裕の表情は出ない。怒りしかない。いつものチルノなら出すのに……よほど悔しかったのね……

でも、此以上増えられたら流石に厄介だわ……と言つてもどれが本物か…

まだ見分けもつかないし……

思わず歯ぎしりが出た。

するとレミリアが私にこう言った。

「霊夢、アレを……雨乞いをして。雨を降らせるのよ!」

「!?何でいきなり……!」

「蒸気って熱いでしょ？だから、冷やせばどうかなるんじゃないかしら？
蒸気からアイツの分身が作られてると思うなら尚更でしょ？」

……其の手があつたわ。

私はすぐに両手を合わせ、気を集中させる。

「私の事は良いわ……思う存分降らせなさい!!」

そして私はスペルを宣言した。

『雨乞祈り』!!」

そして其のまま、

「ハアアア………!!!」

私は空中でさかさまになって、足で御祓い棒を回し始めた。

……随分とキテレツな格好だけど、此でも立派な雨乞いよ？

サアアアア……ズアアアアアアアア……

!!!!!!!

すぐに雨が降り始めた。

「……『特注の日傘』」

レミリアは傘を取り出して雨をしのいでいた……でも其、日傘って言ったわよね？
下を見る。湖に映っていた大きな月が雲に隠れ、見えなくなっていた。

レミリアの言ったとおり、赤色の蒸気が消え、其に伴ってチルノもどきの
分身も霞のように消えていった。

一人だけ残った、本物の偽チルノが白目をますます剥いて驚いていた。

「!?アタイの分身が……消えていく……!?

折角作った、アタイの……分身が……!?」

其処にすかさず、レミリアの爪が横に振られた。

ズバシユウウウウウ
!!!!!!

偽チルノの身体が横に真つ二つになった。

其の顔は驚いていた。

「今よ、霊夢！再生を阻害するのよ!!」

私はとっさに近寄り、二つの切り口にお札を張り付けた。

「此で……接合しての再生ができなくなった筈……!!」

「ねえ……」

赤チルノの背中で燃えていた炎の羽は、いつの間にか消えていった。雨のせいではないと思う。

身体の「赤色」が消え、どす黒くなっていた。

本来の色に戻ったんだらう。瞳も戻り、右目の文様も消えていた。

本物よりも、ずつと潔かった。

「アタイって……一人の『たたき』を取れないの？……『赤色』があれば……何でも出来るって……赤様が……言ってたのに……？」

其の目には青色ではない、透明な涙があった。

ゆつくりと落ち始めるチルノもどきの半身達に、レミリアは静かに言った。

「……信じる相手を、間違えたのよ」

速度が速まり、二つの身体が落ちていく。

そして両方とも青色になり、蒼い塵となって雨に混じり消えていった。

「……………」

気がつけば、雨は上がっていた。見下ろす湖には、何事もなかったかのように小さな星達と大きな青白い満月が沈んでいた。

でも、何事もなくても、私には濡れた髪があった。其で証拠は十分だった。

私は、目をつぶった。

傘を畳んだレミリアが、私に静かに言った。

「……私の言う事、まだおかしいと思う？」

「……いいえ」

……そう言ってしまった、自分がいた。

でも、不思議とそんな自分を咎める事が出来なかった。

「……行くわよ、霊夢」

「……ええ……」

先を急ごうと振り返った私は、あるものが視界に入ってきた。

「………？」

森の遙か向こうの夜空に立つ、赤く光る柱。

其も一本や二本どころではない……

何十本もの赤い光の柱が、ゆらゆらと左右に傾いている。

其の中心にあつたのは塔。

少し複雑な形をしているが、此処からでも見えるとなると、かなり大きいわね……

そして、周囲の柱の光の反射して、赤色になっていた。

あんな建物、あつたかしら……？

?……………赤い……………?
!!!!

「!!あれが……………もしかして……………!」

「……………どうやら、終点が見えてきたようね」

いつの間にか近くに来ていたレミリアは、其等を見て笑った。
何だ……以外に近かったのね……

「さあ、さつさと突入して、赤様と御対面と行くわよ!？」

私達は、赤い柱がうごめく敵の本拠地に真っ直ぐ飛んでいった。

赤光の蒼要塞

赫光と星空の挟間で

REIMU

く蒼魔街 上空

「!此処が……!」

私達は敵の本拠地の上空にいた。眼下の光景に絶句していたのだ。

其処には、全体的に暗い青色の建築物が並ぶ一つの里があった。

其のあちこちから遠くからでも見えた、何本もの赤い色の光が夜空に伸びていた。其等が四方にゆつくりと休むことなく傾いている。

「此じゃ……館どころか、一つの里よりも広いじゃない……!」

アイツ……いつの間にこんな場所を……!?!」

「霊夢」

隣でレミリアが私を呼んだ。

「此処の建物……木じゃなくて、全て鉄で出来ているわ」

「!?鉄……!?」

「此じゃまるで要塞よ。あの赤泥棒は、此から戦争でも

始めるつもりかしら……?」

私は、とっさに疑問を投げつけた。

「でも……こんな大量の鉄……何処から発掘できるのよ!?

そんなの不可能に等しいわ!!」

「霊夢……アイツは紫の姉なのよ?」

納得が出来た。

そして私達は上を見上げた。

要塞の中央には蒼い月が浮かぶ星空を突き刺すかの様に、そびえ立つ藍色の塔があつ

た。其の途中からは、太陽と三日月をモチーフにしたようなモニUMENTが突き出ていた。

「あの塔の頂上が……偽紫の言っていた……」

「なんて悪趣味な……でも、意外に早く終われそうね……此の異変」

私達は呟いた。

其の時、

バンツツ
……

!!!!!!!!!!!!

塔の下でうごめいていた赤い光の柱が、突然消えた。真っ暗になる。

「!!」

私達は身構えた。

光源が青白い月だけになり、其の優しい光が要塞全体を包む。

そして再び、

バツ!!!
バツ!!!
バツ!!!
……

再び紅い柱が出現したが、今度はうごめかず、一点に向かって一本ずつどんどん伸びていった。

そして、其の赤い柱が最も重なった部分に浮かんでいたものがあつた……

「赤!!!」

異変の元凶がスキマに座って此方を見ていた。

最初に出会った時の道士服ではなく、紫が春の異変の時に着ていたドレスに変わって

いた。

赤い光に照らされているから判らなかつたが、きつと赤色を基調にしてるに違いない。

「フフフ……貴方達が此処まで来るといふ事は、

既に計算の中に組み込まれていた……全てお見通しなのよ」

数多の赤い光に照らされ、赤い顔でそう言った。其の顔にはあの不敵な笑みが広がっていた。

「横からレミリアが歯ぎしりをするのが聞こえた。初対面の時の屈辱を思い出したんだらう。」

「でも、歓迎しないとね……大事な、大事な御客様ですもの……」

そう言うのと赤はスキマから腰を上げて空中に浮かんだ。

スキマが放電しながら閉じていく。

そして、両手を拡げ、

「ようこそ……わが本拠地『蒼魔街』へ……そしてようこそ、わが館……『蒼魔塞』へ!!」
全然嬉しくない。其を無視していると、

「……驚いてたでしょう? 下から照らす、赤い光の柱達に……? 此、外の世界では『サーチライト』というものよ? 今は『スポットライト』になっちゃっているけど」
レミリアが其も無視して、赤に詰め寄った。

「……主が出向いてくれるとは……配下より早く死ぬつもりか?」

「! 其は計算上あり得ないわ……」

赤は其に答え、

「私はただ、今までの闘いを見て貴方達に興味を持って来ただけ……」

『赤色』を抜かれたにも関わらず、此処まで辿りつけた其のヴァイタリテイ……

何が……貴方達を突き動かしているの？」

逆に質問し返してきた。

今度は私がすぐに答える。

「……アンタに『赤色』を抜かれたからよ」

しばらくの沈黙……

そして、

「……私に当然の報いを与える為か……そう言うと思ったわ」

赤がスキマを開き、手を入れて何かを取り出した。

「私は人間を殺したわけでもない……興奮の鎮静を促がしただけ。

其に落ち着く事は迷惑な事じゃなく、逆に良い事なのよ？其をあたかも悪い事に決めつけて……ナンセンスだわ……誠に」

ガチャア……！

そして、其を右手にはめる。音からして金属の様だった。

「やはり、貴方達は嗜虐性に取りつかれている……でも、其は此の際

どうでも良いわ……其より重要だと思ふ事は……」

そう言いながら私達の方を見て、

「……其のヴァイタリティは確固たるものではないと、今、私の中で証明させる事よ」

すると其の身体を何処から出てきたのか、赤い螺旋が覆い始めた。

「ついでに来客だもの……サプライズを披露しないと……」

そしてすっかり螺旋で覆い隠され、見えなくなつた……

次の瞬間、

ボフウウウウウ——ン

!!!!!!!

赤色の大爆発を起こした。

私達はとっさに腕で顔を覆い、飛んでくる赤い粉塵を防いだ。

風がやむのを感じて、腕を下ろす。

目の前で赤い煙が、消えて行く途中だった。

其処から現れた姿は……

紫色の衣装、そして燃えるような赤い髪。

其はまるで………

「魔理沙……………?!?」

昔の魔理沙にそっくりだった。

両目に赤い星を組み合わせたような幾何学模様。

不気味に剥かれた白目を除いては。

そして乗っていた箒も木ではなく、赤い金属で出来ていた。

「!? 霊夢……………あれが…魔理沙なの…?」

レミリアは、今とは全く違う魔理沙の姿に驚いているようだ。

「ふむ……………計算した通り、完璧な出来の様なね……………」

魔理沙に化けた赤は自分の身体を見下ろし、そして右手を握ったり開いたり、確認をとっていた。

其の右手には変身前と同じ様な金属がはめられていた。

箒と同じような色をしていた。

「!あれは……手甲か……?」

レミリアが再び目を見張った。

だが、私にとつては其は二の次だった。

新参者が……どうしてそんな過去の事を知ってるのよ……!?

「ア、アンタ……どうして昔の魔理沙を……!?!」

すると赤は、当たり前のように、

「?私は紫の姉なんだぜなのよ? 妹が創った幻想郷の過去、現在……全て知ってて当然だよ」

レミリアにも、同じ様な事を言われた。

そして赤はこう付け加えた。

「……何故魔理沙に変身したのかは無論、『赤色』の力でただけどね？彼女のデザインに関しては……今より昔の魔理沙の方が好みなんだなのよ、私は」

……語尾が今の魔理沙と紫がごっちゃになっていた。

「まさか魔理沙は昔、赤色の髪の毛だったなんて、思いにも寄らなかっただろうでしょうね、

紅魔の吸血鬼？ウフ……ウフフフ………」

笑い方はそっくりだった。ムカつく……！

「…此を応用すれば、どんな種族の住民にも変身できる事が可能なんだなの……まあ……今は魔理沙で我慢してるんだがですけどね？」

!?どんな種族の住民でも……!?

じゃあ下手をすれば……別の強敵に化けられる事も……!?

厄介ね……!!

そして偽魔理沙は手甲をはめていない左手をあげ、

「二人にも、照射!!!」

バババツツツ
!!!!!!!

其の瞬間、私達にも下からそれぞれ数本の赤い光の柱が一斉に当てられた。思わず目をつぶった。レミリアが悲鳴をあげるのが聞こえた。

「此の光は赤くても太陽の力を一切含んでいない……安心するのが一番だぜわよ？」

慌てふためくレミリアに対して、偽魔理沙は言ったが、

その言葉に、その状況を楽しんでるかの様な響きもあった。

其が今の魔理沙と重なった。

思わず舌打ちをしながら御祓い棒を構える。

キユイイイーン………ヴァチチチイイイイ………!!!

赤が装備した右手甲の掌から赤い光が漏れ、放電し始めた。

「私の配下と連戦で疲れたでしょう？少し、休憩させてやるあげましょう………」

そして其の掌を私達に突きつけながら叫んだ。

「さあ！大幅に手を抜いてやってあげるから!!」

私自身で貴方達のヴァイタリティを試してやるぜあげるわ!!」

暁の器 C a s k e t o f D a w n

REIMU

VS へ魔法と紅夢からなる存在 八雲赤

く蒼魔街 上空

昔の魔理沙に変身した赤紫は、突きつけた右手甲の掌から、

「愛符『マスターブレイズ』!!!」

いきなり赤い放電とともに赤黒い色のレーザーを放ってきた。

あの太さ……手加減する気がないわね……!?

私達は身を翻して、其を避け、私は其処からスペルを発動した。

「珠符『明珠暗投』!!」

でも、発動してしまった、と思った。

すぐに三つの蒼白の陰陽玉が飛んでいき、偽魔理沙に当たる瞬間に案の定消え失せた。

「残念……此の状態でも、赤色以外の技を受け付けられないぜわよ!」

すると旧魔理沙の乗っていた箒の両端の先端部分……穂と柄の先が曲がり、其処から横向きにそれぞれ左右反対方向に、赤白い炎が噴き出された。

「あの箒……機械仕掛けね……!?!」

「私の英知の結晶……機械の力、見せてくれるわ!!」

赤が叫ぶと、

「赫符『ミリ秒コラプサー』!!」

其の噴射を利用して箒ごと駒の様に回転し、赤黒く放電しながら此方に突進してきた。

私はすぐに止めた。

「さっき見たでしょう！忘れたの!? アイツには赤いスペルでないと攻撃が通らないのよ!!」

「!! ～～チツ……!!」

せつかくのチャンスなのに、此のまま放っておくとやがて目眩から回復して再び強力な技を出してくるに違いない……

どうすれば……

其の時、私の頭に疑問が浮かんだ……
待って、じゃあ……じゃあ『アレ』は……どうなるのかしら……？

「霊夢!!」

レミリアの声に気が付いてみると、偽魔理沙が目眩を払う様に頭を振り始めていた。

ヤバいわ……目眩が覚める!!仕方ない……一か八かよ!!

私はすぐに敵の懐に飛び込み、

「『衝夢』!!!」

其のお腹に思いつきり御祓い棒を突っ込んだ。

ズドオオオオオン

!!!!!!!

やっぱり入った。深くめり込む。

「!?ゴッフエ……!?」

痛みのにけぞる偽魔理沙。私はすかさず、

「『亜空穴』!!!」

私はワープをして、偽魔理沙の上に出現すると、

ガシヤアアン
!!!!

其のまま赤の頭ではなく、乗っていた箒に蹴りを入れた。

「!?ワワツ……!?」

衝撃で揺れる箒に慌てる偽魔理沙。

私は蹴った時の反動で宙返りをしながらレミアの元に戻った。

赤も体勢を戻していた。お腹を右手で押さえている。

「くく…流石…いや、やるなですわね…!?」

確信した。アイツにも弱点がある事が……

「今ので赤、貴方の防御に穴があるのが判ったわ……」

「…どういう事よ、霊夢!？」

レミリアが詰め寄ってきたが、気にせず続けた。

「アンタ…赤色を含んでいないスペルを無効にするんでしようけど、其はもともと赤色を使ったスペル限定の様ね……」

「!!」

相当驚いた様だ。偽魔理沙の顔に衝撃の色が走っていた。

今度は私が、不敵に笑った。

「でも、もともと赤色を使用していないなら、スペルでも技でも通用する……
其がアンタの弱点よ!!!」

そう言い渡すや否や、赤は

「フフ……ウフフフフ……」

おかしそうに笑っている。そして、

「アハハハハハハ！此は予想外……素晴らしい……まさに世紀の大発見に相当するぜわ
!!!」

箒をもっていない右手甲で仰ぐ顔を覆いながら大笑いし始めた。

だが其の時、

ボンツ!!!!
「!?キヤア!?」

赤が乗っていた箒が小さな爆発を起こした。
どうやらさつきの蹴りが効いた様ね……

「わ、私の作った英知の……結晶が……!?」

偽魔理沙がガタガタ言っている箒に必死でつかまっていた。
私はますます得意げになった。

「どれだけ精密に作られても……強い衝撃を与えたら、機械なんて一発よ!」
「く……もう壊れるなら……必要はない様だなですね……!?」

偽魔理沙が震えている箒から飛び下りた瞬間、

た。

「!?何…何が起きてるの…!?」

突然明るくなっていく視界に焦る私達。

紅い螺旋達は、其のまま偽魔理沙の身体の中に吸い込まれ、吸収されていった。『赤色』を抜かれた他の光の柱達も、たちまち青白くなっていった。

視界が明るくなったのも其が原因だろう。でもお陰で、お互いや相手の色や姿がはっきりと区別できるようになった。

！そうか……

「……あれで、私達から『赤色』を奪ったのね……!?」

そして光の『赤色』を全て吸収し終えた赤は身体をもとの様にひろげた。両目を閉じた顔も上げる。

其の目がカッと開かれた。

「!!」

白目ではなくなっていたが、白目の部分が血の様な濃い赤色、戻ってきた瞳は黄色に変色していた。

そして、左手にもいつの間にか右手とおなじ赤色の手甲がはめられていた。きつと、さつき吸い取った『赤色』で精製したに違いない。

「目の色を変えてきた……って訳ね？」

「本気になるのが遅いのよ……!」

怯みから立ち直り、臨戦態勢に戻る私達。

でも其に構わず、赤は左手の鎧を黄色い瞳で確認しながら、

「……貴方は『赤色』があればなんでも出来る事を否定した……」

!コイツ……偽チルノの戦いを見てたのね……!?

今や両目の周りの星模様は燃えるように赤く、禍々しく輝いていた。

赤が両手を私達に突き出した。掌にある八卦炉の様な模様からさつきより激しく赤い放電が起きていた。

「ウフフフ……ならば、其は本当だということを、今、証明してやるぜわよ!!」

「………と言いたいところだけど………」

突然赤が、其の両手を下ろした。

「……QED」

「!!?」

QED? え……??

「それはどういう……!?!」

「……化者『赤色之他人』……解除」

すると偽魔理沙の紅い煙が吹き出し、一瞬で元の赤の姿に戻った。
目の色も戻り、両手にあった手甲も消えていた。

「戦意喪失……!?!死ぬ覚悟が出来たのかしら!?!」

其の態度にレミリアは逆に怒りの声を上げた。

だが赤は、静かに言った。

「貴方達は、私の弱点に気付いた。私は、其処から貴方達のヴァイタリテイの不動性を導き出せた。即ち、どちらにも利が与えられた」

赤は、まるで最初からそうする予定だったかのような口調だった。

「其で良いじゃない……」

「何のつもりだ!？」

「……事實は必ずある。其は己で考えてみなさい。宿題よ」

！思わぬ場所で課題……何処までも苛立てせてくれるわね……!!

「さてと、提出してくれるなら入口からいらっしやい？」

言っておくけど、いきなり上空から屋上に突入しようならば、課題ごと結界に焼き切られるわよ？」

「!ウグ……!？」

隣でレミリアが呻いた。そうするつもりだったらしい。

そうだと思った。あんな見え透いた目的地に易々と近道を用意してる訳がなかった。自分の命がかかっているのなら尚更だ。

ジビビビイイ……!!!!
!!!!!!

彼女の後ろに赤い電気とともにスキマが出来た。

赤がスキマに入っていた。

「首を長くして待っているわ。夜明けまでに全ての配下を撃破して私を説得してみせなさい?」

課題も忘れずにね?其とも……」

赤がスキマの中から振り返り、微笑と共にこう言った。

「本気で戦う方が楽しみかしらね？フフフフ……」

バリイイ……バチバチイイ……!!!!!!

そしてスキマが赤い電気を放ちながら閉じ始めた。

「！待て!!赤い!!!」

「！ちよっ……レミリア!!」

茫然としていたレミリアがふと我に返ったように、スキマに向かって飛びかかって行った。

でも彼女が辿り着く前に、スキマは閉じられた。

「フフ……フフフフ……」

元に戻っていた赤の笑い声が響き、そして完全に気配が消えた。

白いサーチライトが私達を照らすのを止め、再び上空を照らしていた。
もう、私達を捉える事は無い様ね……？

「くく課題だと……何様なのよアイツは……!？」

「さっきの赤の言葉からすると……きっと残りの配下も皆、あの塔の中にいるのね」
「残り六人……何としても徹底的に探して潰してやるわ!!」

レミリアは再び赤を取り逃がした事で、半ば逆上していた。

「！落ち着いて、レミリア……まずは其の入口が判ってないんだから……」

いったん地上に降りて、入口から探すわよ!？」

そうやって私は身を翻し、真下に向かって高速で飛翔した。レミリアも其に続く。そして藍色の地面にぶつかる瞬間に身を起こす。

街道の沿って飛び、私達は前方に見える暗い青色の巨塔に向かった。

赤と配下は使いよう

REMIILIA

く蒼魔塞 門前

私は塔の周りを一周してようやく入口らしき場所を見つけ、其処に着地していた。降りた場所から数十メートル手前に門があり、其の奥に天をも突き刺すような塔がある。

だが、私の表情は晴れてはいなかった。

「……………」

其の門の前に、紅い甲冑が寝ていた。

最初鎧が捨てられているのかと思つたが、わずかに動いてる。

其に、大事な事を忘れていた。

赤色のものが、今此の世に残っているわけがなかったのだ。

「あの赤い甲冑……アイツ、赤の配下の様ね」

「起きる前に私が仕留めてやる……霊夢、後ろの建物の陰に隠れてて頂戴？」

惨劇が嫌なら目を瞑ってるが良いわ」

自分の手で始末しなかった。

奴……赤には見えてる筈だ……配下達が次々と惨殺されていく様が……

自ら戦いから逃げて生き長らえた事を、後悔させてやる。

霊夢が後ろに下がって建物の陰に消えていくのを確認した後、

私は門前赤い甲冑を纏った配下に近付いて行った。

目標の目の前まで来た。大の字になって寝ている。まるで酒を飲みすぎた、愚人のようだった。

此の様子……街の上空で繰り上げられた私達の戦いを見ていなかったのかもしれない。
い。

主のピンチだったってのに……同じ主である私は余計に腹が立った。

すぐに右手を大きく振りかぶった。

「其の素首、ブチ落としてやる……！」

其の手にみるみる青いオーラが溜まり、巨大な青い爪と化した。

だが相手は、強大な霊力を放出してるにもかかわらずまだ寝ていた。

間抜けな奴だ……此から死ぬというのに、其の危険も察知できずにいるとは……！

愚か者は死んだ方がマシだ!!

「悪魔『レミリアストレッチ』!!」

いくら堅い防御も一切効かない私の最大の物理攻撃。

モーシヨンがとてつもなく大きいのが難点だが、相手が寝ているため、関係無かった。

私は自分の青い爪を、相手の赤い兜に振り降ろした。

ガアーン
!!!!!!!

金属音が響いたが飛んだのは敵の首ではなく、私自身だった。
弾き返されて、思わず仰け反っていた。

(!?効いていない……!?)

すると、

「!?」

其の衝撃で起きたのか、敵は下げていた兜を突然上げて此方を見た。
クツ、気付かれた……仰け反っている今を攻撃されたら……
だが、

「!?おわ、おわわあわわわ………!!!」

甲冑は攻撃しようとせず、大慌てで立ち上がると、敬礼をした。

「マ……マステア様!!私……断じてサボっていませんよ!?!」
「……………ハ?」

マステア? 誰だ? コイツ寝ぼけているのか?

「……………誰のことを言ってるんだ? お前は誰だ?」

すると甲冑は、

「! 貴方様に決まっているではありませんか!

其に判りませんか? …… 私ですよ!」

当然の様にそう言うのと兜を脱ぎ、脇に抱えた。

其の素顔を見て、私は驚愕した。

「美鈴…!?!」

兜の下から現れた顔は、紛れもなく私の紅魔館の門番、紅 美鈴そのものだった。

だが、兜をとった拍子にフワツと広がった髪の色は藍色で、

帽子の色は緑色だったものの本物よりは薄く、どちらかというところエメラルド色に近い

かった。

其処についていた星には「龍」ではなく「蛟」という漢字があった。

両目も白色で顔の向かって左半分には、ダイヤの様な模様が規則正しく並んだ様な紅い幾何学模様があつた。

其の顔が話してきた。

「その御様子……まだ赤様から『赤色』を授かっていないのですか？

私は授かつて此の通り……さつそく活用していますよ」

美鈴似の妖怪は全身を纏う、真紅の甲冑を見下ろした。

「暁符『近朱者赤（きんしゆしやせき）』……門番にはぴつたりだつて赤様は仰りました。喜びましたよ……赤様やマステア様方を御守りするのに最適ですもの」

其の時奇妙な感覚に襲われた。

ちよつとまで……？

私は片手を頭に当てていた。汗が出てくる。

何を言ってる？……さっぱり判らない……！

私は……何だ……何か他人と間違われている……!?

私から……『赤色』を奪った、あの忌々しい奴の配下に……!?

其に間違われる事等……！そんな事……今までで一度もなかったのに……？
500年間そんな事は無かったのに……!?

頭が混乱していた。何を言われているのか頭に入らなかった。

一度も味わったことのない経験は、こんなにも感覚を狂わせるのか……？
く……！『赤色』と一緒に思考回路も抜かれてしまったか……!?

『赤色』は私達の未来を切り開いてくれるんです！あの御方を気に召さないとはいえ、

貴方様も意固地にならないほうが賢明だと思いますが……」

内容は理解できなかったが、美鈴の声が頭に響いた。気が付けば、もう片方の手でも頭を押さえていた。

駄目……此のままだと発狂しそう……！

「今のソイツに、何を言っても無駄よ」

後ろから声が聞こえ、私は振り向いた。偽美鈴も私の肩越しに声の主を見た。広い街道の真ん中を、霊夢が此方に向かって歩いてきた。

私は安堵した。其の様子を耐えかねて、出て来てくれたんだらう。

あのままだと、理解も出来ない様な言葉の渦に飲まれるところだった。だが次の霊夢の言葉が、其の感情を粉々に打ち砕いた。

「だってソイツは、記憶を失ってるんだもの」

……ハ???

……ど、どういう事だ……記憶？いつそんな設定になったんだ？

せつかく展開の糸口が見つかったっていうのに、ぶり返させるつもりか？

其に気のせいか、いつもの霊夢と態度が違っていた。

いつも喰ってかかる様な様子がなく、クールキャラになっている。

霊夢の姿を確認した美鈴似の妖怪は、

「！誰だお前は？勝手に此の場所にその足を踏み入れるな」

途端に態度を変えた。

本物の美鈴もあまりしない様な高圧的な態度だ。妖怪の山の天狗共と張り合えるレ

ベルだった。

「私がアンタの主を連れて来たのよ」

霊夢がそう言っても、

「嘘をつくな。本当の主は赤様で、マステア様方は其の側近だ。そんな事も判らないのか？」

偽美鈴の態度は変わらなかった。

「名を名乗れ。さもなければ帰れ。蒼世界の俗物が」

普通の霊夢ならキレてもおかしくない程の言い様だった。

だが、霊夢は霊夢らしからぬ平静な態度で、腕組みをしながら、

「私は名乗る主義はない……しかし、あえて名乗るなら……」

博麗悪夢（はくれい あくむ）かしらね？」

もちろんそんな名前の筈がない。霊夢の嘘だ。

よくもまあ、そんな単純な名前を口に出れたものね……

「博麗……赤様が警戒しろといった輩共を信用できるわけがない」

偽美鈴が唸るように言った。其に霊夢は溜息をつきながら、

「……私は、もう赤様の方に鞍を変えようと思ってるね。姉が結界を守ってるらしいけど、私はもうどうでも良くなったのよ。大変だし。面倒だし。」

そう思つて赤様のところに行こうとしたら、アンタの言う蒼世界でコイツが彷徨つていたのよ」

全部……いや、大体は嘘っぱちだ。

霊夢の姉なんて見たことが無かつたし、私は最初からずっと一緒だった。

結界の管理を疎ましく思つてるのかは微妙だが。

だがそう言った途端、偽美鈴の態度が、

「そうでしたか……悪夢さん。マスター様を此処まで連れて来て下さり、ありがとうございますました」

「またも180度変わっていった。御辞儀までしている。

もう、まさに天狗の態度にそっくりだった。

偉い偉い味方にはへーこらして、余所者には威圧をかける……此の美鈴、世渡りが上手そうね……」

「…あ、申し遅れました……私は此処、『蒼魔塞』の門番、藍雪（らん しえ）と申します。御嬢様……此の名前に、何か思い出される事がありますか？」

自己紹介した其の時、悪夢が何故このような芝居を打っているのかが判った気がした。

思わず笑いたくなるのを堪える。

フフフ……そう言う事だったの……

なかなか面白い事思いつくじゃないの……
お前が其処まで考えてるなんてね……

なら、私も……其に便乗するまでよ！

「！あ……！あああ……！……雪……聞いた事のある名前……！
何となく思い出す事が出来たわ」

口裏に合わせた。

「！思いだされましたか……！？」
「ええ……少しは」

でもどうやら、と私はわざとらしく顔を曇らせてみる。

「詳しく思い出せない事から私は……此処での記憶を完全に……全て失ってしまったてる様だ……」

「此処の構造も……お前の言う赤というのが、何をなさろうとしてるのかも……そして……」

「そう言つて顔を両手で覆う。」

「思い出も……全て……」

「そして指のわずかな隙間から敵の顔色を窺う。」

「予想通り、偽美鈴はシヨックを受けていた。」

「そしてとどめといわんばかりに顔を上げ、懇願する様な目付きでラツシユをかけた。」

「だから此の中を案内をしながら、思い出を……蘇らせて貰えない？」

「ついでに雪の口からも話してくれると助かるんだけど……」

「其に気が変わったわ……私も『赤色』を受け取る！屋上に案内して貰えない？」
偽美鈴は真正面から止めを受けてくれた。

「！勿論ですとも……マステア様が仰るなら……悪夢さんもどうです？」
顔を悪……霊夢にも向けて、聞いた。

「ええ……私も仲間入りする前には是非とも知っておきたいと思つててね」
霊夢も門の傍の壁に寄り添い、腕組みをしながらクールに答えていた。
内心は飛び上がりたいに違いない。
すると、

ガシヤアアン
!!!!

美鈴似の妖怪の後ろの門が開き、彼女も嬉しそうに言った。

「お帰りなさい、マステア様！そしてようこそ、悪夢さん！私、藍雪が赤様の所まで案内します!!」

そして私達は雪と名乗った偽美鈴の後に付き、開けられた門を通り、巨大な塔の入り口の中を歩いて行つた。

其の時、私の傍を歩いていた霊夢が、私の耳の傍まで近付き……………

こう囁いたような気がした。

「計画通り」……

赤と蒼の境～Azure Land～

REIMU

～蒼魔塞 ロビー

私達は入り口を通り、大きな広場に辿り着いた。

「此処が、ロビーですよ」

藍雪という美鈴似の妖怪が、説明をしてくれた。

びつくりした。

沢山の石のアーチ……地面に広がる蒼い魔法陣……

これじゃ色以外、紅魔館と其と何も変わらないじゃない……

「！せっかくの御嬢様方の前で、此の格好は失礼ですね……」

すると剥かれた白目で赤い甲冑を纏った身体を見下しながら、雪が眩いた。

「暁符『近朱者赤』、解除！」

すると纏っていた赤い甲冑が、雪の体の中に吸い込まれて消えていった。

それによつて雪の全体の服装が明らかとなった。

帽子と同じ薄い緑色のチャイナドレスで、黒い下穿きを穿いている。

赤い菱形をちりばめた幾何学模様は顔の右半分だけでなく、右腕にまで及んでいた。

「！気になりますか？此は赤様によつて『赤色』が授けられた証ですよ」

雪が私達の視線に気が付き、右手を前に出して菱形の紋様を見せてくれた。

戻っていた瞳が腕の向こうから私達を見ている。

ゴーラやウオルモ達も、赤に『赤色』を刻みこまれていたのね：

私にとつては、其は何か：呪いの証としか思えなかった。

「と、ころで……」

レミリアが雪に聞いた。

「私の名前……マスターって一体どんな人物なんだ？」

雪が其の質問に答え始めた。

「貴方様は、此の『蒼魔塞』の主、八雲赤様の側近の一人、
マスター・アズール様です」

……成程、『スカーレット（赤）』じゃなくて、『アズール（蒼）』って訳……
其に側近……上手い具合に配置につけたわね……赤……

「ですが側近ながら、貴方様は赤様とあまり仲が良くありませんでした。

赤様が勤勉家で、構ってくれなかったのが原因だったんでしょ……

其故よく、貴方様は夜のうちに一人で何処かに遊びに行かれていました」

少し困った顔をしながら、雪は言った。

子供扱いされていたのが気に食わなかったんだろう。そして、私が連れてきたという嘘が通じた理由が判った。まるで自分がされているかの様に、レミリアは明らかに不快な表情を見せた。無論、雪には見せずに。

「メイド妖精はいるのかしら？誰一人見当たらないけど……」

今度は私が訊いた。

言った通り、廊下には私達以外誰もいなかったからだ。

「ええ、いらつしやいますよ。変わらずメイド長のもとで熱心に活動しております。待宵 知流（まちよい ちる）というメイド長です」

！また出てきた……今度は、咲夜の偽物の名前ね……？

レミリアが、私が一番聞きたかった事を真つ先に聞いてくれた。

「ソイツは、時を止められるのか……？」

「！大体は合っていますが、少し違います、マスター様。
彼女は『時を戻す程度の能力』です」

！『時を戻す』……？咲夜が使えなくなっていた能力じゃない……
そして階段を上り、私達は2階、そして3階へとたどり着いた。

REIMU

く蒼魔塞 3階

私達が昇り切った階段から一步踏み出そうとした時だった。

「！御二方、御待ち下さい！」

「!?どうしたのよ……」

突然雪が私達を手で制し、一人前に静かに歩いて行つた。前方を目を細めながら見て

いる。

そして懐から小さな石を取り出すと、近くの床に放り投げた。
其の石が金属の床を叩いた瞬間……

バシユバシユウウウウ

!!!!!!!

「!!?」

其の左右の壁から無数の槍が飛び出した。

そして、まるで番犬の牙の様に石を粉々にしていった。

「全く……また罫を解除してないな……あの駄メイドは」

そう毒づく様に言うと、傍の壁にあった金属の蓋をあけた。
そして其の中にあつた配線盤をいじり始めた。

「~~~~~」

すっかり面食らったレミリアがワナワナとしている。

ヤバイ……此処でキレられたらうっかり事実をしゃべってしまう可能性がある……

「……ど、どうなってるのよ、此は!?!」

レミリアが怒る前に、代わりに私が雪に少し怒ったような口調で言った。

少しキャラを崩した方が効果的だと知っていた。

すると操作しながら、雪は再び態度を変えた。

「……すみません……此の階からは、対侵入者用の罠が大量に仕掛けられていて入り口に

一番近い此処で稼働を制御できるんです。本来はメイド長の役割なのですが……」

カチツ

音が響くと、槍が静かに引いて行き、壁の中に収まっていた。

雪は溜息をついて蓋を閉めながら、呆れた顔で言った。

「何を思つてか解除し忘れる事が多くて……其でよくメイド妖精の何匹かが死にます……恐らく、間の抜けてる部分があるんですよ」

物騒ね……其の鉄壁故、内部で死ぬ奴が出ているなんて……

でも皮肉にもアンタも、侵入者達を其の鉄壁の中に通してくれているのよ……
人の事は言えないわよ？

「さっきの質問の答えはどうなったの？メイド妖精はどこに行つたの？」

さっきの話を蒸し返してみた。

此処まで下手に出してくれるなら、利用して更に聞き出してやるまでよ……
するとさっきまで質問に答えてくれていた雪が突然口ごもり出した。

「其は……恐らく……始まつた……から……だと……」

「!待て……」

レミリアが呟いた。私にも嫌な予感がした。

「?どうされました?」

雪が聞いてきた。

其処で、レミリアは考え込んでいた。

いつにも増して深刻な表情だ。

そして、口を開いた。

「私には……妹は居るのか……?」

すると、偽美鈴が、

「私は……妹様は……好きではありません」

重々しく言った。明らかに嫌悪を抱いた表情だった。

嫌な予感が的中した。やはりレミリアの偽物にも、妹がいた。

「なんて……名前なの……？」

私が聞くと彼女もまた、深刻そうな表情で話しだした。

「……マドウレート・アズール様。赤様のもう一人の側近です」

レミリアの妹、フランドール・スカーレットの偽物に違いない。

「あの御方は、御言葉ですが……残虐極まりありません。人を選んで殺します。

あの御方自身が気に入らないと思つた者を、自身の快樂のために……

……遺体は……影も形も残りません」

バサア……！！！！！！
バサア……！！！！！！

遠くから凄まじい咆哮と羽音が聞こえてきた。

グラグラ……！！！！

其と同時に塔が少し揺れ始めた。

「！な、何……此は……!?」

私は轟音の中を叫んだ。

「くまさか……崩れるんじゃないでしょうn痛ああ!!」

レミリアがバランスを保とうとして、逆に地面に転んだ。
飛ぶ暇もなかった。

「くどうやら……帰ってきたようですね……」

！もう一人のレミアアの事？……にしては、あんな声は出さない……

でも此の羽音……巨大な蝙蝠にでも変身するのかしら？

雪が近くにあった、紅魔館には無い窓の外を見て確認しているらしく、

そして窓から離れて私達に来るように催促した。

私達は転ばない様にゆつくりと近付き（途中雪が私達を支えてくれた）、其処から外を見た。

すると信じられない光景が飛び込んできた。

蒼魔街の上空から此方に、巨大な赤い飛龍が此の塔に向かって飛んできていたのだ。

勿論、動いていた白いスポットライトに一斉に照射されていた。

「あ、あれは……!?!」

今度こそ冗談抜きで驚いた。

すると、声が聞こえてきた。其はまるで頭の中に響いているかの様だった。

『おや、マスイ……帰ってきていたのね』

「!? お、お前は……?」

『言わなくても大丈夫……全て判っているわ。貴方が記憶を失くしている事はね!?!?』

(間違った方向に) 見抜いている……? 此の声の主、何者かしら……?
声は頭の中に響き続ける。

『そして、隣にいる、見慣れない部外者は?』

多分私の事だろう。少しムツとしたが何とか堪えた。
其に対して雪が答えた。だが声の調子は変わっていた。

「今日から私達の仲間となる、博麗悪夢さんです」

『へえ……博麗……赤様が嫌っていた連中ね……?』

「御言葉ですが、此の御方は赤様に忠誠を誓うと仰ったのですよ? 近くにいらっしやら

なかった

「貴方には判りませんでしようが」

露骨に嫌そうな調子が含まれていた。

そうこうする内に巨大な真紅の龍が、塔から突き出ている太陽のモニユメントの上に降り立った。

するとまた声が響いた。

『門番は門番らしく門に帰れ。後は私が引き受けるから』

「貴方は外ばかり出ているせいで、塔の構造を理解なされてないでしょう、ヘフェリー様!？」

『理解出来てるからこうしてるのよ、ド低能が…貴方こそ、そんな所にいて誰か

余所者にもでも侵入を許してみなさい。今度は真っ先に妹様の御道具になるわよ?』

其を聞いて雪の顔がサアーツと青ざめた。

やはり、気に入らないものとしての対象は身内にも可能性があるらしい。

『貴方達…私の処に来て……4階の外に通じる渡り通路の先……』

太陽のモニュメントの中がそうよ……其にもう一度顔が見たいわ、マスイ』

『シフアー！着替えを持って来て頂戴！』

すると大人しくしていた龍が、赤い霧となつてモニュメントに吸い込まれていった。そして、頭の中に響いていた声も聞こえなくなった。

レミリアが近付いて呆然としていた雪に訊いた。

「……あの声は誰だ？あのドラゴンが発していたのか？」

雪はハツとして顔を振り、説明してくれた。

「ヘフェリー・ウイズダム様……あの太陽のモニュメントの中にある図書館を拠点にしている、

アウトドア派の魔女です。外の知識を得る事が趣味で、私達の事を構ってくれません。『蒼魔塞』の恥さらしも良いところですよ」

パチュリーの偽物と美鈴の偽物は、どうやら関係がよろしくないらしい。

其はさっきの会話からでも判っていた。

「あの龍の姿……恐らく、赤様の『赤色』の力でしよう……ですが、ますます外に出るようになり、

ますます私達の事に気をかけなくなってしまうました。調子に乗るのも大概にして欲しいです」

最後の部分は怨みがましく、ぶつぶつと言っていた。

「……行かなくて良いの？ 惨殺されるわよ？」

此処まで情報をくれたなら十分、後は追い払えばいいわね。
下手に戦闘も起こしたくはないし……

「!! 申し訳ありません……私は……此で……」

「門番、頑張るのよ？」

！上手いわ、レミリア……此処で其の言葉は最適ね……

「! マステア様……では、失礼します……御二方……良い夜明けを……!」

そして雪は踵を返し、まるで逃げるかの様にもと来た階段を降りて行った。

「……………追わないの?」

私は階段を見るレミリアに小声で尋ねた。

「良いの、情報をくれたし…何だか可哀想だし、生かしてあげるわ…邪魔をしなれば」

レミリアは無表情で言った。此は……後で殺す気満々ね。

「さて……………此の上の階よね、4階って……………」

私は天井を見上げた。

「ふん、図書館……パチュリーの偽物から先の様ね……………」

レミリアはそう言ってズカズカと歩いて行った。

「！ちよ……！待ちなさいよ……！」

私は慌ててその後を追いかけて行つた。
まったく……そそっかしいんだから……

ソレユ魔法図書館

REMIILIA

蒼魔塞 4階

コツツ……コツツ……

私達の足音が、暗い廊下に響き渡る。

4階が上がっても、やはりメイド妖精は一匹も見当たらなかった。

「綺麗ね……」

後ろから霊夢の声が聞こえてきた。

「何が？」

「月よ」

多分、窓から月を見てるんだろう。サーチライトの後ろで輝く、大きな蒼白な満月を

……

「今は前を見て歩いた方が良いわよ？」

前を向いたまま言った。

「！どうしてよ？」

「もしかしたら、解除し忘れた罫があるかもしれない……あの反抗的な門番が、わざとね」

「！アイツ、あの様子は完璧に作戦に嵌っていたわよ!? 私達を、完全に

信じ切っていたじゃない!？」

「いずれにせよ、警戒するに越した事はないわ」

見たいのはやまやまだった。が、敵はそうさせる暇もくれない筈だ。

此の私にさえも……

く……！赤め……!!

「ちよつと、何処行くの、レミリア!？」

後ろから霊夢に呼び止められた。

「!何よ!?!靴紐でもほどけたの!?!てか、アンタの靴に紐なんてあつたっけ!？」

苛立っていた私は、思わず訳の分からない罵詈雑言と共に振り向いていた。

少し離れた壁際にムツとした顔をしていた霊夢がいた。

だが、すぐに壁を親指で指しながら言った。

「此の扉じゃないかしら?こんな目立った扉を通り過ぎるなんて、吸血鬼は本当に

太陽が苦手なのね?ん?」

……此の皮肉は流石に甘んじて受けとめようか……

言い過ぎた事に少し萎えながら、霊夢の処に戻って其の指された壁を見た。確かに、目的地に行くための扉の様だ。赤い扉に大きな太陽の紋章がある。こんな目立つ扉に気付かないとは……！
く……！赤め……！！

「私の所もこんな扉があったらな……太陽じゃなくて月なら完璧なのに」

私は呟きながら、扉の右部分を押した。霊夢は左側を押す。

ガチャ……

鍵がかかっていたらしく、大きかったが簡単に開けられた。

REMIILIA

く 大図書館への連絡通路

扉の先に出た其の瞬間、横向きの風に煽られそうになった。

「!ヴ……!?!」

「くくそうやら……外に出たみたいね……!?!」

塔と太陽のモニユメントをつなぐ鉄の橋の上、其の橋の一方の端に私達は立っていた。
た。

其の反対側にはモニユメントへの入口らしき赤い扉がある。

だが扉の前に、誰かが立っていた。姿勢も私達を見る視線もまっすぐだった。
遠くからでも、其が誰かはひと目で判った。

「…雪の説明にもいないから、変だなと思っていたけど……」

「やっぱりいたのね……小悪魔」

其の姿は紅魔館大図書館の小悪魔に酷似していた。

だがやはり色だけが異なり、青い髪と瞳、そしてゴーラと同じようにベストとシャツの色が

逆になっていた。

向かって右目の周りに荊を組み合わせた様な幾何学模様が浮かんでいた。

あの門番が言っていた『赤色』を持つ証だ。

私達が橋を渡り終えて近付くと、姿勢正しく深々とお辞儀をした。

「御待ちしておりました、マステア様、悪夢様……」

其の返事の代わりに質問をぶつけた。

「お前は……誰なんだ？雪の説明にはいなかったか？」

雪の名前が出た瞬間、偽小悪魔は顔を歪ませた。

「やはり……私の事は眼中には無かったんですね……あの門番……」

そして襟元を正して、自己紹介を始めた。

「私はシファア。リトル・シファア。」

此処『蒼魔塞 大図書館』の司書、そしてヘフェリー・ウイズダム様の使い魔です」

シファア……あのテレパシーの最後に言ってた名前ね……

……アンタにも、大妖精と同じ様に名前がつけられるなんて……

「御二方の事情は存じ上げております」

「パ……ヘフェリーから聞いたのね？」

「左様で御座います」

危なかった……思わずパチュリーって言いそうになった。

せつかく霊夢が即席で立てた作戦が台無しになるところだったわ……

「なら、話は早いわ。ヘフェリーの処に案内して頂戴？」

今度は間違えない様について、扉を開けてモニユメントの中に入ろうとした。
だが、

「御待ち下さい、マステア様！」

「！え……？」

思わず振りむいた瞬間、偽小悪魔に扉を閉められ、前に立ち塞がれた。

「！何するのよ!!」

「其は今が出来ません……申し訳ありませんが」

「!何……!?!」

私は威厳たつぷりに小悪魔もどきに詰め寄った。

偽小悪魔は扉の前にながらも、完全に怖気づいていた。

門番の様に態度を変えたのではなく、只私の態度に威圧された様だ。

「い、いえ……先程ヘフェリー様からマスター様であつても、今は此処を通すべきではないと命じられました」

「?…今?…どうしてよ……?」

霊夢が問いかけた。小悪魔似の彼女は、少し目をそらしながら答えた。

「御覧になった筈です……ヘフェリー様のあの力……強大なのは良いのですが身体が入りきらず、服が引き裂けてしまうのが難点で……」

『赤色』の力を使う度に、替えの服を差し上げなければなりません」

成程……あの会話の最後……着替えを要求していたのは其の為だったのね……？

「よつて今は……着替えている途中なのであります……」

申し訳御座いませんですが、もう少し御待ち下さいませ」

其は困ったわね……時間が無いっていうのに……

私は考え込んだ。すぐにでも会いたいんだけど……

其の時、私に良い考えが浮かんだ。

「良いわ、其までの時間潰しをしよう」

「！例えば……どの様な事を……？」

すぐに私は答えた。

「悪夢との弾幕勝負かしらね……」

「!?」

霊夢が『はあ!?』とでも言いたそうな顔で此方を見た。

「! 戦闘ですか……ですが、どうして……?」

「要は彼女の力も知りたいんでしょう? 其を此処で量つていれば、

へフェリーや、赤様のためにもなるんじゃない?」

私は、両手を握り拳にして其の小指の部分を軽くぶつけあいながら説明した。

此の二つの拳は霊夢と偽小悪魔を表しているつもりだった。

「成程……其は妙案……流石ですね、マステア様!」

そして私は、いつもの命令口調で、

「悪夢、行け」

すぐ霊夢が少し私の方に振り返ってた。

頭に「？」でも浮かんでそうな困惑した表情になっている。

多分、出会ってすぐという設定なのに其の態度？…と、疑問を持っているんだろう…
まったたく…私に霊夢に近付き、素早く耳打ちをした。

すると、事情を察したらしく、私が元の位置に戻るころには、
小さく溜息をつきながらもすぐに表情を戻し、

「ええ、仰せのままに……」

偽小悪魔と向き合っていた。

「さっそく、此の力を使う事になりそうですね……」

小悪魔は羽を使い、橋から少し上の方へ飛び上がった。

「！」

私達は視線をあげ、小悪魔もどきを見上げた。

「ンンン……!!!」

相手は其処で身体を縮こませた。

すると小悪魔もどきの身体から紅い螺旋が出てきて、すつかりと身体を包んだ。私達も後ろに下がって距離をとった。

そして、すつかり覆われ、赤い球状の物体となった。

「では、私も行かせて貰います!!」

其の中から声が聞こえたと思うと、

「暁符『ミドル・シファア』!!」

バフウウウウウ………!!!!!!

赤い塊が爆発した。

「!!」

爆発で起きた赤い煙の中から姿を現したのは、さつきまで私と同じぐらいの身長だったのが、すっかり大人の人間の女性まで大きくなっていた偽小悪魔だった。服のサイズもすっかり変わり、少しきつそうだったが本人はそれ程気にはしてない様子。

そして何より変わったのは頭の羽の下に、まるでサテュロスの様な赤い、

ねじれた立派な角があった事だった。

そして今までの赤の配下と同じ様に、赤い荊の幾何学模様は赤く光り、其の両目は白く剥かれていた。

「貴方も……ヘフェリーと同じ、変身系の能力なのね……？」

嫉妬を堪え、出来る限り静かに言った。

身長が伸びる、サイズがいろいろ大きくなるのは小さい私にとっては御法度に等しかった。

まさか、こんな事をしてくるなんて……私が全部直々に相手したかった……！
く……！赤め……！！

「赤様を嫌ってらっしやるのでしようが、『赤色』は授かった方が宜しいかと……私此の力、誇りに思っていますよ!？」

そう言う大人偽小悪魔の左手には、赤色の一つの大玉弾幕が作られていた。そんな彼女を見上げながら、毅然と霊夢が言った。

「本気で来なさい。でなければ、私の力は量れないわよ？」
「其のつもりです！行きますよ、悪夢さん!!」

(……せいぜい頑張りなさいよ、霊夢……いざという時は私がついてるから)

其の様子を霊夢の後ろから見ていてそう思った。

此の戦いを提案しておいて、何を思っているんだろう、私は……

双赤角の蒼魔

REIMU

VSRトル・シファー

蒼魔塞 大図書館への連絡通路

「行きますよ!!」

大人の姿になったシファーは、テレポートを繰り返しながら、紅色と赤紫色の大玉弾幕を

大量に放ってきた。

勿論紅魔館の小悪魔とは比べ物にはならないほど速く、弾幕のスピードも大幅に上昇していた。

「ハッ……!!」

横転して、私は其等をかわず。

「『パスウェイジョンニードル』!!」

其処から姿勢を立て直し、すぐに上空の相手に針状の弾幕を飛ばした。

だがテレポートで姿をくらませ、私の弾幕は空しく夜空を飛んで行った。

「!!」

次の瞬間、相手は私の目の前、橋の上に出現した。

だが、其に気付いて弾幕を出そうとしていた時には、前傾姿勢となつて紅い大きな角
で

突いてきた。

(!?発射が間に合わない……!)

弾幕発射をキャンセルし、私はすんでのところ両手で其の角を掴んで受け止めた。

だがやはり体はあっちが大きいのか、徐々に後ろに押されていく。

「くくムウウ……!!」

「く此の不意打ちを受け止め!…なさるとは……やはり貴方は……強い!…と見受けられます……!!」

懸命に踏み込もうとしながらシフアーが必死になりながら言う。

「ですが!…両腕が塞がってる以上……此は防げませんよね!」

シフアーは、其の姿勢から更に大玉弾幕を発射し、零距离から私のお腹に数発ぶつけた。

「!ヴグ……!?!」

痛みで相手の角を握る力が弱まり、ますます後ろに押されていく。

「まだまだ、本気は此からですよ!？」

すると受け止めていたシファアの身体が消えた。思わず身体が前につんのめった。次の瞬間、背中に衝撃が走り、私は勢いよくうつ伏せに倒れていた。

「!!~~~~~……」

どこからかシファアの声が聞こえた。

「強いとは言いましたが…赤様のもとに付くのでしたら、私を下しませんと……其では、
へフェリー様もがっかりしてしまいますよ?」

「!痛っ……!!」

私は痛みを堪えながら立ちあがった。

何をされたかは判っていた。

つんのめったあの時、背後にテレポートして大玉をぶつけたに違いない。

「言ってくれるわね……」

「口より身体を動かした方が良いですよ？」

完全に立ち上がった瞬間には、敵は目の前にテレポートして再び紅い角で突いてきた。

再び其を掴んで受け止める私。

さつきと同じような体形になり、組み合う私達。

角で貫こうとするシフアールと、させないと抵抗する私。

だが、さつきのダメージが来ているのか今度はすぐに押され始めた。

ガシャン!!

「!？」

遂に橋の手すりに背中が当たり、逃げ場がなくなった。

すると相手は角をわざと引いたり押ししたり、揺さぶりを繰り返して来た。

押される度に背中に鉄の手すりが思い切りガンガンとぶつかる。

「!!アア……!アグウ……!!」

背中が痛い……抑えるのに……集中できない……!此のままだと……!!
仕方ない……!!

「くう……い……今よ!!!」

其の言葉を待っていたかのように、レミリアがシファアの背中に捕まった。
衝撃で私の方に更に体重がかかって橋にぶつかったが、何とか持ち堪えた。

「そんなもので本気だと?うぬぼれも大概にした方が良いわよ……!」

「!?マ、マステア様……!」

そしてシファアの背中に自分の足をかけながら其処から生えていた羽を両方とも掴み、

ブチブチイ!!!ビリビリビリイイイ……!!!!!!

思いつき引きちぎった。

シファアは声にならない悲鳴を上げ、背中からは蒼い血が出てレミリアを青く染めた。

「そら、戻してあげるわよ!!」

レミリアはもぎ取った羽を其のまま持ち替え、すぐに羽から生えていた爪を下にし、

シファアの背中に深々と突き刺した。

ドシユウウ
!!!!!!!

再び血が噴き出る。シファアは其の場であつくりと膝をついた。口を開けているが声が出てない。

其でもレミリアは私から掴んでいた角をとりあげ、後ろに体重をかけ、相手の上体を仰け反らせた。

胸まで貫いていた羽の爪による傷が開き、今度は私の方に蒼い血が噴き出した。

思わず両腕で顔を覆う。蒼い血が私の体も濡らす。

更にまるで、子供が木の枝にぶら下がって木を揺らすかのように、

シファアの角に捕まりながら相手の首に負荷をかけた始めた。

腕で庇っているのにも関わらず、思わず目をつぶった。

レミリアの動きに呼応するかのように胸の傷から血が噴き出て、私の身体を濡らすのが判った。

何度も……何度も……何度も……

「くくく何故……です……？ マステア……きm！ ゴプウ……！」

絞り出すような声が聞こえた。泣きそうな声だった。目を少し開ける。

レミリアが橋に足を付けていた。追い打ちを止めたいが、角はまだ握っている。シファアの方は全身が青色にまみれ、ぐったりとしていた。

背中が沿っている姿勢と多量の失血で、抵抗できる気力も残っていない様だった。

「カフウ……く何故……え……!？」

レミリアは反転している敵の顔を覗き込む様に、

「一刻も早く、『私達』の平和を取り戻したいからよ。偽小悪魔」

「!? まさか……！ ゲホ……… 貴方達があ……!??」

ようやく私達の正体に気付いたらしい。

レミリアの体にとつぷりと付着していた蒼い血が塵となって消えていった。私も身体を見下ろすと、袖を染めていた血が消え、濡れていた感覚も嘘の様に無くなった。

でも……塵……つまり、相手は……

レミリアは、シファーが橋を突き破った部分に近付き、其処から下を除いた。

「……暗くてよく確認できないわ……」

「こうする為に、わざと最初は私をけしかけて戦闘を避けたのね？」

其の背中に私は言った。

「消耗させて、隙で殺しやすくするには此しかなかったのよ」

私の方を見ずに彼女は背中ですらう答える。

「私相手だとまず勝てないと思ひ込むだろうな。

奴にとって今の私は、親愛なるマステア・アズール様だったもの……
そうしたら本気も出さないだろうから大きく消耗させられない」

其を聞いて黙っていると私の方を振り返り、こう言った。

「其の沈黙が、数多の異変を解決して来た者の沈黙か？」

!!……

「八百万の代弁者はまだ此しきの事で動揺するののか？」

さつき偽妖精共をやった時に、すっかり心得たと思っていたのに……」

そして私にもう一度背中を向け、コツコツと鉄の橋を渡り始めた。私は其の後を再び黙りこくったままついて行った。強い横風は、まだ橋を駆け抜けていた。

「ふん……赤め、部下共に私達の噂を方々流してるようだけど……」

橋を渡り終え、太陽のモニュメントの入口に立っていた。

「私達の方が一枚上手だという事を見せてやる！次はエセパチエ……さっさと突入して潰す!!」

バキィィィ
!!!!!!

レミリアが扉を蹴破り、私達は中へ突入していった。

陽光の館 Open the mind

REMILIA

蒼魔塞 大図書館

バキイイイ

!!!!!!!

入口を勢い良く蹴破った私は、霊夢を連れて建造物の内部を大股で歩いていった。太陽の様な外見が原因か、ドーム状になっていた空間には紅魔館と同じ様に沢山の大きな柵に本が処狭しと並んでいる。

其の奥から声が聞こえた。

「!?だ、だ、誰なの……!?」

音が聞こえたらしい。相当慌てている様だ。着衣が終わっていないのだろう。私は言葉を返さず大きな本柵の間を歩いて行く。

「!シファアなの!?!まだ連れてきたら駄目よ!

!確認もまだしなくても……!待って、あと五秒……!!」

其の直後、私達は奥に辿り着いた。

一か所だけあつた本棚に囲まれた何もない空間の中心に、地球儀や本が山積みになされている

机があり、椅子代わりにソファがあつた。其の陰に何かがせわしなく動いている。その者に対して声をかけた。

「……来てやったぞ、久しぶりだな」

陰にいる人物は其の声に反応し、顔だけを上げた。

其の顔は……

「…お、おや……貴方達だったのね？」

私の親友、パチエことパチユリー・ノーレッジそっくりの顔だった。

そして其処から立ち上がり、全身を見せた。

パチエが紫とピンクを主に基調にしているのに対し、此方は青と藍色を基調がメインだった。

だが急いで着たのか、若干着崩れを起こしている。

そして向かって顔の左半分には、他の配下と同じ様に紅い幾何学模様が浮き出ている。

彼女の場合は赤い五角形を組み合わせた模様だった。

帽子はまだ被っていないかった。

「お前がヘフェリー・ウイズダムだな？」

私は問う。

「！もう名前を思い出してくれたの？嬉しいわね……」

そう答えて、最後に手に持っていた帽子を被った。

其の帽子には月ではなく、太陽の飾りが光っていた。

「冗談よ。藍雪とかいうろくでなしから聞いたんでしょ？」

帽子のリボンを調整しながら偽パチエは私に声をかけた。

其の目には軽蔑の色が浮かんでいたが、私達に対してではない事は判っていた。

「ベラベラと……私の名前を口にしてくれるわね……」

「……どうやら仲が良かったの、二人とも？」

記憶喪失ならではの嘘で出方を窺ったが、無視された。

「!そうそう……記憶があつた頃の貴方は、私の事を『ヘフィ』と呼んでいたわね」

「そうか……じゃあ、ヘフィ。其処へ隠れてないで出てきたらどうなの?」

「!そ、そうね……もう……着てるもんね……」

ヘフェリーはゆつたりとした動作で浮遊し、ソファに座つた。

其の動作はいつも見ていたパチエの動きと変わらなかつた。

本当の親友であるパチエに……

舌打ちを堪える。

すると敵は懐からメモ帳を、取り出して其に目を通し始めた。

メモ帳みたいだ。革の表紙に太陽のマークが施されている。

「?何、其は?」

隣の霊夢が訊ねた。

「!此?さつき外の蒼世界から魔法を習得してね……其を此の中に留めているのよ」

偽パチエが閉じたメモ帳を、振りながら答えた。

「称して『魔導メモ帳』……『赤色』と同時に赤様から授かったのよ」

……なんだ其は……魔導書のメモ帳バージョンか……

「私は外に出て魔法を覚えるのが好きでね……あのクソ門番からもそう聞いたわよね
?」

「聞いた」

「フフフフ……」

「!とところで、シファーはどうしたの、リトル・シファーは？」

ちよつと私が着替える時の見張りを任せてただけど……う？」

霊夢が嘘を言う。

「入口で殺されたわ。そして橋から投げ捨てられていたわね……

犯人を止めようにもあまりに速くて……」

「！ええ……!?!」

身を乗り出してきた。此方は感情的になりやすいわね……

「まさか、門番に殺されたって訳じゃないわよね!?!」

また門番か……今度は私が言う。

「其は判らないわ……だが、階段を駆け降りる後ろ姿はアイツみたいだった」

其は嘘ではなかった。目の前で見たんだもの。

バンツ
!!!!!!!

ヘフェリーが机を思い切り叩いた。叩いた後の拳も震えていた。

「あんの謀反者……赤様に報告して、妹様の餌にしてさしあげてやるわ!!」
「ヘファイヤ」

私は激昂する偽親友に、わざと間延びした声をかけた。

「アイツは後で私が始末しておく。安心しろ」

「!?!?!?!?!」

嗚呼、此処の連中は本当に騙され易くて助かる。

「死ぬより酷い目にあわせとくよ……親友が望むなら」

偽。パチエは首を横を向けた。目の部分が髪で見えなくなる。

「……頼むわ、マスイ……アイツの横行には此以上我慢出来なかつたところなの」
呟くように言つた。霊夢が疑問の声をあげた。

「?横行……?」

「ええ……」

「アイツは自分が格上と判断した者には、とことん尽くして媚びへつらうけど
格下と判断した者には逆に雑言と横暴を絶やさないう卑屈な性格の持ち主なのよ。
最近赤様から『赤色』の力を授かつてから、其がますます酷くなつてね」

互いに悪口を言つてる……あまりにも酷い内輪もめだな、此は……

「まさか猟奇的な事までしでかすなんて……」

偽。パチエが両手で顔を覆った。

赤の配下を、自分の配下の様に思っていた様だ。相当なショックを受けている。同情などする余地もない……というよりも、する義理もない。

私は霊夢と違って甘くはない。

例え……：相手が親友そっくりだったとしても。

「……：へファイ」

そんな感情を押し殺し、あたかも親友に接する様な声をかけた。

「私と勝負しない？」

偽。パチエは両手を開いて顔をあげて私を見た。

私は続けた。

「折角外の蒼世界から魔法を習得したなら、使う良いチャンスになるじゃないか」
「!でも…」

「奴は私が逝かせると言っただろ!?!今はもう忘れろ」

必要以上の口出しはさせない。言い続けて、敵の主張を出させないようにした。

「だが私は記憶を失くしているから、スペルも全部は覚えていないかもしれない……だから…」

私は霊夢を親指で差し、

「悪夢をハンデにどう? 其に、此処に馴染む為には互いを知る事も大切じゃないかしら?」

もちろん空気になりかけていた霊夢も忘れてはいない。

二対一になるように持ちかけた。

「お前も新たに加勢する博麗の力も、知りたいだろ？」

「勿論構わないわよ？親友が望むなら……」

「よし……」

内心でほくそ笑みながら、冷静に答えた。

「私達をマスイだと思わないでくれ……雪だと思つて全力でかかつてきなさい」

だが、偽パチエはソファから立ち上がりながらも、

「いえ、今は雪を忘れさせて欲しいわ……マスイとは本当に久々だから……」

「貴方と戦うという事で良いかしら？」

……まあ……懐古の念にも浸らせるのも、悪くはないわね……

「……良いだろう」

「私は、いない貴方の代わりに担おうと……赤様をがっかりさせない様に、必死で頑張つて……」

そう言いながら手にあつた魔導メモ帳を開いた瞬間、
ヘフェリーの周りに何重もの魔法陣が出現し、光を放ち始めた。
其の光で目が眩みそうになった。霊夢も光から目を覆っている。
魔法陣による蒼い閃光の中から叫ぶ声が聞こえた。

「赤様に一目置かれる程、私は強くなったのよ!?!」

……私の偽物の代わりか……恐らく、遠く及ばんようなものを……

「だがスペルが足りなくても勝つてみせる!!行くわよ、悪夢!!」

「ええ!!」

そして、誰にも、そして私にも聞こえない様な声で呟いた。

「勝ってみせるわ……そう、狩ってみせるのよ……貴方もね……」

アンラクトガール　　少女解放　前編

REMIILIA

VS へ英知と日向の少女へフエリー・ウイズダム

蒼魔塞　大図書館

蒼い魔法陣を何重にも発生している相手を前にして私は考えていた。
パチエと同じく動きがゆったりなら……

「……先手必勝ね!?!」

そう呟くと、翼を広げ颯爽と飛び出した。

「!? マステア……!?!」

後ろから霊夢が声をかけたが、構わなかった。

……此の状況できちんと間違えずに言ってくれているのが凄い。
そしてある程度相手と距離を詰めたところで、

「『デーモンロードウォーク』!!」

姿を一時消しながら素早く接近し、飛びかかった。

偽。パチエに爪を振り下ろす。

だが、相手も魔導メモ帳を前に出し、スペルを使用していた。

「恋符『マスタースパーク』!!」

「!?!はあ!?!」

油断してしまった。動作が一瞬遅れた。

其処をメモ帳から放たれたやや太い光線が襲い、私はまともに喰らって吹っ飛んだ。
斬り揉み状態で飛んで行ったところを、何とか霊夢に受け止めて貰った。

「あれは魔理沙の……!?!」

「グツ…他の奴の魔法を…どうして使える…?」

そう言いながら、同時に私はある事に気付いていた。

紅霧異変の時、鬼の異変の時、そしてパチエの図書館へ侵入しようとして偶然
鉢合わせした時など、私は過去に何度か魔理沙と戦い、光線を何度か浴びた事があつた。

だがさつき受けた一撃は、其よりは比較にならない程手応えがなかったのだ。

くっ……手を抜いてるわね……此は……

「フッフ……他の者が扱う魔法を貯蔵できる……其が、此のメモ帳の真骨頂よ! さて
……」

「お次は此よ!!」

そして今度は別のページを開きながら上昇し、私達の真上に来た。

「!？」

さっきの動きとは比べ物にならないほど速かった。

「此はどうかしら!？」

そして開いたページを真下に向け、

「魔光『デヴィリーライトレイ』!!！」

其処から再び光線を発射して来た。

「今度はアリスのスペルを……!？」

霊夢がそう言いながら、横転して回避した。私も同時に転がる。

「どう、凄いでしょう、マスイ!？」

私を追尾して、何度もレーザーを降らせてくる。
ジグザグに動いてかわして、同時に敵を翻弄した。
不意にレーザーの雨がやんだ。

「貫ったあー！」

上から声がして、思わず見上げた。

パチエもどきも驚いて声の方を見ていた。

霊夢が私を狙っているすきを突いて飛び蹴りを放とうとしていた。

「接近戦上等よー！」

そう言いながらメモ帳を閉じ、

『『パワースウィープ』!!!』

するとメモ帳が蒼いオーラを放ち始めた。

そして其をまるで裏拳を放つかの様に振って対抗した。

蹴りかわして振ったメモの角は、霊夢の脇腹を正確に捉えていた。

「!?オグウツ……!!!」

其のまま殴り飛ばされ、霊夢は大きな本棚の一つに激突した。

「!悪夢!!」

本棚がぶつかった衝撃に耐えられず、ゆっくりと後ろに傾き始めた。

「!?!?!」

そして大きな音とともに倒れた。

「……其処の蒼白!!」

偽パチエがメモを持っていない手を上にあげた。

すると、倒れた本棚がゆっくりと起き上がり、倒れた拍子に散らばった本も棚の中に戻っていった。

へばり付いていた霊夢が、棚が起き上がったと同時に落下して顔から床に落ちた。大の字となった其の姿にパチエもどきが言い放つ。

「……………私の本棚を倒さない」

……………自分の攻撃が原因の癖して…………

「大丈夫か、悪夢…………？」

私は頭をさすりながら立ちあがる霊夢のもとに駆け寄った。

「くくえ、ええ……………しかし……………」

霊夢が頭上に浮いている偽パチエを睨め付けていた。

「魔理沙のと言い、アリスのと言い……アイツ……」

どれも魔法使いからスペルをラーニングしてるわね……」

「他の奴のスペルを乱用する……使われる側からしたら屈辱極まりない戦い方ね……」

聞こえない様に、口の端で小声で話しあう。

「最後は、私一番のお気に入りよ!!」

メモ帳を両手で高く掲げた、其のメモが蒼く輝き始めた。

「!？」

あ……?あの構えは……!!

「避けるのなら、しっかり避けてね!？」

マズい……！何処かに隠れないと……！！

すると霊夢が私とパチエの間に割り込んで来て、偽パチエと同時にスペルを唱えた。

「神技『八方龍殺陣』!!!」

「日符『ロイヤルフレア』!!!」

其の瞬間、青い閃光に包まれた。

私は霊夢と一緒に張られた結界の中にいたが、あまりの光で両目を閉じ、両手で頭を覆っていた。

相手の攻撃が終了したらしく閃光が消え、結界も消えた。

思わず其の状態から尻もちをついていた。

あんなのを喰らっていたら、私はひとたまりもなかった……

「……た、助かった……悪い、悪夢……」

「大丈夫よ……それよりも……」

霊夢は立ちあがって、

「見て、アレを……」

「?アレ?……」

私は霊夢が指さす先を見た。

「?……!あ……?」

其の先には……

「くくお、お腹があ……!??」

偽パチエがいつの間にか床に降り、脇腹を抱えて苦しんでいる。

……何があつた？

私達は今のところアイツへの攻撃を成功していない。むしろ返り討ちを受ける始末だ。

じゃあ何故だ？……演技か？其とも別の……？

「此も……覚えていないようね……!?!」

どうやら唾然としていた私達に気付いたらしく、悶えながらも説明を始めた。

「私……!?! イツツ……いい、胃潰瘍持ちなのよ……!!」

……は？胃潰瘍……ストレスやら何やらで発症するアレ？

「最近……ストレスが溜まる様な事……ばかり……なのよ……!」

此方のパチエは、喘息ではなく胃潰瘍持ちなのね……
活動的であろうと消極的であろうと、持病なのは変わらないのね……

「し、雪の…奴う…!!」

「!チャンスよ、マスターア!」

無論、私も此を見逃すはずが無かった。

「『トリックスターデビル』!!!」

今度は素早く偽パチエの後ろに回り込んだ。

「!?!?!?!?!?!?!?!」

突然私が消えて焦っている。痛みので判断も鈍ってる様だった。

だが、私は攻撃せずに後ろから前へ、相手の手から魔導メモ帳をかすめ取った。

「!!ああ……!メ……メモちよウウウ……!?!」

私は、敵の武器を手に霊夢の下に戻った。

その際に霊夢が、代わりに前方に結界を張って相手を寄せ付けない様にした。

私が奪って持っていたメモの表紙を霊夢が触った。

すると、其の顔色が変わった。

「僅かに熱を持っている……!」

言われてみると、確かに熱を持っていた。まるで内部から発散している様な熱だ。

「此……赤の言っていた、『英知の結晶』に違いないわ」

「でも、どんな構造になっているのかが判らないわね……インテリの考えてる事と同じ様に」

「……おお……お願い……そ、其だけは……破らないで……!!」

膝をついて苦しそうに呻きながらも、両手を握りしめて懇願している。

そう言われると破きたくはなるけど……私はもう一度メモ帳の表紙を見た。

破くのは流石にもつたいないわね。もしかしたら、本物のパチエへの良い土産になる

かも……

「……後で返してあげるわよ……心配しなくても」

私はメモ帳を懐にしまいながら言った。

もちろん、此がアイツの手元に戻る事は二度とない。

「さて、せっかくの利器を敵に奪われたらどうするの、ヘフィ!？」

どうやら、痛みから解放されたらしい。若干よろめきながらも立ち上がった。

「赤から貰った力は使わないの!？」

折角殺すのだから、アイツの『赤色』の力を見てみたい。

さつき見た巨大なドラゴンが、其に違いない様だが……
ところが、ヘフェリーは、

「……あれは……赤様からは制限がかけられているの……」

?……制限?

「……其は、どういう事なの?」

霊夢が訊いた。其に応える偽パチエ。

「……余程の事態でない限り……力が残っていない時には、無理には使わない様に、と……『赤色』を授かった際にそう仰ったのよ」

……他の奴等は皆ほしいと使用していた力に、なぜ制限を……

其を考えると、相当なリスクがある様ね……彼女の『赤色』の力には。

フフフ……ならば、敢えて出させて弱って貰うまでよ……!

「……………赫妃より授かりし御物……………封じられ、窮地に立ちき時……………」

まだ腹痛の余韻が残っているらしく、近くのデスクの角に片手をつけて息を整えていた。

顔は下に向けている。

其の顔を突然キツと此方に向けた。尋常ではない程汗をかいていた。

「なら……………私自身の、力を使うまでよ!!」

そしてスペルを発動した。

「蒼木符『ブルーストーム』!!!」

すると彼女の身体を、蒼い木の葉の様な弾幕が身体を覆い始めた。

『赤色』の力をまだ使わないか……………其にあの体勢……………さっきの腹痛と言い、

どうやら持久戦に持ち込むつもりね？

「此処からが本番よ……行くわよ!!」

面白い……

ならば、其の守りを？して、貴方を余程の事態にしてあげるわ!!

アンラクトガール ～少女解放～中編

REIMU

VS 〈英知と日向の少女〉ヘフェリー・ウイズダム

蒼魔塞 大図書館

「…………分厚そうね…………」

私達が今対峙している赤の配下、ヘフェリーウイズダムは今自身のオリジナルのスペルで防御していた。

あの弾幕の量…………容易には攻撃を通せない様ね…

「…ウツ…………!!」

突然弾幕の中から、苦しそうに呻く彼女の声が聞こえた。どうやらさっきの胃潰瘍が再発したらしい。

すると其と同時に、規則正しく彼女を囲んでいた弾幕が乱れ始めた。其を見逃さなかったが、私より先にレミリアが動いた。

『シーリングファイア』!!』

素早く図書館の天井に張り付くと其処から一気に弾幕の綻びに突っ込み、中にいるへフェリーを打ち倒した。

「!?ウグウ……!!!」

声が聞こえ、青色の弾幕が消えていった。

「くっさ、流石ね……マスイには敵わないわ……」

弾幕の渦が消えた後にはレミリアとヘフェリーが残っていた。

ヘフェリーはうつ伏せに倒れて痙攣しながらレミリアを見上げ、レミリアが彼女を見下ろしていた。

「私が……不調に遭ったのもあるけど……」

「其程、私達はやり合っていたの？」

「ええ……しよっちゆうね」

私は、顔を横に向けて、図書館を見渡し始めた。

理由は簡単よ。レミリアが止めを刺すのを見ずにいただけだった。

多分レミリアはそうするつもりだろう。

だが予想に反し、彼女は、

「……『赤色』の力は使わないの？」

「!？」

恐ろしい事を言い始めた。

あまりの発言に驚いて彼女達の方に向いてしまった。度肝を抜かれてしまったわ。

私はさつき雪に案内された時に見た、巨大な紅い龍を忘れるはずがなかった。

そして今までの会話からして、其の龍はヘフェリーの『赤色』の力だという事は確定していた。

あんなのと…戦えっていうの…??

「…さつきも言ったわよね、マスイ…此の力は…制限がかけられているって…」

ヘフェリーは胃潰瘍とダメージに呻きながら答えた。

するとレミリアは、

「気が変わったの……私も『赤色』の力を欲しくなったのよ」

重なるトンデモ発言に私は勿論ヘフェリーも、彼女を見上げる顔が啞然としていた。

「……私も『赤色』の力を貰おうと思っているのよ」

レミリアが繰り返した。ヘフェリーが聞こえなかったかと思つたのか、逆に聞こえたと
して彼女に

更に衝撃を与えたかつたのかは判らなかつた。

すると、其を聞いたヘフェリーが血相を変えて叫んだ。

「無茶よ!!……貴方、聞いたところ……赤様の授かつた力dゲホオ……!」

「大丈夫よ。以前の私は其を拒んでいた様だけど……いつまでもこんな意地を張るわけ
にいかないと思つたの……」

そういつてレミリアが取り出したのは、目の前の偽親友から奪った『魔導メモ帳』だ。

「お前が此のメモ帳に載せたスペルの様に、外の世界には強力なものもある。

蒼世界に負けない様に、私も受け入れる事にしたのよ」

「ただ……其の力はどれ程のものなのか……」

レミリアがメモ帳を再び懐にしまいながら言う。

「貴方の『赤色』の力を見せて欲しいのよ……へハイ」

其処で言葉を切り、返事を待つ。

私も其の場でした。

神社の巫女をしている癖に神様を意識した事はあまり無かったけど、自分達が危機に瀕していても、多分此処まで意識した事は過去にも此の先にもあまり無いかもしれない。

(神様……!!)

少なくともあれだけとは絶対に……お願い……早く止めを……!!
へフェリーも黙っていた。レミリアを見上げていた顔も下ろしている。
其の口を突いて出たのは、

「……下がって……二人とも……」

最も帰ってきて欲しくなかった答えだった。

すぐにレミリアが素早く彼女から十分に距離を取り始めた。

私も考えるよりも先に其にならない、レミリアの隣まで後退する。

「くく親友の……大きな……決断の……為なら……」

ヘフェリーがゆつくりと浮遊せずに立ち上がった。

顔を上げる。遠くからでも判る程に、すごぶる顔色が悪い。

「……………赤様……………御許し下さい……………!!!」

そして、スペルを唱えた。

「暁符……『クリムゾンドラゴン』!!!」

するとヘフェリーの顔の右半分には施されていた、赤い五角形による

幾何学模様が消えた。

沈黙が流れていた。聞こえるとしたら何処に設置しているのか、時計が針を動かす音だけだった。

多分深夜はとうに過ぎているだろう。

だが次の瞬間、

「!!ア” ……ウグウウ…!!?”

突然ヘフエリーが呻き声を上げて首と胸を押しえて膝を折った。

そして其のまま腰も折ってうずくまりながら喘ぎだした。

私はある事に気付いた。

「見て、マステア……身体が……!」

「!!」

うずくまって呻き声をあげている彼女の身体が、原型を失くして肥大している。其はゆつたりとした衣装からでもはつきりと判った。

そして背中の中の真ん中の部分が一番大きく盛り上がり、

バリーイイ

!!!!!!!

其の部分の布を突き破り、其処から更に赤い鱗に纏われた皮膚が隆起しだした。

「!!オ”オオ”オ”……………!!!」

痛みの為か、再度呻き声をあげたが、さつきよりも声が低くなっていた。

そして次に右腕の袖が弾け、鋭い爪が生えた巨大な赤色の手と腕が出現した。

他の部分も次々と服が破れて肥大していき、今は図書館内にある本棚の半分の高さまで大きくなっていた。

「……………成程、シフアーが苦勞してた訳ね」

隣で、レミリアが呟くのが聞こえた。かすかに声が震えている。御祓い棒を握る手に汗が噴き出して何度も滑りそうになる。

「くく此が……赤様から授かった……力あ……!!」

一部を除いて赤い鱗に覆われた彼女が紅い片手で顔を覆いながら言った。もはや男としても問題ないのではと思われる声だ。

「よく……其の目に……焼き付けるのよ!!!」

すると地面が震えだし、天井からも小さな瓦礫が降り始めた。

「!此は……!!」

「い、いったん外に出るわよ!!」

やがて大きくなる瓦礫の音に負けない様、レミリアに叫んだ。

私達は急いで入口の方に床を蹴って飛翔していった。

REIMU

く蒼魔塞 大図書館への道

入口から出て太陽のモニメントから低空飛行で急いで距離をとり、滑りながら着地した。

『蒼魔塞』と大図書館を唯一つなく鉄の橋にも其の振動が伝わって来ていた。

着地の勢いがほぼ収まると同時にすぐに振り返り、さつきまで中にいたモニメントを見上げた。

次の瞬間、其の上部分つんざく様な爆音と同時にが大きく吹き飛んだ。

「!!キヤアツ……!!」

一段と振動が強まり、バランスを保てずに膝をついた。吹き飛んできた巨大な赤い破片は運良く橋にはぶつからず、其のまま遥か下へと落ちて行った。

そしてすぐに其の割れ目の中から、

「ヴヴヴ……………!!!」

巨大な龍の上半身が這い出てきた。

とてつもなく大きい。現在出ている上半身でも私の神社を倍にしたくらいの大太陽のモニユメントの半径とほぼ同じ大きさだ。

つまり博麗神社と上半身が同じ大きさになる。

其の体は血のように紅く翼もあり、姿は大分違えど、まさに龍神に匹敵する程の脅威を

持ち合わせているように見える。

だが、右腕だけしかなく、顔も左半分だけしかないように見えた。

眼も眼どころか眼窩もなく、まるで退化している様だった。

そして赤い龍は大きく口を開けたままになった。
すると炎の様に飛び出してきたのは……

「!!!」

「……へフェリーー???!」

先程まで変異をしていた龍の、舌の一部になったへフェリーーだった。

帽子以外は服が全て破け、裸同然の姿となっていたが、

顔の左半分、左腕、右太もものみが出ているだけで其以外は肉塊に埋もれて舌と同化していた。

そして唯一残っていた帽子も、リボンで結んだ二か所の頂点を突き破られ、

其処から舌の様なモノが飛び出していて、面影を残しながらも彼女自体がまるで先の割れた

蛇の舌の様になっていた。

長い髪の毛はすべて舌と同じ質感となり、

リボン巻いていた耳の横の髪は、代わりに先端に牙の一部とみられる突起物が生えていた。

彼女の顔は『赤色』の力を使った反動とみられる白目を剥いていたが、

顔の右半分も舌の一部と化し、右目だけがまるでカメレオンの眼の様に残っていた。其の顔をあり得ないとばかりに歪め、残っていた左手で頭を抱えていた。

「くく赤様はあ……こ、此を……危惧されてええ……?!」

其の瞬間、ピンときた……そう言う事ね……

「……赤紫が制限を課した理由が判った気がしたわ」

「…どういう事？」

レミリアが此方を向いた。

振動が大分収まった様なので、私は立ち上がりながら勘を頼りに説明を始めた。

「多分一日に何度も変身すると、同時に弱点を露出する危険があつたのね……」
「！弱点って……？」

私は舌の先となつた彼女を指差した。

「あんな強大な力を持つ龍に変身を繰り返すと、次第に靈力も枯渇して疲労が溜まる……」

そうなると当然完全に変身できずに、彼女自身の一部が残つたまま龍となるのよ」

「！龍の身体は、アイツそのものか……変身できてない部分だけ、龍の身体も欠如したままになる訳か」

そしてヘフェリーの一部が融合していた舌が龍の口の中に戻って行つた。

私は懐から針を数本出した。

初めは龍と戦うなんてと、ビクビクしてはいたけど……

不完全で弱点があるなら、なんとかなるはず……!!

「……悪いけど……お前には文字通り、辛酸を舐めて貰うわ………ヘファイ」

レミリアがそう言うのを合図に、私達は太陽のモニユメントの上に飛翔した。私達を迎え撃つ龍の咆哮が、青い満月が浮かぶ夜空に轟いた。

アンラクトガール ～少女解放～後編◎

REMIILIA

VS へ英知と日向の少女へフエリー・ウイズダム

蒼魔塞 大図書館 屋上

私達は鉄橋から飛び、大図書館の屋上に到着した。

大図書館の天蓋の大半を突き破り、偽パチエが完璧には変身し損ねた龍の上半身が出ていた。

「まずはかく乱させるわよ！」

「ええ……！」

其処から間髪を入れずに私は左、霊夢は右に分かれて龍を囲むように飛翔し始めた。

龍は右手を、霊夢の方を狙って薙ぎ払っていたが、霊夢は難なくかわし、相手をいなしていた。

すると、龍の口蓋が三つに裂け、大量の赤い大玉弾幕と共に舌が飛び出し、其の先でヘフェリーも私達を狙うレーザー型の弾幕を大量に口から吐き出して来た。素早く体を動かし、弾幕を回避していく。さつきは私が先手を取ったが、今度は霊夢が上空で先にスペルを唱えた。

「宝具『陰陽飛鳥井』!!」

手元に大きな陰陽玉が現われて、

「シューート!!!!」

其を思い切り蹴とばして、舌の先のヘフェリーの胸に命中させた。

「痛あいよおおおおお!!!」

陰陽玉が当たった彼女の胸からは赤い血が噴き出し、左手で必死に押さえている。どうやら舌自体は相当脆いみたいね……

赤い龍も潰れた悲鳴を上げ、舌を出したまま痛みに耐えきれずに其のまま身体が傾き始めた。

しかし、下にあった太陽の光を模した振じれた棘のようなモニュメントの一部が首を貫いたが、構わずぼったりと倒れた。

「!チャンスよ!!」

私達は急いで顔の方に回り込んだ。

口の端から舌が長く伸び、先でヘフェリーが痛みにもがいていた。

霊夢が御祓い棒を振りかぶりながら彼女にむかっていった。

すると舌が素早く伸び、瞬く間に蛇の様に霊夢の体に巻き付いた。

「!悪夢!!」

「くく大丈夫よ…此の位…!!」

締め付けられながらも、霊夢は手を胸の前に交差させ、

「『亜空穴』!!」

すると霊夢が消え、舌は巻き付く対象を失った。

「!?!」

偽パチエは舌の体をよじり霊夢を探そうとしたが、

「!?!グウ……!?!」

次の瞬間には真上にワープした霊夢に踏み付けられてダウンしてした。

霊夢は彼女を踏み台にし、華麗に宙返りをしながら私の処に戻ってきた。

舌はゆつくりと持ちあがり、偽パチエの顔を此方に向けた。

偽パチエは左手で負傷した胸を押さえている。

「くくなかなか強烈ね、博麗の者……でも……」

すると其の不揃いの両目を閉じ、再び開いた。

「此処からはそうはいかないわよ……」

開かれた目の色が変わった。

赤紫色の白目に黄色い瞳……魔理沙に化けた赤が最後に見せた瞳と同じ色合いだった。

更に……『赤色』の力を……？

そう思っているうちに、舌がまた龍の口内に収まっていった。

そして龍の頭が起き上がり、左手をついてまた体勢を立て直した。

其の時に首に刺さっていたモニメントが折れ、一緒に持ちあがって行った。

「もう一度よー！」

私達は、其の場から空へと飛翔した。

目の無い龍は今度は私の方に顔を向け、大きく三つの口蓋を開けた。

「!?クッ……!!」

巨大故にかわし易いものの、其によって起きる風圧に吹き飛ばされそうになった。其の後にも何度も翼撃が来たが、風圧に巻き込まれそうになりながらも回避する。だが避けていく内に私は、翼は闇雲に動かされている様にしか思えなくなつた。中には、的外れな方向に振る事もあつたからだ。

何でだ？私が見えていないのか？まあ、まだ目が口内にあるのも原因なんだろうが……

「『妖怪バスター』!!!」

ふと、霊夢の声が聞こえた。

見ると遙か向こう、龍の顔の前で霊夢が弾幕を放ち、龍が片手で其に応戦していた。そうか、あつちに気が向いているから、私への攻撃が粗雑になつてるのか……

だが霊夢のどの攻撃もすべて龍の強固な鱗に跳ね返されていた。

硬すぎる……其に本来怯ませる為に最適な目も、両方とも口内にあつて狙えない。やはり、偽パチエが残っている舌を狙うしか……

すると私の目に其の首に刺さっている、モニュメントの一部が飛び込んできた。

「！あれだ……！」

龍の翼の間をかいくぐり、其のポイントに向かった。

紅魔館の時計台の時計の短針ほどが首から出ている。

食い込んでいる部分と合わせると、かなりの長さになるわね……

龍の気は霊夢が引き付けている……今しかないわ！

すぐに両手で出ている部分を押し、真下に下ろそうとしたが、なかなか動かない。硬い表皮が邪魔をしているに違いない。

「……吸血鬼を舐めるんじゃないわよ……！」

左手で真下に押し続けながら、右手を振り上げた。其の手に蒼いオーラが集中し始める。

十分に集まった所で、握り拳にして其のままモニュメントの破片に思いつき叩き付けた。

「悪魔『レミリアストレッチ』!!!」

強い力を受けた棘は凄まじい勢いで垂直に移動し、龍の首を完全に切断した。

斬られた頭部は、モニュメントの上に大きな音を立てて無造作に転がった。

頭を失った龍の身体は、片手や翼で必死に穴の淵に捕まろうとするも、大図書館の中に落ちていき、赤色の塵となって消えた。

私達は、モニユメントに降り、穴の傍に転がった龍の首に近付いた。
龍の首は奴の首だ。切られればもう……

「オ”オ”……………オ”オ”オ”……………」

偽パチエは龍の口の中から出ていた。

残っている腕で移動したのか、龍の下顎の部分に荒い息でもたれている。

全身が龍の涎で濡れている。そして其の口からも、片手で押さえている胸の傷からも、真つ赤な血が流れていた。

良く見ると、伸びている舌の一部からも出血し、足元に広がる涎に混ざって広がって
いた。

「くくも、申し訳……………ごいません……………赤様……………お……………御言葉に……………
背いた……………ばかりに……………!?ア”ア”ア”ア……………!!!」

苦しみながら吐く言葉に私は違和感を覚えた。

「……さつきは私の為と言ったのに、どうして赤の為になってるんだ？」

私は訊いた。

「クク……」

すると、ヘフェリーが唐突に笑い声を洩らした。

「貴方……やっぱり、マスイじゃないのね……？という事は……やはり赤様が仰っていた……」

……今頃気付いたのか……

「何時からだ？」

「最初から気付いてたわよ……だって…マスイは、そんなに……人間味が残って
いないもの……」

「…其は……どういう事だ？」

「『赤色』の力による事故のせい…其だけよ」

「言いなさい、赤は何をしようとしているの……？」

すると霊夢が私達に近付いて、偽パチエを問い詰めようとした。

「霊夢……私がやるから良いわ」

私は霊夢を引き下げた。

偽名を使わなかったのは、今更死ぬような奴に使う事も億劫だったからだ。
すぐに相手は其に喰いついた。

「……霊夢？……ハア……ハア……やはり……博麗……霊夢ね？……赤様が其の名挙げていらつ
しゃった……」

其処で、ヘフェリーの黄色い瞳が縮まった。

「!じゃあ何……?あの門番をアンタ達は出し抜いたって訳……?」

だんだん矢継ぎ早に言葉を発する様になる偽パチエ。

そうなると息も当然上がってくる。

と突然、

「アツハハハハハハハ……」

!!!!!!

大声で笑い始めた。

が、血が喉に詰まったらしく吐血と共に咳き込み始めた。

「何がおかしいの?」

「ゲホオ!!……ハハハハ……あの門番に醜態を晒させたのね!?よくやったわ……!ゴ
プウ……気分が良い……クク……へへへへ……」

さつきまでとは明らかに様子がおかしかった。

「重ねた変身の影響で、人格の崩壊まで引き起こしてるのよ……可哀相に……」

霊夢が傍に来て冷たく言った。

だが、自分が死ぬというのに、何を考えているのか……

「一つお願いを……頼んでも良い……かしら……う？」

偽パチエは唐突にすがり付く様な声を出した。

確かに、人格が判らなくなっている……此程のものとは……

だが、最後に聞いてやるか……私は止めをさそうとしていたがいったんとどまった。

「……何だ？ 赤へ死亡報告してほしいか？」

偽パチエは其処でひとつ呼吸をゆつくりとした。

そして、私にこう言った。

「……雪を……私のところに……連れて来なさい……」

……は？

「アイツを……あの世に連れてきてくれたら……許してあげても……良いわ……」

……コイツ……

「……何処までも見下げ果てた奴だ」

そして、

「……必殺『ハートブレイク』」

再び蒼い槍を手にする私。

ふと後ろをふり返ると、霊夢は顔を背けている。私が止めをさすのを見ないつもりだ
というの明白だった。気にせず敵に視線を戻す。

せめてもの情けだ……威力を弱めて殺してやる!!

私は親友の偽物の頭を狙って投げようとした。

が、突然地面が揺れ、私は槍を投げ損ねた。

けたたましい音を立てて鉄が切れる音がし、すぐに足元が傾き始めた。

落ちる……! 私は直感的に気付いた。

明らかにオーバーなサイズの龍が暴れたせいで鉄橋が重さに耐えきれなくなったの
か……!!

「レミリア! 此処から離れるわよ!!」

霊夢の叫び声を聞こえた。私達は直ぐに飛翔し、図書館の屋上から離れた。

「精々足掻いてみせなさいよお!!! 先にあの世で待つてるからさあああ!!!
!!!

顔をあげ、霊夢の方を見た。だが、アイツの顔は見れなかった。罪悪感が込みあがってきたからだ。

どうしてなの？ 私は、当然の事をしたのに……

だが、小悪魔、そして本当の親友の顔が頭に思い浮かんだ時、私は思い知らされた。

…此からは私の配下に似たものと戦っていくのか……

美鈴、咲夜、フラン……

そして、いずれ自分自身とも……

アイツは……私の弱みに確実に付け込もうとしている……

あたかも親友を殺すような感覚に陥れようとしている……

私に躊躇させ、其の隙に……

許さん……!!絶対に許さんぞ……赤……!!!

顔を下に向け、霊夢の傍を通り過ぎた。
其の際に言葉をかける。

「……行くわよ」

私達は鉄橋を音を立てて歩き、再び塔の中に戻って行つた。
其の背中を蒼い大きな満月が、静かに照らしてくれていた。

赤張られた秘密

赤き気炎

H U C H I

く蒼魔塞 5階 赤の部屋

その時私は、自分の部屋から窓の外を見ていた。

太陽の形をした図書館が落ちていくのを見ていた。

『赤色』の力の副作用を被った、魔法使いの醜悪な姿も……

「……だからあれほど言ったのに」

そう言って視線を上げ、蒼白の満月を見上げた。

かつてあの月も赤く、そして美しく染まった。確か、紅霧異変の時だったわね……

「でも今は、月には用は無いのよ……」

そうやって目を細める。

夜明けまであと二時間十五秒……夜が明ければ、遂に……

「……………」

後ろに誰か居る……そう直感した。

でも振り返らずとも、直ぐに誰かは判っていた。

自然と笑みが顔に浮かんだ。どんどん拡がる。

此程口の端が拡がったのは久しぶりかもしれないわね……

「……………そうはさせないと、来る事は判っていたのよ……………」

そういつて後ろを見た。

「そうよね……紫？」

私の後ろで、私そっくりの女性が立っていた。

此方を見ながら通ってきたスキマを閉じている。

今の私と同じ道士服を着ていたが、赤色であるべき場所が紫色になっていた。

そして、髪に結ばれているリボンの紐の太さも違っていた。

大きな穴が出来る程の細さの私のリボンに比べて紫のリボンは其の穴が見当たらないほどの太さだった。

彼女の口が動いた。でも其処から言葉を発せられる前に私は言葉を挟む。

「言わなくても判っているわよ。どうせ……」

『『お前の様な姉は、私にはいない』……そうでしょ？』

「判っているじゃない」

どうやら、機嫌が良くない様だった。

私を見る顔をしかめている事から一目瞭然だった。

「外から来た私の偽者……勝手に八雲の名を使われると困るのよ」

外から来た者……其は、私が、幻想郷の者ではない事を示していた。

「貴方の式も勝手に名前を付けてる癖に。其の式には名字も無いじゃない」

紫の式である八雲藍、橙をあげて切り返した。

論破には慣れていた。其に、私の方が賢いのに……

「八雲の名なんてあつて無い様な物よ」

「お前は幻想郷に自分の居場所を作ろうと、屁理屈を正当化して振じ込んでいるだけなのよ」

紫の口調は、まるで保護者が小学生の娘に留意事項を言い聞かせるようなものだった。

ぴくりと自分の眉が動いたのが判った。

「屁理屈なのは其方じゃない？」

私は再び平然と言い返した。

「今まで此処で起こった異変だつてそう……其も他人を顧みず、自分の為にと身勝手な理由ばかり……」

だから私も幻想郷を落ち着けようとしているのよ」

「じゃあ聞くわよ？」

すると紫が、質問を投げてきた。

「貴方は、屁理屈を吹聴して集めた幻想郷の妖精を、何匹モルモットにした？」
「！え……？」

頓狂な声が出てしまった。

「何の事かしら？」

「何匹で結果を得られたのかしら？」

言葉が詰まった。が、何とか答えは出す。

「……アバウトだと一万匹以上。正確には……覚えてはいるけど教えてあげないわ」
「其だけで結構よ」

正確な数値は実際に覚えていた。1 1 2 3 5 匹……ちょうどフィボナッチ数列と重なった事に驚いた。

紫が続ける。

「利己的な理由で異変を起こす……貴方も、例外じゃなさそうね。

まさか、『赤いは酒の咎』って言い逃れはしないわよね？」

……

反論の手を探していると、

「此を聞いたら霊夢……悲しむでしょうね」

其の言葉に思わず目を見張った。

まさか……もしかして……あの事を??

「一応此の要塞の下調べはしているのよ」

そう彼女が言うと、

「今まさに分離され、崩落した太陽の反対側……月を模したモニュメント……」

「此処とは別の、貴方の研究室……違う？」

……凶星だった。

でも、どうやってあの部屋に……??

鍵をかけ、強力な結界を張り、誰にも……そう、自分の配下や側近にも
近寄らせない様にしていたのに……

「私の能力は『境界を操る程度の能力』」

紫は無表情で言った。思っていた事を読まれた。

「結界という境界を設けても其は無意味よ。霊夢にも結界を破る力がある。」

あの程度の小さければ、直ぐに暴かれるでしょうね」

今度は逆に自分の顔が引きつっていくのが判った。

その時、紫の傘を握る手がかすかに動いた。当然其を見逃さなかつた。

「貴方のスペルは私に通用しない……御存知でしょう？」

今の紫には赤い部分がない。

霊夢達と一緒に私の能力に巻き込まれたに違いない。

髪に結んでいるリボンも全て青色になっていた。

其に喋っている口の中も蒼かつた。

霊夢達もそうだったけど、血の気のない様な顔といい、まるで幽霊になつた様にしか見えず滑稽に思えた。

「服の下で身体に巻いてる、精密機械を叩き割れば済む事よ」

想わずムツとした。

「単純にまとめるな。『英知の結晶』と言って貰える？」

「ガラクタをなんと言おうが関係はないわ。其に……」

「垢にまみれた貴方に指示されるほど、私は甘くは無いわ」

!!!
.....

「………今、何と言った？」

「！御免なさい。赤の間違いだったかしら？」

私は直ぐに右手を横に伸ばした。

バジジイイ……!!!

手の先に赤い放電と共にスキマを開き、両手を突っ込んだ。

其処から『英知の結晶』であるガトリングを取り出し、安全装置を外して素早く銃口を紫に向けた。

だけど向けた先には既に紫は居なかった。

「逃げた……！」

息を荒げながら想わず舌打ちをした。赤いラインの入ったガトリングの銃口を下ろす。

私の身長より長く重そうな見た目に反し、極限なまでの軽量化を施してあった。

「『赤色』を馬鹿にして……！次会ったら顔をぶち抜いてやるわ……！」

ガトリングを出してから開けっ放しにしていたスキマの中に、ガトリングを投げ戻した。

あの中を見られた。なら私の、一番の秘密も見られたに違いない。

気が付くと額にとめどなく汗が流れていた。

誰も解除できないであろうと、ありったけの『英知の結晶』の力で仕掛けた結界をまさか破つて来るとは思いにも寄らなかつた。

詰めが甘かつた。自己嫌悪に陥つてしまひそうになつたが堪えた。こうなれば紫は絶対に霊夢達に話すだろう。

其の事が他人に露呈する事は、此の計画の一番の最大の要にして最大の弱点を暴露され、此の計画が失敗するという事を意味していた。

一氣に焦りと危機感が私を覆つた。

知られてはいけないわ……少なくとも、霊夢にだけは……………

でもそう思つた途端、もう一度ハツとした。

今まで紫と話していた時間から計算すると、霊夢達はとつくに塔の中に戻っている。そして、もうすぐ此の階に上がってくる筈……

「急いで此の階から離さないと……………！」

私はもう一度スキマを開け、其処に飛び込もうとした……

「！赤様……!?」

が、声が聞こえ、咄嗟に声が聞こえた方に首を曲げた。

「……知流ね？」

部屋の入口に紅魔の館で悪魔に仕えるメイド、十六夜咲夜にそっくりのメイドがいた。

だけど色は違い銀髪の筈の髪の色は金色で、蒼ではなく赤いメイド服を着ていた。そして咲夜のように、淡々とこなす瀟洒な一面は……なく、オドオドしていた。

名前も違った。名前は待宵 知流（まちよい ちる）。

「何か用？」

「も、もの凄い……物音が聞こえたので……」

ガトリングの安全装置を外した音に違いない。

「ええ……ありがとう。心配をかけたわね」

そう平静を装っていた私の頭は、平静など存在していなかった。

「私は下の階に行ってくる。其の間に貴方は所定位置についてくれるかしら？」
「!!え……!!?」

知流が面食らった。同じ事を繰り返しながら大慌てしている。
手をパタパタさせている。

「くくし、しかし……!!」

「…………急いでいるのよ」

「!!くくか……かしこまり……ました…………申し訳……ございませぬ……」

だがスキマに入ろうとした時、私の頭の中に思い付くものがあった。
スキマから一旦体を離し、

「一つ良いかしら？」

「!? な、ななな……!?」

『彼女』は今、どうしているの？」

最初は『彼女』が誰かが判らないらしかった様で、直ぐに気を落ち着けて考えていた
が

しばらくすると思い出したかの様に、

「…は、はい……お薬で、よくお眠りになられています……」

私は直ぐにお礼を言い、今度こそスキマに入り、墜ちていった。

H U C H I

く蒼魔塞 6階

私はスキマを開き、ある部屋の中に着地した。

電気が点いていないのか、部屋は真っ暗だった。

位置を記憶していた壁にあるスイッチを、押しながら私は考えていた。

視線は私の懐に向けていた。

完成はしていないけど……データを取る為に使うしかない……

何よりあの秘密の漏洩を阻止する為なら……

電源が点き、部屋の中が明るくなった。

そして其の奥には、少女がいた。近づいて様子を見る。

椅子に座ってぐっすりと眠っている。

私は懐から黒い胸当て型の『英知の結晶』を取り出した。

中央の赤いコアがあり、其処から血管の様に赤いラインが広がっていた。

もう一度少女を見た。

金色の髪の下の目は、当分開く事は無さそうね……

蒼い目も見ずに済みそうだし……

「必ず……成功させてみせるわ……赫郷計画《プロジェクト・レドランティカ》……」
そう呟き、『英知の結晶』を少女の胸に取り付け、起動した。

レッド・ペナルティ

REIMU

蒼魔塞 5階

「……いよいよ配下も、残り僅かね」

「ええ……」

ヘフェリーを倒した私達は階段を上がり、上の階に辿り着いた。私は隣のレミリアを見ていた。何だか様子がおかしい。

偽パチュリーを倒す前とは明らかに違い、表情が強張っていた。

でも、理由は自ずと理解は出来た。

マステア・アズール……偽美鈴から聞いた、レミリアそっくりの赤の配下。

いずれ自分自身と戦わなければならない、自分そっくりの相手。

レミリアは御嬢様故、プライドも高い。だから、自分そっくりの奴が他の誰かに嫌で

も

従つてるとなると、まるで自分が尻に敷かれてる感じで我慢ならぬのだろう。其に対する怒りだと思ふ。

「頑張っている様ね」

声が聞こえた。

「!!」

其の出所を探す私達の目の前で、

バチチ……チビビイイイ……!!!

紅い放電と共にスキマが開き、

「赤!!」

其処から異変の黒幕が現れた。

今度は最初に出会った時と同じ赤色の道士服を着ていた。

でも前までの余裕な表情は無く、少し息が上がっている様だった。

頬も若干赤みを帯びている。

「いったいどうしたのかしら?」

「……でもないわ」

そう言って、ぶっきらぼうに赤色の角縁眼鏡を指で上げる。

まるでひと暴れしてきた後みたいね……何かあった様だけど……

「アンタの配下は、もう三分の一にまで減ってしまったわよ。流石に余裕が無くなって

来たんじゃない?」

「………良く侵入出来たわね……雪を欺くなんて」

「お前の門番は唐変木で助かったよ」

レミリアが赤に一步詰め寄った。

「全部聞いたぞ。残りの配下も、私や私の配下とそっくりなんだとな」

赤は何も言わない。息もすっかり落ち着いていた。

「どういうつもりだ？私や咲夜達にそっくりの奴等で、夜明けにいったい何を始めるつもりだ!？」

すると赤が溜息をつき、

「……………其の様子だと、どうやら宿題は出来てないみたいね」
「!!……………」

急に話を逸らされ、レミリアは口をつぐむ。

完全に忘れていた。

簡単に言うとは赤の異変を起こした真の目的……其の予想をする事。

前に赤が去り際に私達に押し付けた課題だった。

当然私はしてない……というより、最初からするつもりすらも無い。

相手のペースに嵌められたくはなかったのが理由だった。

「御仕置きが必要ね」

そう冷やかに言い、指を鳴らした。

また紅い電気が走り、開いたスキマから誰かが浮遊しながら出てきた。

其の人物を見て、私は思わず目を見張った。

「アリス……!??」

でもそのアリスは私達が知っているアリスとは違っていた。

髪の毛も服も、瞳の色でさえも、身体の何処も彼処も真つ赤だ。

只肌の色は本物と同じだったけど、其の一面には今までの配下と同様に、血管の様に赤い線が走っていた。

そして胸には服の上から黒い金属の胸当てが装着されていた。

中心にあるコアらしき赤い宝石からは、肌と同様に走る紅い線が黒い金属に際立って見える。

あれも『英知の結晶』に違いなかった。

にしても……新しい配下を連れてきたの？

九人というのは嘘だった、て訳？

「最初に言っておくけど……」

アリスの肩に手をかけながら赤は言った。

「……………何よっ？」

私は聞くと、赤は笑いもせず、

「……此の娘は配下じゃなく、『本物』のアリスよ？」

「!!!」

「大変だったのよ……此の娘の友人があまりにもしつこいから……」

友人……!?アリスの友人って……!!

「アンタ……魔理沙から引き剥がして誘拐してきたの!？」

「やはりあの娘は昔の方が髪の色だけでなく、棘も無くて好きね」

其の時、私は嫌な予感がした。

「まさか……魔理沙にも何かした訳ではないわよね!？」

そう私に訊かれた赤は、

「今頃は、自宅前でズタボロになって気絶してるわよ」

素っ気なく答えた。

少なくとも私に気遣ったつもりではない言い方だった。

「流石に、死なない程度にね」

そう付け足された。

親友を傷付けられた私は、怒りのあまり罵倒しようとした瞬間、

「当然の報いよ。予想以上に速く此処まで損を被らせてくれた……だから此方も、其相
応の

手段を用意しただけ」

其を見透かすように言うと、いつの間にか用意していたのか、手元にあったスイッチを押した。

すると、其を合図にアリスに取り付けられていた胸当てが赤い光を放ち始めた。そして其処から伸びた、今度は全て赤く塗装された機械がアリスの両手と両足を覆い、装着されていった。

(!!中にも『英知の結晶』が収納されているの……!?)

私は御破い棒を手を持ちながら内心そう思った。

そして完全に機械に覆われたアリスの両腕が、さつき外で昔の魔理沙に化けていた赤が腕に付けていたものと同じ様になった事にも気付いた。

目も最初は瞳だけ赤かったものが、白目までもが赤く充血していった。

すると、赤が私達に右の掌を向けて言った。

「五分よ。五分だけにしてあげるわ」

「!五分?御仕置きにしては短いわね…アリスも返してくれるわよね!」

「ええ、勿論」

淡々と言う。

「但し、五分以内に倒せなかった場合は……貴方達は……」

赤は出した掌を返し、手の甲を向けて握り拳にし、

「こうなるわよ?」

無表情のまま、握った指を勢い良く広げた。

顔から血の気が引いたのが自分でも判った。

恐ろしい事を知ったわ……つまり……!

「制限時間……まさか、時限爆弾!!?」

レミリアが代弁してくれた。

「彼女を選ぶか、異変を選ぶか……まあ、時間を重視してるのならば……」

赤は言いながら、再び後ろにスキマを開いた。

「！待て！！卑怯者……！！」

背を向けて入ろうとする彼女に向かって、レミリアが突進していった。が、すぐに間に機械を纏ったアリスが立ち塞がった。真つ赤な目は何も見ていない。レミリアは慌てて突進を止めた。

「！」

今の行動で判った事があった。

赤はアリスに大量の『赤色』を流し込んで意識を奪い、洗脳しているのね……

そして同時に多分『赤色』を燃料にする、生きた爆弾に……！

歯ぎしりが出る。

「遂に本性を現したわね……凶悪な本性を……!!」

「……凶悪？」

すると私の言葉に反応した赤は、首だけを曲げてアリスの後ろから此方を見返した。

「そもそも私は数学的に物を考えるのが好きだもの……数が四捨五入出来ると同じ様に、

他人もそうとしか見ていないのよ……其に……」

そう言うと、視線を下に向け……

「人は、私だけ、何も悪くないのだから……」

意味不明だった。他人を時限爆弾にしたくせに……他人を切り捨てる物としか見ていないのに……

自分は何も悪くない!? 頭がどうかしている……

!? 待つて……今アイツ、自分を何と……!?

でも気が付けば赤は、アリスの後ろでスキマの中に消えていった。

「! 待ちなさい……!!」

そう言った時には、既にスキマも閉じられていった。

「霊夢!!」

レミリアが私の隣に戻ってきた。アリスと距離をとるためだと判る。

今は先ず、アリスを急いでどうにかしないとイケなかった。

アリスは無言のまま両手を広げると、背中から人形ではなく、紅い円盤みたいな小型の機械ユニットを数個放出した。

「今度は殺さない程度に……良いわね!？」

レミリアならやりかねないと思い、忠告する。

「配下じゃないから判っているわよ!」

「よし……じゃあ行くわよ!!」

課された補習は始まった。

でも、赤の思惑は、依然として判らなかつた。

少女裁判～人の命弄びし少女

REMIILIA

VSへ赤色の人形遣い∨アリス・マーガトロイド

く蒼魔塞 5階

【『英知の結晶』爆発まで残り4：49：36】

「……………やってくれたわね、赤……い」

身も心も『赤色』で真つ赤に満たされたアリス本人だった。

だが広げた腕の先、両手はだらりと下がっていて不自然だった。

其はまるで空中で糸で吊るされた人形の様であり、十字架に磔にされて処刑を待つ囚人の様でもあった。

夜に襲ったとはいえ、人形遣いを人形にするとは……其に人形にただけではなく、爆破する様にまでしている。

やっている事が人形を起爆させるアイツと気味が悪いまでそっくりだ。

「胸にある機械の中心……あの赤い部分が弱点ね」

霊夢が隣で呟いた。

「！根拠は在るの？……それとも、また御得意の勘？」

「長年異変を解決してきた私の勘を信用出来ないの？」

今回ばかりは命がかかっているのに……

円盤型のユニットが突然赤いレーザーを霊夢に向かって放って来た。

「！霊夢!!」

「判ってるわよ！」

とつさに横方向に前転をしかわす霊夢。

今度はアリス本体が私に向かって中を滑る様に接近してきた。

「!?」

アリスが飛翔するよりも速い。

其の予想以上の速さに、動作が一瞬遅れた。

気付けば腹に蹴りを喰らって吹き飛んだ。

「!?ウグウ……!!」

甲冑の様な機械を纏った足から放たれた、いつもより強烈な蹴りだった。

「レミリア!!」

霊夢が叫んだが、レーザーが飛んできたので回避した。

だが、地面に無様に倒れるほど、私は馬鹿ではない。

飛んでいる間に素早く体勢を立て直そうとした。

だが、

「!?ゴホオオ……!?」

後ろからの衝撃を受け、其のまま鉄の床に叩きつけられた。

「!!?」

背中にギリギリと圧迫される感触がある。

先程私を蹴り飛ばしていた甲冑の足が、私を踏みにじっていた。

目だけで見上げると、アリスが見下していた。

白目も瞳も真っ赤になっていて区別が付かない。

「……さつきまで、前にいた……筈な……のに……!?」

するとアリスの後ろで、

バジビビィ………!!!

赤紫色のスキマが赤い放電と共に閉じられるのが見えた。

まさか、スキマを使つて後ろに……!?

いや、人形遣い如きが空間を裂いて移動できる訳が無い……

「…………『英知の結晶』の…機能の一つか…………!」

赤ならやりかねない……自分の能力を自作の機械に内蔵させる事くらい造作も無いだろう。

でも……

「私だけ……見てて……良いのかしら!？」

「?……………」

人形遣いは其の声に反応にして、無言で顔を上げたが、

「『妖怪バスター』!!」

其の時には前方から霊夢がアリスに向かって大量の御札を殺到させていた。だが、アリスが抑揚のない声でスペルを唱えた。

「………暁符『平安の天児人形』」

其と同時にアリスの皮膚に浮いた、赤い血管の様な模様が輝いた。

（！配下の時と同じだわ……！！）

すると円盤の一つが変形し、いつも従えている人形の様になった。

そしてアリスに向けて飛ばした霊夢の弾幕が命中する直前で、まるで吸い込まれるか
の様に

人形になったユニット達に進行方向を変えた。

「!?」

そしてアリスの代わりにユニットに命中し、爆発した。

「！弾幕を引き寄せて、身代わりにさせるのね……」

霊夢の言葉にもう一期視線を上に向けると、次々と変形していくユニットからは目視出来る程に紅い波状のオーラが出ている。

あれが弾幕を引きつけていると言う訳か……

「札じゃ負けるわね……だったらー！」

霊夢はそう言う一旦後ろに下がり、

「『パスウェイジョンニードル』!!」

今度は札ではなく大量の針をコアにめがけて発射した。

札より空気抵抗の少ない針状の弾幕でユニットの引力を振り切り、命中させようと言

う

算段ね……

だが、此等もユニットに引きつけられて軌道が逸れてしまった。

「!?……………」

私は背中を踏んでいたアリスの足が熱くなっている事に気付いた。

もしかして……………！私は霊夢に叫んだ。

「霊夢急いで！あと少ししか時間が無いわ！」

「でも此では、アリスにつけてる『英知の結晶』に攻撃を当てられないわ……………」

そう言いかけた霊夢が気が付いた様に喚いた。

「なら、何ボサツとしてるのよ!!アンタも早く脱出して攻撃してよ!!」

「私、踏みつけられて身動き出来ないのよ！見て判らない!?」

「蝙蝠になれば良いじゃない!!」

……どうかしてたわね……まさか私自身が、焦りのあまり此の方法を忘れていたとは……

つい数時間前にも使用していたじゃないか……

私は気を取り直して、能力を使用しようとした。

まさに其処で、何処からともなく身体中が締め付けられた。

「!?うぎゅ……!?」

思わず変な声が出たが、すぐに目だけで鎖の出所を探した。

私を踏んでいた方のアリスの足の機械が展開し、そのふくらはぎの両側から
紅いオーラで出来た鎖が一本ずつ射出され、私の身体に巻き付いていた。

「くく逃がさないつもりね?……でも、甘いわ……」

だが、

るに違いない。

其の間にも霊夢がありつただけの弾幕を放って尽力しているがどれも空しく、アリスの身体のをかすりもせず通過していった。

此のままだと縛られ、逃げられないまま無様な最期を迎えてしまう……！
卑劣な作戦だ……くそ……赤い………！！

バキィィィ………
!!!!!!!

「!?」

突然鈍い音がしたかと思うと、急に身体が軽くなった。

何が起こったのかが判らなかつた。

目線を上にあげると拘束していたはずのアリスがいない。鎖の拘束も解かれていた。

「?……………何が起きたの……………?」

目線を変えて霊夢を見た。霊夢も啞然としている。

「判らない……………誰かが、素早くアリスを叩き飛ばしたのよ」

上半身だけを起こして、廊下を見渡した。

いた。私の後ろ、其も相当な距離が開いた廊下の上にアリスが仰向きで倒れていた。

手足を纏っていた赤色の機械が、折りたたみながら胸の『英知の結晶』に収納されていた。

其の『英知の結晶』の真ん中部分が酷くへこんでいて、紅く放電していた。

そして其処から始めて気が付いた。其の奥に別の誰かが立っている。

輪郭からして随分小柄だ。

「…………危なかった」

ソイツがアリスに近づき、胸の機械に手を伸ばした。

「…………もう少しで、また犠牲が出る処だったわね…………」

伸ばした手が明るいところまで伸びた時、驚いた。

機械の腕だ。人間ではありえない、二本指の開閉式のアームだ。

其の腕が人形遣いから機械を取り外した。

すると身体から何か紅い霧状のものが抜け出てきた。『赤色』に間違いない。

其に伴ってさつきまで身体の芯まで真っ赤だった姿が一変、もともと赤かったリボンまでもが

青くなつていった。

「…………こんな小細工を…………」

其の人物がそう言うとともに機械が窓の外に飛んでいった。投げ捨てたのだ。

そして横たわっていたアリスの姿が奥の暗がり引き摺られて、宙に浮いたブーツだけしか

見えなくなった。

やがてアリスは抱きかかえられている事を知った。

アリスよりも小さいのに凄い力だった。

「気を付けて……アイツがアリスをぶっ飛ばしたのよ」

声が聞こえて横を見ると、いつの間にか霊夢が隣に来ていた。

すると、

「……そつちに連れていくわね」

「!!」

今度ははつきりと其の声を聞いた私は身体が震えた。

聞き覚えのある此の声だった。恐らく、今まで聞いていた誰の声よりも多く聞いた此

の声……

其の姿が此方に近付いてきた。
私の上ずった声が漏れた。

「まさか……お前は……!!」

一歩ずつ近づいてくる。
其の姿が月の光に照らされ、全身が見えた。

「マステア……アズール……!!」

自分と同じ蒼い自分が其処にいた。

今までで一番聞いてきた……『自分の声』の主が私を見ていた。

二律背反の吸血鬼

REIMU

く蒼魔塞 5階

今の私には、二人の吸血鬼が視野にいる。

隣にいる一人は突然の自分の偽物の乱入に唖然としている。

目の前の一人は自分より体格の大きいアリスを悠々と抱えている。

一人はレミリア・スカーレット。今回の異変解決のパートナーだ。

そしてもう一人はマステア・アズール。異変の黒幕の側近、レミリアのそっくりさんだ。

でもよく見ると少し、いえ、かなりの違いがある事が判った。

側近の姿を見た私は思わず眩いた。

「サイボーグ……？」

アリスを抱える左腕、そして右脚が機械になっていた。

左腕は、さっきアリスの胸から『英知の結晶』を剥ぎ取った腕と同じだった。どちらもアリスの胸に装着されていたのと同じ、黒色を主とした金属に指先の細部まで走るラインが赤く光っていた。

良く見ると背中の中の翼の内、左の方も機械化されていた。

黒い機械の骨格の間を紅い結界の様な、透けた翼膜が張られている。

其でも顔はレミリアそっくりだ。

今のレミリアと同様、目、そして帽子から其のリボンまで完全に青色だった。

他の配下にはあった頬の紅い幾何学模様がない事もまるで今の本物の様かと思わせた。

でも顔に関しては、一つだけレミリアと異なる点があった。

右目が無い。眼球そのものが無い。

空いた眼窩の中には何もなく、黒い穴がぼっかりと口を開けていた。

『……マスイは、そんなに……人間味が残っていないもの……』

さつきへフェリーが死に際に言っていた言葉が頭に浮かんだ。
今やっとその言葉を理解する事が出来た。

「博麗霊夢、そして、レミリア・スカーレットね？」

名前は外の世界で知れ渡っている」

「……外の世界を颯爽とひけらかしているわね」

私が返す。

「其より、配下が主人の邪魔をしちゃっても大丈夫かしら？」

流石に仲が悪くても其処までは無いと思うけど……」

マステアは答えなにかわりに別の言葉が飛ばしてきた。

「私が赤と仲が悪かった、とは雪から聞いたな？」

「！雪がバラしたってどうして判るの？」

そう訊ねると、

「赤の一番傍で仕えている以上、他の配下の性格云々は把握しておく必要が有るからね」
素っ気なく、そして側近らしい答えが返ってきた。其の後に一言呟いた。

「…気の毒だ」

私にははつきりと聞こえた。

「何が気の毒なのかしら？」

そう訊いても、何も聞いていなかったかの様にまた話題を無理矢理戻してきた。

「赤と仲が悪いのは、至極簡単だ。一部はヘファイから聞いた筈だ」
「ヘフェリーなら死んだわ」

今度は私が素っ気なく付け加えた。

「『赤色』で醜くなりながらね」

だが、

「……そうか、死んだのか」

其の一言に遺憾より、寧ろ安堵の響きが強い事に驚かされた。

「赤じゃないのね？ 貴方達なのね？」

次に来た其の質問の内容がさっぱり理解出来なかった。

仲が悪くても、やはり考える事には変わりが無いじゃない……

私達が答えなくとも事を察したらしく、マスターは溜息をついた。すると、またポツリと呟いた。

「……事故だ」

「事故……?」

「其の通り、事故だ」

事故……此もヘフエリーが同じ事を言っていた……何があつたのかしら?

すると彼女は、抱えていたアリスを身体を出来るだけ慎重に床に下ろしながら話し始めた。

「ある日此の要塞で突然伝えられた。身体の中に色素を過剰に取り込むだけで、普段自分には無い

特別な力を発現出来る……本当にそんな事が可能なのか?

赤の傍にずっと仕えていた時には、其に関する研究を一度もする様子を見せなかつた。

最初は私も他の配下同様、赤から『赤色』を貰う事を楽しみにしていた。

お陰で其の頃から私に構ってくれる事が少なくなっていたが、そんな事は二の次に思

えた」

私達は何も言わずに聞いた。

「そして其の曰……他の配下達が頬に次々と異なる模様が浮かばせて喜ぶ中、

残った私にも順番が到来した。

私は、赤が紅い螺旋を自分の胸の中に静かに入れるのを見ていた。遂に私も、未知の力が手に入れられると思つた……」

其処まで言つたマスターが口を閉ざした。

「……何なの?」

彼女は、血の氣の無い顔で続けた。

「適合しなかつた。『赤色』は事もあるうか、私の身体に対し拒否反応を起こした。各部位に蔓延していた『赤色』は炸裂した。そして今は……此の様だ」

そう言つて、笑みを浮かべながら機械の左翼を振つた。

其の声には自嘲的な響きがあつた。

私は訊ねる。

「じゃあ、其の機械は……全部……」

「『英知の結晶』だ。赤曰く、ね。直後に私の為に緊急で造り、私の欠損部分を止血、此を装着させられた」

そう言つと、突然其の顔から笑みが消えた。

「其以来、私は他の配下が赤から『赤色』を貰うように促しても断つた。

二度とあんな目に遭うのは御免だったからのも有るけど……」

マステアは少しうつむき、窓からの外の光で其の顔に影を落としていた。

「私はあの女に殺されかけたが、同時に生かさされもした。此の一連で確信した。

赤には私達配下を慈しむつもりは毛頭無い。只、玩んでいるんだ、とね」

次の瞬間、私は影になったマスターアの右の窩に、吸い込まれそうな感覚を覚えた。思わず身震いをしてしまう。

配下の主への遺恨……其は、此処まで深いものになるの……？

「私は敢えて『英知の結晶』の義眼を入れる事も、歩く事が出来れば十分、という名義で断った。

だが本当は……忘れたくなかったのよ。アイツが心底に大事に隠している、嗜虐性を……」

すると、マスターアの様子が変わった。何かを警戒している。

「いけない……あまりにも時間がかかり過ぎた。急がないと赤が戻って来るかもしれない」

すっかり忘れていた。もう配下の半分以上が倒された今、さつきと同じ様に私達を

妨害してくる可能性が高くなっている。

「其に今の赤は私の帰還を知らない。其に『英知の結晶』の実証検査が失敗したと判れば……私について来い。直ぐに近道で此処から離れよう……」

「待て」

突然レミリアが遮った。

自分と似ている配下に出会ったシヨックから大分立ち直っている様子だった。

そして其のままマステアの方に歩き始めた。

後ろ姿でも、相手と同じ蒼い目がギラギラしているのは手に取る様に判った。

「……私が自分の偽物を前にして、平然といられると思うか？」

素直に従うと思うのか？ そう簡単には引つかからないぞ」

其に対し、同じ声が返す。

「……私はもう奴の指示を受けるつもりは無い。相手は私達を遊び、お前達からはアイ

デン

テイテイともいえる『赤色』を奪い、好き勝手に利用している女だ
其に、互いに靈力を空費したくは無いでしよう？」

正論をぶつけられ、レミリアはグウの音も出なくなった。

「レミリア…：残念だけどマステアの言う通りよ。相手も、私達を利用しようと
している訳でも無さそうだし……」

そう言った私が驚いた。私が、敵に同情している言葉をかけるなんて……
レミリアの首がうなだれた。考えている、すぐに其が判った。

双方の利害一致によって自分の偽物と共闘するか……
其とも、己のプライドに任せて偽者と対峙するか……

どちらを選ぶのか悩んでいる。

でも、どちらにしても彼女が良い気にはならないのは目に見えていた。

やがて顔を上げ、マステアに言った。

「……判ったわ。でも此の異変が終わらせた後に、必ずお前を殺す」

「……紅魔館は、良い主を持っているわね」

紅魔館の名前が出るなんて……やっぱり、家出感覚で蒼魔街と外の世界を
行き来していただだけはあるわね。

「ん……」

すると二人の足下でアリスが小さく声を上げた。気が付いたのね。
マステアが屈んだ。右の瞼は閉じている。

「大丈夫か？」

アリスが薄目を開けて声をかけた彼女の方を見た。

「!?レ、レミリア……!?」

慌てて両腕で上半身を立てた。

レミリアとは明らかに違う事に気付いている。

『『赤色』は個人差で益にも害にもなる。暫くは安静にしていた方が良いわよ?』

「アンタ……!?何……何なの……!?」

マステアの弁解でますます離れようとするアリスだったが、反対側のレミリアとも目があった。

其の動きが止まり、只でさえ驚いていた其の目がますます丸くした。

「くくレ、レミリアが……ふ、ふ二人……!?」

「とりあえず理由は後にさせてくれ。今は時間が無い」

マステアの言葉に少々苛立ちが見えていた。

アリスは暫くは其の姿勢のまま唾然としていたが、また床に倒れた。今度は気絶……本当に面倒くさいわね……

まあ、同じ人物がいきなり二人もいれば、混乱もするだろうけど。するとマステアが、思い出したかの様に私の方に顔を上げた。

「実はだけど此の階に、配下はおろか、私達側近でさえも立ち入りが禁じられている場所がある」

私は耳を疑った。

「其、本当？」

「ええ……だが、其処は鍵だけでなく、どうも厄介な結界が仕掛けられていて通れない。赤が外出している間、何回か試したが無駄だった……」

「結界なら私に任せて。結界破りは御手の物よ！」

マステアが私を見た。

「やはり、博麗の者か……外の世界での噂は、やはり伊達ではなかったのね」

「当たり前よ、私を誰だと思っていたのよ？」

「おべんちやらは良いから、さっさと其処に案内してよ」

レミリアが焦れつたそうに言った。

「なら、アリスはどうするの？」

私は倒れている彼女を指差した。

「私が抱えていよう。幸い、『赤色』は身体から完全に抜けている。すぐに目を覚ますわ」

「マステアが其の下に両腕を滑り込ませ、再び軽々と持ち上げた。

其でも、やはり体格の差があるのかアリスのブーツの踵が、金属の床に付いていた。

赤……まだ何かあるのね。さっきアリスをけしかけた時から、様子が変だとは思って
いたけど……

なら今度こそ化けの皮をはがして、文字通り赤っ恥をかかせてやるわ！

謀反者について行きながら、私はそう思った。

レッド・マシン、ブルー・ヴァンパイア

H U C H I

???

「……不覚でした……！……まさか……」

……

「まさか、彼女達が……侵入者でしたなんて……！も……申し訳ございません！赤様！！」

……

「私、藍 雪……！必ずや私達を欺いた、あの侵入者共をなぶり殺しに見せます！
ですから……！！」

.....

「そうね.....じゃあ.....」

「？赤様.....？な、何でしょうか、此は.....？私の眉間に何を.....??？」

「貴方も.....『失格』ね」

私のスキマの中、誰にも邪魔されない此の場所で、何度も、銃声は響いた。

R
E
I
M
U

く蒼魔塞 5階

私達は今蒼魔塞の5階を歩いていた。

私は上を見上げていった。

「広いわね……」

4階までは天井と壁に囲まれた直方体を引き延ばした様な廊下が続いているだけだったが、

此の階からは全く変わり、柱が数本、数倍幅広くなった通路から高い天井へ真ん中に沿って

建っていた。

ろくに飛翔も出来ずに通路を歩いてきた私達にとっては気持ち良い程解放感に溢れた

空間だったわ。

アリスとの戦闘で直ぐには気付けなかったけど。

「下の階までは侵入者を撃退する為に作られたと言っても過言ではない。だから赤は自分の大切に思っている階に、来れる筈が無いと踏んでいる。

従って此の階からは異類は一切存在しない。安心して歩けるわよ」

マステアが前を見たまま私達に説明した。

其の後ろ姿からはみ出て見える、アリスのブーツが金属の床に擦れている。

「まさか、其処を侵入者の私達が歩いているんだから驚くわよね？

雪にも感謝しないと。彼女からはいろんな情報も貰ったし……」

「！隠れろ！……」

突然マステアが横に飛び、傍に建つ柱の影に隠れた。私達も其に続いた。

「いきなり何なのよ……!?!」

声押し殺してマステアに怒りの声を上げた。

其に応えるかの様に、彼女は機械化していない方の手である一点を指差した。

「見ろ」

其の先の廊下に、人影が立っていた。

主から染めて貰ったであろう紅いメイド服。そしてカチューシャをしている

金色の髪が、窓からの月の光に反射して輝いていた。

其の腰掛の端にはおびただしい数のナイフと、赤い鍵が一本ぶら下がっている。

右頬に時計の針を合わせた様な紅い幾何学模様があった、咲夜そっくりの顔だ。

でも其の顔は何処か怯えていて、せわしなく廊下を見渡している。

待宵 知流だ。偽美鈴から聞いた名前を思い出した。

「名前は…此も雪から聞いたわよね？」

「ええ、アイツが待宵 知流…此処のメイド長ね。色だけは夢子そっくりね」

私の言葉に反応したマステアが此方を見た。

「夢子？」

「魔界っていう場所のメイドよ。一度手合わせした事があるんだけど」
「魔界？そんな場所が、外の世界には存在していると言うのか……？」
「ええ。因みにソイツは、其の魔界出身なのよ」

私はマステアが抱えているアリスを顎で指し示した。
マステアがうつむき、腕を組む。

「そうか……外の蒼世界には、まだまだ知らない事象が存在するのか……」

すると、何も音はしなかった筈なのに突然知流がビクッと反応し、私達の居る
反対側の廊下に首を向けた。

「！うわ、何……？過剰にオドオドしてビクビクして……頼り甲斐無さそうね……」

咲夜でもあんな態度取らないわよ？」
「畏を解除し忘れるのも領けるわね」

私とレミリアは呆れる。

すると、腕組みをほどいたマスターがもう一度指差した。

「彼女の後ろにあるの……判る？」

「！あ……！」

私達は同時に声を上げた。

大きな扉があつた。下の階にあつた大図書館に続く扉とそっくりだった。

只、あの扉には太陽の文様があつたが、此方には三日月の模様が施されてある。

一見、大きさ以外は何の変哲もないけど……

「あれには二重のセキュリティが施されていて、其の奥は赤しか立ち入る事が出来ない。

其の一つの解除方法が、知流の持つてゐる赤い鍵だ。わざわざ鍵を配下に持たせて警護させる

事自体珍しいが……」

「焦つて冷静さを失つてゐるんじゃないかしら？」

レミリアが言った。

「そうだと、有り難いわね」

「じゃあ、どうするのよ？」

私はマステアに訊ねる。

「……止むを得ない。私が彼処から退去させる。鍵も奪取する」

マステアは抱えていた人形使いを静かに床に寝かせ、立ち上がった。

「此処にいて。無駄に戦わせて、靈力を空費してはいけない」

そう付け加えて、柱の陰から出て扉に向かって歩いて行った。

「……思わぬ策士に巡り合えたわね」

其の背中を見ながら顔をしかめていたレミリアに、私は囁いた。

マステアが知流の横まで来た。知流は周りを気にしているのかまだ気が付いていない。

『灯台下暗し』が良く似合う風景だった。

マステアが声をかけた。

「知流」

其の声で、弩で弾かれたかのように偽咲夜が飛びあがり、慌てて姿勢を直して敬礼のポーズをとる。

「!? マ、マママステアお、御嬢様……!! お、御帰りなさいませ……!!」

此処まで来ると、もはやギャグとしか思えない。本人は必死なんだろうけど……
思わず笑うのを堪えた。

アイツ、本当に時を戻す力なんて使いこなせてるのかしら？

「マドウは元気か？」

マステアは話す。

どうやら彼女の妹、マドウレート・アズールについて話している様だった。彼女が静かに話しかけるあたり、知流の態度に慣れているだけはあった。私だったら苛々して蹴りを入れていたかもしれないわね。

「！え、は、はい……相変わらずの、御様子で……へ、部屋を血染めに……」
「元気そうね」

そう言うとマステアは腰に手を当てた。

「ところでだ……赤は何処にいる？」

「！え……!?ふ、赤様は……其の……」

「赤と話がしたい。『赤色』に関してなんだが」

『赤色』という言葉聞いた途端、知流の顔がパツと明るくなった。

「け、決心………されたのですね……!!?」

「唯の相談だ。他意は無い。後、此処は立ち入り禁止の場所の前よ？」

「此処にいて大丈夫なの?………」

其の時、私達は見た。

手を腰にあてていたマスターアの機械化された左腕の肘部分。

其処から、小さいアームが床に向かって伸びていくのを。

「!!………」

咲夜もどきは話を聞く為にマスターアに顔を向けている。全く気が付いていない。

「霊夢………あ、あれ………」

「判っているわよ……!!」

珍しいレミリアの震え声に応えながらも、啞然としていた。

アームは床すれすれを這いながら知流の真下まで来ると、まるで毒蛇が鎌首をもたげ
るかの

様にスルスルと伸びあがり、腰に付いた赤い鍵の真下まで来ると其の先端の三本指を
開いた。

「！」

鍵を音も無く摘み、腰から外し、再び音も無くすると戻っていくと、今度はマス
テアの

後ろに伸び、背中を伝って後頭部にまで到着した。

そして帽子の中に機械の手を潜り込ませ、鍵を隠した。

「!!……………」

そして一連の動作を終え、役目も終えた機械の小さな腕は、マステアの肘に収納され
ていった。

あまりに呆気無く、そして、鮮やかだった。

横を見るとレミリアはぼかんとしていた。流石に驚きを隠せなかったらしい。

「……………赤を呼んで来てくれ。此処で待っているから」

そんな私達の驚愕を余所に、マステアは平然と命令を下した。

あの間にも偽咲夜と何か話していたんだろうけど、全然耳に入っていないかった。

「は、はい……………!!」

鍵を盗られた事に気が付いていない駄メイド長はそう言うのと、踵を返して走っていった。

途中で小さく、何度か転びながら。

「……………」

見えなくなるまで見届けたマステアは此方を見て、隻眼ながら目で来る様に合図し

た。

「流石……もう……いろいろと流石ね」

私は柱の陰から出て、マステアに歩み寄りながら言った。
レミリアも一歩後ろからついて来ていた。

「知流はいつもオドオドしてはいるが、上位の私達に対しては非常に忠実だ。
其に、下位の者に対しても雪と真逆の対応をする」

そう言いながら帽子を外し、機械化していない手で髪の上に乗っていた赤い鍵を
取った。

「非常に優しく、素直で面倒見が良い。故に赤だけでなく、他の配下からも人気は高い
……」

……振舞の可愛さも兼ねてな」

苦笑しながら鍵を手渡してきた。其を受け取って見た。

「鍵だ。持ち手から此処の扉のものという事は相違無い筈よ」

「此が……第一のセキュリティのキーね？」

鍵は錆ではない、紅い金属で出来ていて其の持つ部分が赤い三日月を摸していた。

此処での雰囲気からしてカードか何かかと思っていたけど、普通の先の細い鍵を採用している所

からすると、赤にも意外に古典的な一面がある事が覗えた。

すると、マスターがまわりを見渡し始めた。

「処で……もう一人は？」

「！いけない、置いて来てしまったわ……！」

振り返って見ると、柱の陰に其の姿が横たわったままだった。

私がアリスの処に戻ろうとしたが、

「心配は不要よ」

マステアが止め、機械の腕を彼女に向けた。
私は思わず訊く。

「何をするつもり……!?!」

其の瞬間、腕の肘から手の部分が金属音と共に二股に分かれた。

「!?!」

思わず後ずさりをしてしまった。

そして其の分離した腕達が、マジックハンドの様に平行に伸びていった。

アリスの処に到達するとが平行に動きながら、さつきマステア本人が抱き上げるのと
同じ様に器用に彼女を下から抱え上げた。

二等分されている筈なのにアリスを抱え上げる。とてつもない程の耐久力ね……

そしてアリスを抱えたまま、此方に向かってゆっくり戻ってきた。戻ってくる速度は、抱いているアリスを気遣つてのものに違いない。

「……随分と便利な腕ね……」

機械の腕を一本に戻しながら再びアリスを抱えるマステアを見ながら、レミリアが思
わず

言葉を漏らしていた。

「私自身は気に喰わない……赤が創った腕だもの……」

マステアは歯ぎしりを漏らした。

「そんな事よりもセキュリティだ。知流が戻って来る前に済まそう」

私は紅い鍵を手に、紅い扉に立った。

レミリア、そしてアリスを抱えたマスターは一步下がった処にいる。

「さあ、赤裸な真実……暴き出してやろうじゃないの！」

そう言うとは私は、解印の準備を始めた。

蒼月の下で……

ALICE

蒼魔塞　5階

私は今、いろいろと吃驚している。

目を覚ますと、レミリアが私を抱えている。

でも、どこか変だった。半分機械的で……何も喋らずに前を向いている。

しかも自分より明らかに重い筈の私を抱えているのにビクともしない。

私、こんな人形、作った覚えは無いけどな……いや、絶対に無いわ。

そしてレミリア似の彼女が見ている方に首を曲げると、霊夢が大きな扉を前にして足下に術式を展開しているのが見えた。

片手の指を二本立て、其を縦に、横に振っているのも見える。

何か封印をしているの……？其とも解印をしているの……？

私には、さっぱり状況が理解出来なかった。

すると扉の表面に紅い幾何学模様が浮き出てきた。

「!?……」

そして其の模様が直ぐに扉の表面にこびり付いた泥が落ちる様に、上から下に消えていった。

同時に霊夢の足下に張り巡らされていた術式も消滅した。
其処で彼女は息を一つついて、額の汗を拭い、

「……じゃ、開けるわよ?」

背中越しに私達にそう言う袖の中から鍵を取り出し、扉にある穴に差し込んで回した。

すると扉の中で大きく、鈍い金属音が響いた。

「……解錠成功ね」

そう言いながら振り向く、霊夢と私の目があった。

「!アリス……!気が付いてたの!?!」

「!目が覚めたか……!」

突然上からも声をかけられ、慌てて見上げた。
レミリア……に似た少女が私を見下ろしていた。
剥き出しの右目の窩が、恐ろしかった。

「!!イヤ……!!」

すっかり気が動転した私は一刻も早く離れようと、彼女の腕の中でもがき始めた。

「落ち着きなさいよ?で……また気絶しないですよ?」

其の声を聞き、其方に首を曲げた私はまた驚いた。
私を抱える彼女の隣に、もう一人レミリアがいた。

其の彼女が溜息交じりに私に言ったのだ。

機械的ではない。今度こそ本物のレミリアだ。私には判った。

あわあわと声をにならない声を上げていた私は、其のまま質問をした。

「くくどうして、どうして、レミリアが…一人…???」

「其は、私が説明するわ」

そう言うと霊夢が私達の方に歩いてきた。

「立てるか？」

「え、ええ……」

私は霊夢と今まで抱えていたレミリア似の少女に助けられながら立ち上がった。

少し足がふらついたけど、其も何秒かで慣れる事が出来たわ。

「でも其の前に、さっさと此の扉をくぐるわよ？」

大きな扉の片方を押し開けながら本物のレミリアが言った。

「そうね。誰かに見られたら面倒ね」

私は霊夢に誘導されながら、其の扉をくぐった。

レミリア似の少女が私を護衛するかの様に、其に続く。

A L I C E

く 蔽守された連絡通路

「成程……そう言う事ね」

鉄の橋を渡りながら、私は霊夢から聞いた事情に納得していた。
首に巻いている、蒼く変色したりポンを手にとって眺める。

現在、此の幻想郷では赤色を含むもの全てのものから赤色を抜かれ、青くなっているという異変が発生している。其の元凶は私を誘拐した、八雲赤という紫そっくりの双子の姉だという。

其の赤自身が提案した異変の解決手段は、彼女に従える、霊夢達が紅霧異変に戦った者に

そっくりの配下を計九人全員殺して彼女を説得するというものだという。霊夢達いわく、既に五人殺しているとの事。

で、さっきまで私を御嬢様抱っこをしていて、今は目の前で歩いている半レミリア、半サイボーグのコイツはマステア・アズール。

赤の側近、つまり霊夢達が殺すべき彼女の配下の一人だった。

どうして殺さないのかというと、彼女には赤との確執があつて其が理由で此方に協力してくれているという。だから、赤に兵器として利用されていた私を介抱してくれたのね。

現在は、異変の解決も視野に入れつつ、赤が持つという秘密が眠る場所に向かっているという事
らしかった。

私も何回かは魔理沙と異変解決をして来たけど、此ほど異質で酷な解決方法は初めてだった。

「…にしても、大図書館の時と変わらない鉄橋ね。秘密にする事無かつたんじゃないかしら？」

霊夢が言った。

突然横から強い風が吹いてきた。思わず目を細める。風が吹き止んだ後、私は橋の手摺越しに下を見た。

塔の周りがある、蒼い建物の屋上が小さく見える。

こんな高い処に連れて来られていたのね、私……

「！誰か倒れているわ……！」

突然レミリアが声をあげるのを聞き、私は橋の上に視線を戻した。

確かに誰かが、橋向こう岸にある月のモニユメントの前に倒れている。

「誰かしら?」

霊夢が目を細め、其の人物が誰かを確かめようとしている。
すると、

「!……まさか!!」

「マステア!」

マステアが其の倒れている人物に走っていった。

以外の二人が慌てて彼女の後を追った。

訳が判らず私も後を追う。

先に辿り付いていたマステアは、橋に寄り掛かっていた其の身体を抱えていた。
私を今まで軽々と運んでいただけに今回も容易そうに持ち上げる。

やっと私も追い付き、先に着いていた霊夢達の後ろから其の人物を見た。

「!!?」

眉間、腕、胸、足には無数の穴が開き、其処から流れる血が服や肌を青く染めていた。恐怖で開かれた目が虚ろだ。死んでいる。

「雪……！雪……!!」

マステアが名前を呼んでいる。人の名前かしら？

「酷い……！」

霊夢が呟いた。

「霊夢、コイツは……?」

私は霊夢に訊いた。

「赤の配下で、藍 雪。此処の門番をしていたのよ。勘違いだったけど、私達に此処を親切に案内もしてくれたわ」

確かに見てみるとさつき説明された通り、其の服装、其の髪型。色は違えど紅魔館にいる門番、紅 美鈴に酷似していた。

他の配下も、誰かに似ているという事なのかしら……？
すると其の顔を見ていたレミリアが何かに気付いた。

「！頬や右腕の菱形模様が無くなっている……『赤色』が抜かれているわ」

「？模様？『赤色』？」

私はまた訊いた。霊夢がまた応える。

「赤の配下には身体に紅い模様があるの。其の模様は、言ってみれば持っている者に強力な力をもたらすのよ」

すると門番そっくりの姿が、青く変色していった。

「！何………？」

思わず驚いて声が出た。

すぐに蒼く染まった身体はポロポロと塵となり、崩れ始めた。

「！ああ………！」

マステアは声をあげたが、塵は風に煽られ、夜空を舞いながら彼女の腕の中から離れていき、そして完全に姿が消えた。

私は夜空を舞っていく塵を視線で追い、其の先に上る、大きな蒼白い月を見上げた。星空の中に居座る其は魔理沙と一緒に解決した、永遠亭の異変の時よりも大きく感じた。

其が地上に降らす蒼白い光に、私は初めて悲しさを覚えた。

「あああ………雪ええ………!!!」

マステアが両膝をついた。右の機械の足が橋に擦れて金属音が響く。

「……………」

霊夢は泣きそうな目でマステアの背中を見ていた。

レミリアは両目を閉じてマステアから目を背けていた。

どちらも言わずに黙っていた。

敵の配下とはいえ、此処へ導いてくれたという恩義を感じているのかもしれない。

「赤だ……アイツが殺したに違いない……!!」

マステアが呟いた声は、震えていた。

「きつと……罰として、殺されたんだわ……」

霊夢が言った。

「私達を此処に招き入れた、失態を犯したから…」

「だからって……何も……殺す事は……!!」

彼女達のやり取りを聞いていた私は、思わず唇を噛みしめた。

何処であれ、配下の間にも事情と言うのがあるのかしら……

紅魔館で言えばレミリアと言う主の下で、咲夜と美鈴、パチユリーや小悪魔……

命蓮寺で言えば白蓮と言う住職の下で、ナズーリンや星、ぬえやマミゾウ……といったいくつもの繋がりがあると同じかもしれない。

今回も側近とはいえ、配下は配下。マスターと雪にも其があつたに違いない。

でも、其に関わらず失態をさらした配下は容赦なく殺す……

其だけではなく、赤の他人である筈の私でさえも霊夢達の妨害の為に

無理矢理利用しようとした……

幻想の大妖怪の姉って、本当に恐ろしい奴なのね。

「赦さないわあ……！赤い……!!」

私は、マステアが右手のに残った僅かな青い塵を、握りしめるのが見えた。

「赤い……!!!」

見るに耐えられず目を上げ、目の前にあつた紅い扉を見た。さつきくぐり抜けた扉と全く同じだった。

紅い月が彫刻されていた。

上空の蒼い月を思い出す。やはり悲しかった。

「マステア」

するとレミリアが座り込んだマステアに近付き、其の肩に右手を置いた。

マステアが顔を上げ、レミリアを見た。眼球がある左目から涙が溢れている。

蒼い月に反射して光っている。

「何としても……赤を、倒すわよ」

そう素つ気なく言うと、肩から右手を離し、代わりに左手を彼女に伸ばした。私でも判る。私達から偽者に対しての同情を隠している。

レミリアにとつて、雪が、美鈴と重なったのかもしれない。自分の配下が殺される様な不快感を覚えたのかもしれない。

「……………ええ」

マステアが其の手に向かつて同じ様な華奢な手を伸ばす。

が、先にレミリアが其の手首を握り、わざと乱暴に引っ張り起こした。

霊夢が真つ先に扉に近付き、其の片方を手で押した。

扉が軋むような音を立てて開いた。

「鍵は……かかかっていない様ね」

そう言うと其の隙間から中を覗き込んだ。私達も其に倣う。

扉の先には暗い廊下が続いている。でも、両端の紅いライトが二列、其の足下を照らしていた。

「いよいよね……行くわよ！」

今度は両方の扉を全部押し開けた霊夢に続き、私達は其の中に入っていった。

赤がいったいどんな人物か……私も興味が出てきた。

是非とも其の凶悪な性分を晒して、私を利用してくれた分……魔理沙を心配させた分

……

弄ばれているという彼女の配下の分……

そして何より、幻想郷に異変をもたらした分のツケを払わせてやらないと……!!

紅月に秘められしはく前編く

REMIILIA

く蒼魔塞 紅月の研究所

私達は、薄く赤い光で照らされた廊下を歩いていた。

「……チツ」

思わず舌打ちが出た。

私達から『赤色』を盗っておいて、こんな処で贅沢に使って……

電球一つでも叩き割りたかったけど、何か作動すると面倒だったのでしなかった。

「何も無いわね……罨とか無いのかしら？」

「此処もさつきと同じだろう……ましてや、絶対侵入出来なさそうな場所なら尚更だ」

私の隣からの霊夢の質疑に私の前のマスターが応答する。

「完璧主義の欠点だ。筋道通りの展開しか頭に無い。予想外の展開に対応出来ない」「じゃあ何故、赤は私達を此処に誘った？」

今度は私が訊いた。

「秘密がある拠点に誘えば、必ず私達が其を探るのは見えてた筈だ」

「判らないわ……でも、此の秘密は私が言わなければ知らなかった筈よ」

「確執はあったもののまさか側近が裏切るなんて……という予想は出来なかったって訳ね」

暫く歩いていると、広い場所に出た。

「……何、此処……？」

霊夢が隣で声を潜める。

さつきまでいた塔の中と比べて格段に暗く、そして天井にぶら下げている灯から薄くも真つ赤な光が降り注ぎ、金属の床を真つ赤に染めていた。

窓も無い、無機質な紅い部屋だ。

只、上に何も乗っていない机がちらほらと並んでいて、机の傍には様々な大きさの赤い金属の箱があり、中からは各々の箱に合うサイズの金属が見えている。

「！あれは何…!？」

アリスが机の一つを指差した。私を除く皆は其の机に歩いて行く。

「此は……」

「……何かの書類かしら？」

確かにアリスが指差す机の上に紙の束が乗っているのが見える。

私も部屋を見渡しながらゆっくりと皆と処に歩こうとした。

すると、

「？」

左の靴に何か堅い物がぶつかつた。
何が当たつたのかと見下ろす。

「?……………」

靴の先に金属片が転がっていたが、其の両端は丸く伸びている。
まるで形其のままに押し潰された骨みたいだ。

「霊夢……」

私は呼ぶと霊夢が振り向いた。

「此、拾って頂戴」

そう言つて足下を指差した。霊夢は其の指の先を見て、屈んで拾つた。

勿論位の高いものとしてのプライドもあったし、もし金属とは言っても銀だったら、吸血鬼の私にとってはたまったものでは無かったからだ。

「此は……金属の骨……かしら……？」

霊夢も私が考えるのと同じ事を言っていた。

でも近くでよく見ると骨の関節に当たる両端には六角形の穴が開いている。

「……マステア、此は何か判るかしら？」

マステア達が呼ぶ声に反応し、戻ってきた。

アリスは手にさっきの書類を持ち、其の一枚一枚を見ている。

「此はスパナ……工具の一種か……」

マステアはすぐに何かを言った。赤の側近にいただけはあって何でも知っている。

「工具？て事は……何かを作っているところ……かしら……」
「！ちよつと見て、此……」

其の声に応じ、今度はアリスの処に皆が集まった。

アリスが見せた其の一枚にはいろんな物のイラストが奇麗に描かれ、各所の寸法まで細かく記載されていた。其の傍には、細かい字で長い文章が書き綴られている。

「……何かの設計図みたいね……」

マステアが言うと、

「！そう言う事……！」

突然霊夢が声を上げた。

「どうしたの、霊夢？」

「何か判ったの……勘でも良いから言って？」

アリスと私が訊くと、

「ええ……勘に頼る事になるけど……」

そう言つて霊夢は一度部屋を見渡し、

「此処で……『英知の結晶』が作られているのね」

「！『英知の結晶』……」

私は其の言葉を聞き、懐からある物を取り出してマステアに見せた。

「！『魔導メモ帳』……ヘフィの……」

「厄介な魔法が使えない様に、奪つてたのよ」

そう言い、私はメモ帳の様な機械をマステアに渡した。

「其も此処で作られてたと言う事になるのね」

「えっと、ゴメン霊夢、何？其の……英知？」

「ああ、お前はまだ知らなかったわね」

そう言うのとマステアが説明を始めた。

「自分の作る、機械の数々をアイツが勝手にそう呼んでるだけだ。

独創的なオリジナルの形もあるが、何かに似せて作つてある事もある。だが、一個一個の

機能がとてつもなく強力で、オリジナルをも比には出来ない」

「私達、散々苦しめられたものね」

霊夢が相槌を打つ。

「ええ……しかし、本当に多種に及んでいる。小物から大型の機械まで様々なものを作り上げてきた。建造物も例外じゃない」

マステアは其処で一息つき、

「現に……此の『蒼魔塞』も其の一つだからな」

「!え、此の建物も……!?!」

アリスは驚きのあまり、設計図の束をクシャツと両手で握った。

「そう。そして、貴方の胸部に取り付けられていたのも……そして、私の身体の一部もね」

そう言うと左腕を前に出し、先程の様に肘までを二つに分裂させ、回転させた。其を見下ろす表情は、さつき見せた時と同じ屈辱に満ちたものだった。

「でも、一番凄いののは、部下から発注されたものを僅か数分で作ってしまう事よ」
「!?!数分……!?!」

一通りの動作を終え、腕を元に戻しながら言った言葉に、数体の人形を操って設計図

の皺を取っていたアリスが吃驚した。

「私の上海人形だつて……そんな短い時間で作れないわよ!? 機械なんて尚更……!」
「私は」

そう言うともステアは持っていた『魔導メモ帳』を振りながら言う。

「此が目の前でヘファイが赤に注文するのを間近で見た」

「ま……側近なものね」

霊夢が言う。

「で、どうなった訳?」

「直ぐにスキマに消え去り、三分で一冊の魔導書もどきを持って戻って来た」

「!三分……!?!」

アリスは整頓していた皺を取り終えた設計図の束を、バラバラと床に撒いた。

……いくらなんでも驚きすぎよ、少しは順応してよ。

驚くタイミングは七色だけど、驚き方が単色過ぎるのよ、アンタは……

「もしかすると……」

すると、マステアの言葉を聞いてきた霊夢が呟いた。

「既に用意していたのかもしれないわね……」

「！其はどういう事だ……!?!」

今度はマステアが訊いた。

「詳細は判らない。でも……」

そう言うのと首を曲げ、ある一点を見ながら断言した。

「あの先に、答えがあると思う」

私達は霊夢の視線の先に、次の通路への入り口があるのを見付けた。
ドアも無く四角い部屋で唯一切り抜かれたかの様な四角い穴がぼつかり
と口を開けていた。

「次の部屋へのハッチか……開いてたんだな」

「いえ、開いてたんじゃない……開けたのよ……赤がね」
「!？」

霊夢の発言に私達は周りを見渡し始めた。

「何処にいる!？」

「此処にはいないし、私も見てないわ……でも、判る……今も何処かで
私達を見ている」

そう言うと、裾の中から御被い棒を取り出す。

「どうやらアイツも腹をくくった様ね……用心するのよ。妨害が入るかも
しれない……」

「其は此の事かしら？」

突然言葉が聞こえたかと思うと、上から霊夢の腕に腕が巻き付き
身体が上に持ち上げられた。

「！霊夢！！」

素早く反応した私は、咄嗟にスペルを唱えようとしたが……

霊夢を襲ったのは、赤ではなかった。

「！紫！！」

「こんばんは…………素敵な夜を御過ごしかしら？」

御得意のスキマから腰まで出し、背中を向けて逆さにぶら下がった大妖怪が巫女の腕に自分の腕を回し、近付けた頬に自分の頬を寄せていた。

相変わらず、艶っぽくて胡散臭い。まあ、赤にも通ずるものはあつたけど……

？赤？……………！赤！！

「ちよつと、紫……………」

私が姉について罵倒しようとした瞬間、

「アンタ！其の言葉、今どういう状況なのか判ってるの!？」

「!!あくあく、判ったわよ……………下ろすから騒がない騒がない」

正体が判るや否や、突然喚き始めた霊夢に慌てた紫は霊夢を拘束から解放した。

「アンタの姉が大変な事してるのよ!!何とかしなさいよ!!」

金属の床に着陸した後もまだ怒っている霊夢を余所に、紫が
マステアの存在に気が付いた。

「貴方…アイツの側近ね」

「お前……赤の妹か」

其の時、マステアを見る紫の視線に何かを感じた。

何……まるで……

(マステアを……憐れんでいる?)

そう感じた。

赤の配下をしているのだから当然だと思っただが、何故か其の解釈に素直に納得が
出来なかった。

どうしてかしら……? 只、憐れんでいるだけなのに……?

其とも、別の何かを……？

だが其の哀愁も、何時もの胡散臭い微笑と共に無くなった。

「裏切ってくれて助かるわ」

「……其はどうも」

にこやかに挨拶する紫にマステアは応える。……アンタも乗らなくて良いのよ……

「……で、突然だけど」

其の言葉通り、突然紫は真剣な表情になってスキマからではなく懐から扇子を取り出した。

「霊夢の言ったとおり、此の先に答がある」

閉じた扇子で開けられたハッチの先を差し示した。

「!まさか…もう此処を見たの!?!」

「ええそうよ、アリス。下見は済んでる……!あ、因みに彼処のハッチの解錠したのは藍ね」

そう言つて後ろを向くと扇子を広げ、口元を隠した。

「……………?」

紫は何も言わずに黙っている。

「……………ちよつと……………紫?」

怒りは収まり、不安になったのか霊夢が紫の背中に声をかける。
紫はまだ黙っている。

「何を見たのか、言いなさいよ……………」

すると、

「真実は何よりも残酷よ……幻想と同じく」

紫は背中を向けたまま言った。

「……………え？」

霊夢が頓狂な返事をする、紫はゆっくりと此方に向き直り、

「其は……自分の目で確かめなさい」

静かにそう言った。其の瞬間、私は毛をザワザワと逆撫でされる感触を覚えた。何なの……？私は訝しがり、そして判った。

殺意だ。大妖怪の殺意だ。

此方の全員を見渡す其の目付は此方を見ているものの、何か遠くの方を睨んでいる様にも見えた。言葉無くして怒りで白熱している。

霊夢とアリスが其の視線に射抜かれ、竦み上がるのが目の端で見えた。

私は思った。大妖怪が激昂し、そして自分の口でも語りたがらない程だ……此の先で、ろくでもない物を見たに違いない。

「そして赤も、とつくに侵入に気付いている」

だが、其もすぐに消え去り何時もの目付で扇子の向こうから声をかけた。

「！じゃあ、部屋に急がないとマズいか……」

マステアはそう言いながら、ハッチの前に立った。

紫以外は其に倣い、急いで同じ場所から奥を覗き見た。

再び廊下になっていたが、さつきよりも、そして此の部屋よりも更に

ギラギラと強く赤の濃い光に満ちていた。まるで私達を阻む網の様にも見える。

血や霧…紅いものに見慣れた私でさえも其の充満した光に思わず目を細めてしまった。

「いよいよ真実、ね……」

アリスが、紫の言っていた言葉を引用して言った。

其の後で唾を飲み込む音も聞こえた。

後ろから足音が聞こえた。やつと紫も来た様だ……

「太陽に隠れた月には一体どんな秘密をしまっているのかしらね……赤？」

霊夢はそう言うと、私達は紅い光達を掻い潜る様に廊下を走って行った。

紅月に秘められしはく後編く

REIMU

く蒼魔塞 紅月の研究所 深奥部

私は廊下を歩いていった。

最初は赤い光が強く、まともに目も開けなかったが今は白い光になり、幾分はマシになった。

「……………」

後ろを歩く紫は扇を口元を隠して黙ってしまったている。

彼処までキレた紫を見るのは私も初めてだった。だから、其の目を見た時怖くなってしまった。紫の本気の殺意を見た気がした。

此から先、私達が真実を知るまで一切口をきいてくれないに違いない。あくまで私達の為

なんだろうけど……

紫が其処まで怒る理由はいつたい、何なのかしら……？

赤はどんな、紫を怒らす様な事をしでかしているのかしら……？

すると、いつの間にか光の色が変わっている事に気が付く。

「……赤の次は、蒼かしら……？」

白から水色、そして完全に蒼くなった光は先にある部屋から漏れていた。

「……廊下も終わりね、入りましょ」

其の時、アリスが身震いと共に止まった。

「！何……？？」

私達が立ち止まった。視線がアリスに集まる。

『赤色』が抜かれた顔が蒼い光が相まって更に蒼く見える。

其の傍では上海人形が寄り添い、一言呟いた。

「……ヤバインジャネーノ？」

……演技なのが見え見えだった。

「そんなもん、私達も感じているんだから！んな時間稼ぎは良いから！

此処まで来たら最後まで行くわよ!!」

私は人形の首を引っ掴み、アリスの首に巻かれた蒼いリボンを引き摺って行った。
今更ビビってどうするってのよ……!?

……部屋の入り口で、私達は立ち尽くしていた。

さつきとは真逆で、勢いを完全に失った。

アリスが感付いていたものを、どうして私は見逃したんだろう？

「何よ……此処……？」

REIMU

く蒼魔塞 紅月の研究所 最奥部

其処は博麗神社の敷地程の大きさの部屋で、網目状の通路の間ごとに

沢山の筒状の機械が等間隔に並び、蒼い液体が溜められているのが見えた。

私達は慎重に足を踏み入れ、一番近い場所に置かれた其の一つにゆっくりと近付いた。

機械に蒼い液体の中に、よく見ると、毛の無い鼠みたいな生物が小さく丸まった状態で浮かんでいる。

「……コイツ、何……?」

私とレミリア、そしてアリスが顔を近づけて其をよく見ようとした。

すると、途中で三人とも顔面に何かにぶつかった。

何にぶつかったのが判らず、驚いたのとぶつけた痛さとで一斉に其から離れた。

「……近付けられないわ……!」

鼻の頭を押さえながら持っていた御祓い棒を構えた。

「結界でも張ってるの……!?!」

「違う」

今度はマステアが其の容器に近付き、機械化していない右手で其の機械の表面を触った。

「此はガラスだ。中のものを見る事が出来る。結界ではないから触っても問題無い」

「と…透視出来る物質な訳…!?!」

アリスが私と同じく鼻を押さえて言った。ぶつけた痛さからか、目には涙まで浮かんでいる。隣ではレミリアも鼻を押さえ、顔をしかめて悪態をついていた。

「そうだが、結界程堅くは無い。破られると中のものが漏れ出てしまう」

脆いと聞いたなら突き破ろうかと思ったが、漏れた液体で何か罫が作動するのはマズいと思い、踏み止まった。

其の液体を覗き見るマステアの片方だけの瞳が、信じられないとばかりと小さくなっている。

「だが…こんなものがどうして…?」

「此等は何なの…? 『英知の結晶』なんですよ…?」

私はマステアに訊いた時、

「ねえ……」

レミリアが私達を呼んだ。

彼女はアリスと共にマスターが触っている二つ先の機械の中を覗いていた。

「どうしたの?」

二人の処に歩いて行った。

私達の到着を確認したアリスが、液体の中を指差して言った。

「其の……中の生き物……だんだん……大きくなってない?」

確かにさつき見ていたものと、中間のもの、そして今見ているものを見比べると、其の

身体は大きくなっていった。

其の時、其の違いを見たマスターが声を上げた。

「！まさか……成長過程か……!?」

「?……成長過程?何の……?」

其の顔を此方に向けていた。小さく泡を立てた蒼い液体の光に反射した顔は引き攣っていた。

「……間違いない……」

普通のレミリアでは見られない、怯えた表情だ。

側近も、まさか此処までの事をしているとは予想していなかった様だ。

「此は……胚だ」

「!……胚?」

其の単語を繰り返したが、私には困惑して聞き返した言葉の様にも聞こえた。

「簡単に言うと、母親の胎内から生まれる前の子供……胎児だ」

「！胎児ですつて……!?!」

アリスの言葉に無言で頷いたマステアは今度は其の表面を右手で触れる。

「此は培養槽……中に生命体を入れて育てる、人工的な母胎と言つても良い……」

「！母体と胎児……まさか……!!」

「……此等が成長すると、人間になるだろう……例外もあるが」

マステアが培養槽から目をそらし、代わりに其の中を私が覗き見る。

「でも、此程の大量の胚をどうやって……?」

「思い付く方法は二つある」

腕組みをしたマステアの其の額には、汗が流れ始めていた。

「体外で人工的に受精させ、此処まで細胞分裂を起こさせて成長させたか……或いは

……」

其処でマステアは黙ってしまった。

「……………或いは……………何なの？」

私は訊いたが、一点を見たまま何も言わない。口をきゅつと結んでいる。

其の時ガラスに薄く映った紫が培養槽の中の生命体達を一瞥し、私達の後ろを通りながら先に言ったレミアアやアリスの後をついて行くのが見えた。

マステアはやつと口を開いたが、

「……………言えない。恐ろしい事は流石に言えない……………あまりに、酷な事だ」

声は小さく、震えていた。

「……………私も良いわ。何を言おうとしてるのか判ったし」

いつの間にか彼女の隣に戻って来ていた、レミアアも言った。

其の顔はマステアとは違い、ツンとしていて冷静さも漂っていた。私は御被い棒を袖の中にしまいながら、改めて周りを見渡した。

「見渡す限りに続いている……此処までの数を……」

何処も、青い液体が満たされた人工的な母胎が並んでいる。

どれにも生き物のもととなる生き物が眠っていると考えると、私は全身の毛が逆立つのを感じた。

顔を自然としかめてしまう。生々しい……其の一言に尽きた。

「!!キヤア……!!!」

突然アリスの悲鳴が部屋の遠くで聞こえた。

私達は声が出した方に向いた。

部屋が一番奥、壁に並ぶ培養槽からアリスが後ずさりしていた。其の後ろでは紫も、身じろぎはせず其等を見ていた。

「どうした!？」

私達は其処へと走って行った。

「!」、此……此……!!」

アリスが振り返りもせず、震える指で横に配列された培養槽を指差した。
私達も其の先を辿り、培養槽を見上げた。

「!!此は……!!」

レミリアが声を漏らした。

其の中の生命体達はネズミの様な尻尾らしきものが無くなっていた。

そして小さくもなく完全に私達とほぼ同じ大きさの、人間の少女の形まで成長して
いた。

髪の毛も完全に生え揃っている。

蒼い液体に浮かぶ、とつくに母胎からは出ている筈の其の姿は……

「ゴォラ……ウォルモ……!?!」

かつて戦った、赤の配下達だった。

白銀の髪ของルーミア、黒髪ของチルノ……

其の中間には、赤髪の大妖精が浮かんでいた。フェアリーロードに違いない。

「…雪……!!」

其の更に隣は、先程死んだ筈の美鈴似の門番の姿もあつた。

藍色の髪の毛が蒼い液体の中で波打っている。まるで液体の青色を吸収している様にも見えた。

「シファア……！……！へファイ……！……！知流……！！」

其の横には今までで出会い、そして殺した偽の小悪魔やパチュリー、今生きている筈の

金髪の偽咲夜まで液体の中で姿を並べていた。

そしてやはり後ろには幾多の通路を挟み、気が遠くなる様な数の培養槽が並び、

縦一列ごとに同じ人物が中に浮かんでいる。

そして全員が胸の前で両腕を交差させられ、右太腿の付け根に、

『RCSAMPLE』

と言う模様が横に赤く刻まれていた。『赤色』に違いない。

「どうしてこんな……」

其処まで言いかけた私は気が付いた。

何奴も紅霧異変で戦った、其の相手の偽物ばかりだ。

只、其の中でも、レミリアとフランがない……

つまり……

!!!

「マステア……!!」

慌ててマステアを見たが、彼女は機械化していない手で顔を覆っていた。

其の隙間から見える片目の瞳孔は激しく揺れている。

「~~~~~!!」

自分の正体を知った衝撃が、重く伸し掛かっているのが判った。

「紫……!!」

私は後ろにいた紫の方を見た。紫は黙って目を瞑り、扇子を閉じ、ゆっくりと首を振った。

「そんな……私は……!」

マステアの眩きが私の背中に降りかかる。

「私は……まさか……!!」

両目を閉じ、歯ぎしりが漏れる。まさか、此が……

「私以外は、正しくは無い……」

突然声が聞こえた。

「!!」

同時に金属の床を鳴らす、足音も聞こえた。

其等を耳にした私達は、すぐさま臨戦態勢に入った。

神具を持ち、光の槍を持ち、人形達を武装する。

「……人間も……何もかも……失敗ばかりを繰り返す……」

其等は紫の後ろから聞こえた。

「なら……作り変えて正しくすれば良い……」

カチツ………

今の紫がする筈のない発言を、紫の声で発せられる。

其の声と足音に混じり、金属で何かを弾く音が聞こえた。

紫は扇子をしまいながら再び険しくした其の目付を、ゆっくりと首を曲げ後ろに向けた。

「そうよね……マステア・アズール？ いや……」

「『RC—08—Bへレッドクローン・エイト・バッド』……私の粗悪な側近吸血鬼？」

全身を『赤色』に染めた、狂気の黒幕がいた。

紅月を囲う紫雲～RED、BAD、MAD～

YUKARI

～蒼魔塞 紅月の研究所 最奥部

靈夢達はよくやってくれた。

見事に赤のやっていた、生き物としてやってはいけな所業を私なしで突き止めた。
配下の大量生産…様々な罪が重ねてられ、成し遂げられる禁忌だった。

そして……

「赤……!!」

其の当事者が目の前にいる。

正体がバレるのを想定してか、私の二つの服装に当てはまらない、新たな服装だった。
爪先も見えない程の真つ黒なロングのワンピースの上から白衣ならぬ、血に染まった
様な赤衣を着ている。如何にも悪の研究者だという風貌だ。

紅い角縁眼鏡は変わらないが帽子も外し、髪結び方も誰かに酷似していた。そう、誰かに……私は後ろにいた

皆の内の一人に目を向けた。

右手には銃が握られている。銃身が短く、グリップが袖の中へ伸びている事から主に暗殺に使われる『暗器』の一種だと判った。

「！知流！！」

其の左手は裏切り者に見事に騙された偽咲夜の遺体の髪を握っていて身体を金属の床に引き摺っていた。

暗器に一発撃ち込まれたらしく、額の穴から蒼い血が肌を伝っていた。

すると加害者が紅い飛沫で濡れている其の顔を、気味悪く歪めて笑った。

「!?」

右手の指がゆっくりと動き、撃鉄を起こす。

あの表情……マズい！

「皆、来るわよ!!」

私が銃を知らない後ろの皆に警告を発した瞬間、

バアン……………!!!

銃声が響いた。

「!!!……………」

思わず私も息を詰まらせた。注意喚起をされていてスキマを開く暇が無く、隙を突かれて撃たれたかと思った。

銃声が木霊の様に金属の部屋に反響していき、やがて聞こえなくなった。

だが、自分の身体に痛みが無い事に気が付いた。後ろからも呻き声が聞こえない。じゃあ何処に撃った？？私は後ろを見ていた為判らなかつた。何に向かつて撃つた……？

だが、すぐに判つた。

「……………」

赤の足下に、首の無い身体が落ちた。

「!!」

そして赤も髪を握っていた首も其の近くに投げ捨てた。

「……失敗したなら、作りなおせば良い」

駄目押しに首を穿たれた偽メイド長の残骸は蒼い塵となって消えていった。

「此処まで侵入を赦していたとは……やはり瀟洒な性格は欠かせない様ね。次からのには組み込む事にしよう……」

其の言葉に私は反応した。

「な……何によ!？」

霊夢の震え声が後ろから赤に投げられた。

赤は血で濡れた眼鏡を赤衣で吹き始めた。上目遣いの私似の視線は此方に向けたまままだ。

「……此処まで来たのなら判る筈よ? 何? お前の目は節穴か? ソイツみたいに?」

ソイツ……私達といる、レミリアの偽物に違いない。

「で、其の結果どうするつもりだったの？」

其の言葉を聞いて私は後ろを向いた。

霊夢達の正面から、蒼い結界が消えていくのが見えた。

……霊夢が仕掛けたのかしら？銃弾を反射させて培養槽のガラスに当てようと言う算段だったの？

……すっかり対策を取っていたというのに……私は、自分の心配をした方が良かったかもしれないわね……

「……残念、其は計算上不可能に等しいわね」

赤は血を拭い終えた眼鏡かけ直しながら、言ってもない算段を否定する。

そして足元にある元配下の蒼い塵芥をしっかりと踏みながら培養槽に歩み寄り、ガラスに優しく手を添え、うつとりと其の中を見た。

其の視線の先でまだ体内が透けている胚が、何かを探す様に手足を動かしながら浮か

んでいる。

「此は防護性に優れていてね……例えば妖怪界隈の攻撃でも、私の『英知の結晶』でも、そう簡単には傷は付かないのよ」

蒼い液体の光に反射する赤の血濡れた顔には、一種の狂気を感じた。

「最近、人間の里で人間の女性が行方不明になっているのよ……其も、妊娠した女子ばかりが」

切り出した私の言葉に、赤の肩が微かに動くのが見えた。

「……殺して手に入れたモノをそんなにも守りたいの？」

そう言う事だった。マステアが言い渋っていた、もう一つの理由だ。

後ろから息を呑むのが聞こえた。誰かは判らなかつたが、今までの言動から察するにアリスの可能性が高い。

「不完全な人間には、不完全な人間を排出するだけなのよ……だから正す。何が悪い？」

赤は胚から目を離し、まるで不純物を見るかの様に顔をしかめながら私達を見た。

「嘘を付くな!!単に忠実な偽者の配下を創る為だろう!？」

レミリアなのか、マステアなのかは判らなかつたが、自分の偽者を創られたレミリアの方が若干可能性は有った。

…さて、そろそろ出していっても良い時だろう……

「……たくさん偽物を作るのはスペア兼、完璧な配下にする為の踏み台にする為……」

私は言った。赤が言い返す。

「DNAを構成するゲノムが織り成す人格には必ず欠けている部分が出る。其処を私好みに、そして良い方向に改造していけば良いだけ……」

「詭弁ね……欠陥を埋めようとしても必ず別の部分に新たな欠損が生まれる……また其を埋めても、また新たな欠損……いたちごっこなのよ」

今度は論破されない。

「そして……『次の』彼女は、既に別の場所で作業を開始している」

下見をしていた際、私は二か所に知流の姿を確認していた。

さつき殺した咲夜の偽物は、マスターに出し抜かれるかなり前から用済みと判断されてたんだろう。

もつたいない。アワアワした咲夜は、需要があるかもしれないのに……

そして……

（此を言ってみようかしら……？）

私は一つ息をしてから言った。

「……そうじゃないかしら？妖怪もどきの『人間』？」

「！え……！？」

後ろから霊夢達の驚く声が聞こえた。

「どういう事……！？」

一方、赤は眼鏡が傾き、激しく狼狽している。

「ゆ、紫……！！貴女……ま、まさか……！！」

「そもそも、お前みたいならくでなしの妖怪を姉に持った憶えは無い」

私は即座に突き放す様に言葉をぶつける。

「でも驚いたわ…妖怪の力を機械で擬似的に再現するとは…私の能力までも見事にね」

赤の表情が凍っている。

「…『英知の結晶』で空間に傷を付け、スキマを開けているんでしょう？」

私は更に続ける。

「其に、外の人間の世界で『クローン』の制作は禁止されている。だから此処で試した……違うかしら？」

「胚は十分に足りていた……でも、対象のDNAだけは足りなかった。だから自分の計画を実行したのは……一部の妖怪以外が寝静まる時、夜だった」

「!もしかして……私達が酒を飲んで寝ていた時に……!!」

「生命体を無防備にする……腑抜けにさせる……頭の思考回路を破壊する……」

霊夢の言葉を遮る様に、赤は吐き捨てる様に言葉を並べた。確実に落ち着きがなくなっていた。

「私は酒は大嫌いなものよ」

「アンタの思考回路は、とつくに壊れてるわよ!」

アリスが私がおうとした事を叫んだ。

「じゃあ、妖怪の一種の魔女が私みたいな人間如きに捕まるなんて!」

人間から成り上がりの魔女と、一緒に酒を飲んでいるからそうなるのよ」

赤が言い返した言葉にアリスは何も言えなくなったのか、黙ってしまった。

完全に自己中心的な発言だった。自分を守る為、正当化に他の者を攻撃している。

八つ当たりしている。完全に人間だが、不完全な人間だった。

赤は自分が取り乱した事に気が付き、すぐに苦虫をかみつぶしながら眼鏡を指で押し上げた。

「……まあ、良いわ……此処まで来たなら、新作も試さない」と

そう言い終わらない内に、何処からかくぐもった水の流れる音が聞こえた。
そして間髪入れずに勢い良くガラスが割れる音が響いた。

「……………元氣いっぱいね」

防護性に優れているガラスを破る者を目覚めさせるとは……完全に殺しに来ているわね……何処から来るのかしら……？

すると赤の右の方、培養槽の合間を縫いながら、何かが此方に飛んできた。

「！今度こそ、来るわよ!!」

そして通路に飛びだし、赤の目の前に来て止まった。

見た目は裸の子供……人間でいえばちょうど5歳にあたる年齢の体格をした蒼白い肌の少女だった。

浮遊している身体に付いていた培養槽内の蒼い液体が滴り、足元に溜まっている。

髪の内側には白いリボンのついた三つ編みが結っており、髪の色は半分藍、半分が金色で分かれている。

御多分にもれず右太ももには、

『RC—04×07』

と赤色で刻まれている。

「不甲斐無い配下の遺伝子を強制的に組み合わせれば、御利口さんになってくれるかしら？」

不甲斐無い配下……四番目と七番目、紅魔館の門番とメイド長の改造したゲノムを組み合わせたDNAを胚に組み込んで育て上げた、といった感じかしら。

「雪と知流の分は、此の娘で勘弁してあげるわ……だから……」

そう言っている其の右手には、赤い線の塊が縦に螺旋と作り始めた。

あれも『英知の結晶』で作りに出している偽りの能力ね……人間の悪あがきとも言える。其を子供の背中に押し付けた。ソレは泣く事もなく、『赤色』が身体に入っていくのを待つ。

やがて身体の各所に赤い血管模様が浮かんできた。

目は瞳まで真っ赤になり、血の様な涙が流れ始めた。

「だから……玩具としてたっぷりと遊び殺されなさい」

其の声と共にけたたましい音が響き始め、培養槽に次々と金属のシャッターが下り、やがて中の胚が全て見えなくなつた。

流石の赤もガラスが割れる事を恐れたのだろう。其は此の人造人間の攻撃は驚異的だという事を示した。

赤は自分のスキマを開いた。赤い放電と共に私のとよく似た偽のスキマが開く。空間を無理矢理開けているだけあって、私よりも開くタイミングが少し遅い。

「！待て……！！」

二人の吸血鬼の内のどちらかが後ろから呼び止めたが、既に人工のスキマに入り、赤の姿は消えていった。

同時に幼児型の実験体の周りに、緋色のナイフのような物体が浮遊を始めた。

「なら、私がやる……！！」

レミリアのクローン、赤の側近の生物兵器……マスターが私の前に進み出た。

同時にアタッチメントへと改造されている左腕の肘から先が変形を始めた。前腕部が二つに分裂し、其が更に二つに分裂した。

「殺つてやる！！」

其の四つに分かれたそれぞれの前腕部分から畳まれていたクローを拵げた。軸に当たる中央には小型の回転式のガトリングも付いていた。

私は肩越しに霊夢達を見た。

「……赤を追うわ。霊夢達は彼女の援護をしてて頂戴」

「判ったわ！此方は任せて！」

私は頷き、スムーズにスキマを開けた。開けた空間は赤のスキマだった。私の紫のかかったのに対し、此方は赤みがかかり、数多もの真つ赤な瞳が浮かんでいる。

「……また、後で合流しましょう」

そう言い残すと、其の中に入り込んだ。

YUKARI

「緋なる亜空間

「皮肉ね……赤」

私は、赤のスキマの中を飛びながら呟いた。自分の失敗作に計画を妨害されるなんて……

『赤色』に適合しなくても、可愛がってもっと接してあげればこんな事にはならなかったのに……

すると、前方に逃げる赤の後ろ姿を発見した。慌てているように見える。

足か赤い炎が出ているわね……『英知の結晶』を履いてるのね……

何にせよ、此以上あんな非道な事はさせないわ……其に、私は其方の秘密を握っている……

幻想郷の創始者の一人として、必ずお前の計画を潰す。

私は全速力での飛翔で赤を追いかけた。

Red Homunculi ©

RC—08—B MASTEMA

VS RC—04×07 ヴエルメリオ

蒼魔塞 紅月の研究所 最奥部

私は、目の前の生き物の幼体にはおぞましい敵と対峙していた。

半分雪、半分知流を組み合わせた様な子供だ。青白い身体には先程赤に投与された『赤色』が

血管の様に鮮明に浮き出ている。

本来、此の幻想郷の何処かで普通の赤子として生まれる筈だった命。

だが其は叶わず、狂気の下で無残に母体から引き摺り出され、兵器にされてしまった命。

私の基も、その一人……私はとつくに自分が他人のクローンであるというショックから

立ち直っていた。

身体の各所が破裂したあの時、何故赤が私を見殺しにせずに生かしたのかが今なら説明が出来る。

決して憐れんだのではない。吸血鬼のDNAがあまりに貴重かつ、人間の胚と適合し辛いから

そう簡単には何人も作れなかったからだ。其は私だけではなく、妹のマドウにも当てはまる。

だから、知流の隣にあった二つの培養槽……私とマドウが入るものにも何もなかった。其は、

現在の私とマドウだけがそれぞれの唯一の成功例である事も示していた。

そして欠損していなければ、目の前の敵と同じく、右脚の太ももに番号が振られていた筈……

私は目だけで機械の右足を見下ろした。

いや、今は其どころではない……狂者が生み出した、此の世にいてはならないモノを殲滅する

事が先だ。私は変形させた左腕を構えた。

だが其の時、相手の身体から赤い霧が噴き出してきた。

「！此は……」

即座に口と鼻を右腕で覆う。

私は前に、ウォルモが赤から力を貰い、紅い霧を出してフェアリー・ロードと
はしゃいでいたのを思い出した。

だが此は……そんなものとはまるで違う。比べ物にならない危険を秘めている。

「霊夢！此の霧、私が出してたのより数十倍濃いわよ!!」

レミリアが後ろで叫んだ。後ろを見ると霊夢のすぐ目の前にまで紅い霧が立ち込
めてきた。

「！クツ……夢符『二重結界』!!」

霊夢が結界を張り、たちまち姿が見えなくなった。霧が結界に沿ってアリスのところ

まで拡がる。

そうか、かつて此処で起きたといわれる紅霧異変でレミリアが出した霧……

人が中に入ると長くは持たないあの霧か。右腕を顔から離れた。

結界の中に侵入してはいないだろうか……？

たちまち部屋中が紅色に包まれていった。

「アリス！守っててくれ!!」

アリスは其の指示に頷き、霊夢の前に立ち、周りに数体の武装させた人形を配置した。私は過去に異変の他にも住民についても赤から教わっていた。其の中にはレミリアの配下、十六夜咲夜……知流のオリジナルについても含まれている。

彼女の代表する能力、『時を操る程度の能力』。時を止めて移動し、違う場所で再び時を動かす。

其の一連の動作が私達からすると、まるで瞬間移動したかの様に見える。

彼女のDNAを基にした、知流の遺伝子が血に混じっているなら其を使用する可能性は十分に

あった。

そして霊夢は現在身動きが取れない。不意に攻撃を集中されると結界を維持出来ない事を計算した

上での判断だった。

「マステア！行くわよ!!」

「言われなくても其のつもりよ!!」

まだ子供だからって油断はしてはいけない…赤は間違いなくゲノムを操作して無理矢理力を

引き出している。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』!!」

「神槌『ハンマ・ザ・ミヨルニル』!!」

アタツチメントを展開していない右手に蒼い光の槌を出現させ、握った。レミリアも私と同様に

右手に蒼い光の槍を握る。

「！ハンマー……？」

レミリアが私の方を見た。私は其に応える。

「とある神話で実際に使用された神の武器……お前と同じ由来だ」
「成程……其の槌でアリスの『英知の結晶』をへこませたのね……？」

其の会話の最中、敵が浮遊させていた紅いナイフ型の『赤色』を殺到させてきた。

「レミリア!!」

私はレミリアの前に素早く回り込み、機械の左翼を大きく展開して自分の前にかざした。

半透明の翼膜の様な紅い電磁バリアが、私達を『赤色』から防いだ。

「本当に便利ね……其の身体……!!」

「呪われた身体だ……」

翼を戻すと同時に光の槌の柄を伸ばし、其を右から左へ振った。リーチが急に伸びた槌の

口の部分が敵の脇腹を捉えた。

だが叩かれても大して飛ばず、浮遊する位置が大きくずれただけだった。

今度はレミリアが後ろから敵に青い槍を投げつけた。槍は真っ直ぐ飛んでいったが、到達する直前で突き刺さらずに消滅した。

今度は私も槌を投げつけた。

蒼い光の槌は回転しながら、敵の方に飛んで行った。敵も空中を横に滑るように移動し、

攻撃を回避した。

「甘いわ……!」

光の槌は天井ぎりぎりにまで接近した後、突然角度を変え、ブーメランの様に弧を描きながら戻って来た。其のまま敵の後頭部に直撃する。

しかし怯みはしたもののまるで効いていない。肩を怒らして頭でバウンドした槌は其のまま私のところに飛んで来た。

「やはり『赤色』が……内面から皮膚を強化しているか……」

戻って来た光の槌をキャッチしながら言った。

「投げた武器が戻って来るなんて……私のスペルの強化版みたいね」

私の槌を横目で見ながら、レミリアが興味も無さそうに言った。

「自分のスペルを弄られて、悔しいか……」

「もう気にはならない。赤を殺せば異変は全て解決するのは判ったから」

自分でスペルを解除し、手から光の槌が消す。

「お前も、結局殺すけど」

「なら……其の時まで尽力するまでだ！」

今度は展開した四本の爪から赤い光を纏う。アームがレミリアの爪よりかなり伸び、其の分リーチも増す。

遠距離の効果が薄いなら……直接叩くまで。其に紅い攻撃なら、攻撃を無効にする事は出来ない筈だ。

「此でも喰らえ!!」

私はオリジナルから譲り受けたスピードで素早く接近し、四本の爪を次々に突き立てようとした。

直接攻撃は流石にたまらないのか、敵は素早く爪をかい潜って後ろに下がる。

「！チツ……!!」

すぐさま中心にあるガトリングを向けた。そして激しい銃撃音と共に、大量の銃弾が赤い軌道を描いて飛んで行った。

だが其の時、目標の姿が忽然と消えた。

「!?!」

銃弾は今まさに的が存在していた場所を通過し、後ろの金属のシャッターに包まれた培養槽を

叩いた。

ワープをしたかのように見えるが、間違いない。予想通り知流達が使う時を操る能力を使用した。

私は直ぐに霊夢のほうを見た。だが、紅い霧に結界で必死に対抗する霊夢と、同じく消えた敵を

探すアリスの姿しかなかった。

「背中を合わせろ!!」

私達に狙いを定め、不意打ちする事を危惧した私はレミリアに後ろを取られない様に指示した。

「!私に命令するな!!」

そう言いながらも彼女は其の言葉に従ってくれた。其の状態から、私達は敵の姿を捜す。

何処だ……?逃げた訳ではあるまい……何処にいる……?

いた。部屋の一番奥、七人の配下の大量のサンプルが浮く培養槽の、更に奥にあった袋小路の壁を見ている。

「彼処にいる!追うぞ!アリスは其のまま騙し討ちに備えていてくれ!!」

私達二人は其処に向かい、敵を追い詰めた。

だが其処で私は不審に思った。行き止まりにいれば、圧倒的に不利になるのでは……？

更に壁を見ているから、此方に背までむけている事になる。

いつたい何のつもりだ……？

其の時、敵は壁の床あたりに付いていた排気口の蓋を掴み、幼児のなりとは思えない怪力で

引き剥がした。

「!?」

そして振り返ると同時に其を此方に投げてきた。

耳鳴りかと疑う程の空気を切る音。凶器と化した蓋が回転しながら高速で迫って来る。

不意を突かれた……避け切れない……！先頭にいた私は機械の腕でガードをしようと

した。

『身代わり人形』!!』

すると声とともに盾を持った金髪の人形が数体、私の前に飛び出し、其の蓋を受け止めたが、回転の勢いで弾き飛ばされた。

だが其により蓋も勢いを殺され、私の足元に落ち、回転が止まった。

「さっき、助けてくれたらしいわね!？」

其の声に振り返ると、アリスが吹き飛んだ人形達を糸で引き寄せていた。

「其の礼よ!貸し借りは無くなったわね!？」

そう言って、左目でウィンクした。

何だろう…其処で私は何故か……『何故か』考え始めた。

右目ではなく、左目でウィンクした……つまり右目は開いてる。

其は即ち、失った私の右目の代わり……という事か？真意が判らない。

此処等辺りの事は赤に教育という名の調教はされていない為、理解が出来なかった。

「何処見てるの阿保!!逃げられるわよ!?!」

其の横からのレミリアの怒鳴り声にはっと、前をに視線を戻す。

だが其の時は既に、敵は開けた穴の中に姿を消していた。

RC-08-B MASTEA

蒼魔塞 紅月の研究所 最奥部

「……まったく…助けられたと話した途端に、動けない私を放り出して……」

私達は直ぐに其の穴の周りに集まっていた。発生源がいなくなった為か紅い霧もすぐに晴れ、

霊夢もぶつくさ文句を垂れ流しながら此方に来ている。

「こんな処に排気口か……」

「此処を通って行ったみたいね……隠し部屋でもあるのかしら……?」

私は片膝をついて中を覗いた。

「?…どうするの?」

霊夢が訪ねる中、私はアームをたたみ元に戻した掌から赤い光を懐中電灯の様に放ち、

中を照らした。

「……一人ずつしか入れなさそうだな……」

「なら、ほふく前進で進んで追いかければ良いわよ！」

「！待て！」

赤い光を消しながら、私はしやがもうとする霊夢を押し止めた。

「何故よ？」

「狭い通路の中では、身体が小さい相手の方が素早く立ち回れる。もし、ほふく前進の状態の間で襲われたらひとたまりも無いぞ」

そう言っつて私は考え始めた。

「誘っているのかもしれない……罠かもしれない……」

「なら、私の上海達を先行させるわ。其でどうかしら？」

アリスが人形を数体、自分の周りに浮遊させた。そして再びウインクするのも見逃さなかつた。

「……其が良いな」

其処で人形を操るアリス、私、霊夢、レミリアの順番で通路の穴に入ってしまった。

アイツを必ず幻想郷の解き放つてはいけない……此の要塞の中で必ず、仕留めなければならぬ。

其の思いを心に留め、狭い通路を進んでいたが……

「……………！痛!!……………止まるなら宣告して貰えないか？お尻が……………」

「御免、つい……………慎重になってるから……………」

「……………シャンハーイ」

「早く進んでよ！吸血鬼でサンドイッチされるのは嫌よ？血生臭そうだし……………」

「……………人形遣いよりはポリユームは無い」

「聞こえてるわよ、レミリア……………！」

……………緊張をほぐす為か、素で出ているのかは判らない緊迫感のない会話が小声で交わされ、

少し心の強張りをほぐせた私である。

血塗れた狂者の落とし子

A L I C E

V S R C | 0 4 × 0 7 ヴエルメリオ

く蒼魔塞 紅月の研究所隠し通路 排気口内

私は狭い通路の中、列の先頭をはって移動していた。目の前には上海を数体、武器を構えながら

歩いている。

突然天井の一枚の板が吹き飛ばしながら、さっきの敵が目の前に降りて来た。

「！上海……！！」

上海達は衝撃をまともに受け、たちまちバラバラになってしまった。

「やはり来たか……！！」

後ろからレミアアか、レミアアのそっくりさんの声が聞こえた後、後ろから四本のクローが一斉に伸びて来た。

複雑に動く爪をすべて避けた敵は、出て来た通路の天井の穴に逃げて行った。私は安堵で深く息を吐いた。

「……た、助かった……！」

「いちいち油断するな！隙まみれの今、次々に襲撃して来るぞ!!」

怒号を後ろから飛ばされてしまった。

「今は此の不利な状況から脱出する事が最優先だ!!」

私は少し不機嫌になったが、また上海達を周囲に配置して進行を再開した。

するとまた何処からか大きな音が響いた。

「！後ろからお出ましょ!!」

霊夢の声に、私は後ろを向いた。レミリアの後ろから敵が今にも襲い掛かろうとしている。

「レミリア!!」

レミリアが左右の翼のを振り、抵抗した。其の内の一撃が敵の胸を掠り、赤い血が出た。

胸を切られた敵が、再び出て来た穴から逃げて行く。

「直接攻撃なら無難でしょ!」

「よし、次が来る前に急ぐぞ!」

其の時、目の前の通路の先で光が漏れているのを見つけた。だがよく見ると、金属の蓋で

塞がれていた。此のままだと外に出る事が出来ない。

「皆、止まって……」

其の出口から少し遠い位置でみんなに制止する様に呼びかけ、目の前の上海を操作して出口の

方に向かわせる。

『大江戸爆薬からくり人形』!!』

そして金属の蓋の前まで来た処で爆発させ、蓋を引き飛ばした。

「出口は確保した……よし、行くわよ！」

穴の出口にたどり着いた私は爆発でひん曲がった縁に手をかけ、中の様子を見た。

「出られたわね……でも、此処は？」

壁と丸天井は全て白く何も無い。汚れてもなく、無機質で不思議な部屋だった。

「こんな場所初めてだ……何かの実験場か……？」

後ろからマスターアの声が聞こえた。レミリアには絶対見えない場所だったから判別はすぐに

出来た。

私は手に力を入れて身体を前方に滑らし、広い部屋の中に降りて行った。

少し歩いてあたりを見回しても、勿論何も無い。

私の背後から、三度靴の音が聞こえた。三人も私の後を追うように降りて来たのだろう。

「！見つけた！あそこにいるわよ！」

私が指さす先、部屋の中央のはるか上に敵がいた。浮遊し、充血した目から赤い涙を流しながら

此方を見ている。先回りしていたに違いない。すると敵の身体から赤い霧が噴き出し始めた。

「！また紅い霧……！！」

霊夢が腕で口を塞ぐ。

「アリス！ 霊夢をもう一度援護してくれ！！」

「判ってるわ！ でも、出来るだけ援護にもまわるつもりよ！ 上海！！」

マステアの指示で、私は結界に巻き込まれない様に距離を取りながら上海人形を周囲に配置した。

「夢符『二重結界』！！」

霊夢が後ろで結界を張り、霧から身を守り始めた。

レミリアとマステア、二人の吸血鬼が再び敵の前に立つ。

私も結界の前で臨戦態勢に入る。

敵の周りにもさつきと同じ紅いナイフが浮遊を始めた。

「もう逃がさないわ……此処をお前の墓にしてやる！」

マステアがそう言うとともに左腕が変形し、再び四本の機械の爪を開いた。

「万物全てを、思い通りに操れると思うなよ？……赤……!!」

REIMU

VS RC—04×07 ヴエルメリオ

〈蒼魔塞 紅月の研究所最下層 試験場

「アリス！コイツは知流や咲夜と同じ、時を利用した瞬間移動が出来るわ!!」

不意討ちされない様、後ろにも十分に気を配れ!!」
「判っているわよ!!」

アリスとマステアの会話を聞きながら、私も結界の中から様子を見ていた。

二人が其処で敵に向かっていった。

敵が周囲に漂わせていたナイフを発射した。二人が避わしたが、ナイフは其のまま此方に

飛んで来た。

「『身代わり人形』!!」

アリスが私の目の前に盾を持つ人形を配置し、攻撃を防いだ。

一応、ナイフ『の様な実体の無い弾幕』だったので結界だけで十分で防げたが、折角なので恩恵は

受ける事にする。

レミリアとマステア、それぞれが素早く動きながら交互に爪の一撃を叩き込んでいく。体中に次々と傷が出来、あたりに赤い飛沫が飛び散る。

が、敵は泣かずに無表情で仰け反っているだけだった。確かに転んだだけでも泣きそうな年齢の

子供が、こんなに攻撃を受けても泣き喚かないのは不気味だった。

「躊躇うな！子供のなりに油断すると死ぬぞ！！此奴は、赤の破壊兵器だ！！」

「こんな気味の悪い人間の子供……誰が攻撃を躊躇うか……!?!」

すると攻撃を受けていた敵から、一際赤い霧が噴き出した。

「!?!」

二人はバックし、私達の目の前に戻って来た。

敵の身体が霧に包まれ、姿を視認する事が出来ない。私は結界でぼやけている事もあり、完全に

見えなくなっていた。

「姿を見せなさい!!魔符『アーティフルサクリファイス』!!!」

其処にアリスが一体の人形を投げ込んだ。人形は爆発し、其の爆風で赤い霧を無理矢理吹き飛ばした。

其処から現れたのは赤い甲冑を纏った先程の敵だった。其の甲冑は此の要塞で門番をしていた、

今は亡き『クローン』門番のと大きき以外がそっくりだった。

「！あの甲冑は……暁符『近朱者赤』!？」

「雪の『赤色』の力だ！物理も全てが効かなくなる!!」

兜の中から、赤い瞳が相変わらず無表情で此方を見ている。

「弱点としては動きが鈍くなる事があるが……知流の能力で補う筈だ！気を付けろ!!」

そういう事ね……私は結界の中から睨み返す。彼方も、不利と判断して防御に徹してきたわね……？

だが気が付くと、敵がアリスと私の間に瞬間移動していた。

「!?しまっ……!!」

アリスが振り返ろうとした時には敵が私に拳を振りかざしていた。

だが襲い掛かろうとした其の甲冑に四本の爪が突き刺さり、拳は結界の寸前で止められた。

「……お前の相手は、此方だろう……!?」

マステアが敵を刺したまま、アリスの後ろから自分の目の前まで引き寄せ片手で持ち上げた。

刺していた一本を抜き、敵の首に巻き付けて締め付け始めた。

「打撃系統も駄目なら……!」

敵はもがいて抵抗しているが刺さっている機械の爪は折れない。流石の『赤色』による力も

『英知の結晶』には敵わない様だった。

其の時、何処からかミシミシと嫌な音が響き始めた。私は次に何が起こるかが判つた。

アリスも其に気付いたらしく、咄嗟に顔を両手で覆った。

そして次の瞬間、

バキイイイ……………!!!

大木が折れるような音と共に、敵の首がへし折られた。

マステアが拘束から解放すると、糸の切れた人形の様にもそのまま地面に落ちた。

「……………雪……………知流……………」

彼女の目の前で甲冑は赤、身体は青い塵となって消えていった。

「……もう大丈夫よ」

レミリアが私とアリスに声をかけた。私は結界を解除した。

あたりの景色が鮮明になり、赤い霧も次第に濃度が薄くなり、消えていった。すると壁の一角が四角く切れ、扉が現れた。其と同時に聞きなれた声も響く。

『……まさか、倒されてしまうなんてね……完全に予想外だった』

「!!赤い……!!!」

マステアが吸血鬼特有の牙を剥き出しにして辺りを見る。

赤が此処を何処からかで、視てるのかしら……？私達も探すが、其らしきものは見当たらない。

『……まあ良い……其の先の部屋にワープ装置があるわ。上に乗れば、六階の一室に移動出来る』

様に設定している』

「一六階……一番手薄な最上階の一階下にわざわざ連れてくれるか……？」

マステアが呟く。

『ところで……課題は……どうやら、まだやっていないらしいわね』
「だから何？」

素っ気なく返すと、声が聞こえなくなった。

『……其のヴァイタリテイ、私の処まで持ってくれるかしらね……』

暫くしてそう言うと、完全に声が聞こえなくなった。

「……………ふう」

私は大きく息を付きながら首の骨を鳴らす。

「行先用意してくれるし課題見逃してくれるので、慧音よりも優しいわね。彼方は課題を忘れた

生徒に、頭突き喰らわしているってのに」

「いや、そんな筈は無い。赤は出した宿題を拒まれた事を、絶対に赦しはしない」

マステアは顔をしかめて言った。

「自身の完璧を穢した者は、徹底的に排除する筈だ」

「まさか、此の先で……………」

「…追加の課題が用意されていると？鋭いな」

「取り敢えず行きましょう……………紫も心配だわ」

私とマステアが話しているのに、アリスが急かして来る。

「本者が偽物に殺られる筈は無いわ。ましては幻想郷を創った賢者の妖怪と其の猿真似をした

人間よ？」

私はそう言い、用意された装置のある部屋に向かって歩いていった。

今更其の位でビビっていたら……受けて立つわよ、補習位ちやっちゃとこなしてあげよう

じゃないの。

虹の双極に立つ者

YUKARI

（緋なる亜空間

「……ようやく捕まえた」

私のものではないスキマの中、私はホバリングで停止している偽者の後ろ姿に、声をかけた。

其の着ている真つ赤に染まった白衣が噴射の勢いにはためいている。

敵の目の前には私がスキマから突き出した標識。行く手を阻んでいる、其は皮肉にも赤い逆

三角形の『止まれ』。実に皮肉な光景だが、更に周りからは紫色の瞳が赤を睨んでい

る。標識だけでは止まらない……そう思った私は『変容を見る眼』を配置し、動いた瞬間に

狙撃する

様にしていた。が、其等もただの飾りだ。攻撃もさせない。ある程度経てば引つ込める。

大切なのは、此方に注意を向ける事だ。私と向き合わせる事だ。

「私の偽者……私の劣化版……そんなに急いで何処に行くの？」

其の質疑に相手は私に背を向け、黙ったままだったが、

「……本物は、やはり速いわね……」

ぼそつとそう呟いた。本物……即ち其は、自分を偽者だと認めているという決定的な証言

だった。

「己を完璧に貫き切れていた……そう思い込んでいるだろうけど……其の我の強さだけには

感服する……」

偽者は後ろを向いたまま、此方を見ようとしない。

「が……お前は所詮人間だ。妖怪になりきる事など出来ない」

そう言った瞬間、赤が此方に振り返ると同時に何かを投げてきた。私はスキマで逃げずに

畳んでいた傘を顔の前に構え、其を受け止めた。

其は扇子を二枚合わせて作り上げた様な、円状の投擲物だ。紅い電気で出来た地紙がカッターの役割となつてモーターで唸り声を上げながら傘に深々と食い込んでいた。

「……笑わせるな……私が何時から妖怪になつたと思ひ込んでいる?」

私が本気で憤っている。私が私をはたと睨み付けている。私は無言で投げて来た『英知の結晶』を扇子の要をつまんで傘から抜き捨てた。

「…お前の能力の能力が欲しかっただけだ…其処まで怒る必要がある？寧ろこんな偉業が

出来る人間がいる事を褒めて欲しいわよ」

「お前が己を人間とまだ自覚しているなら、質問する」

私は質問を投げながら、彼女の背後の配置物を見ずに全て取り除いた。赤は気付いていない。

「…同じ人間を、新たな命に変えるという所業に、恥を覚えないの？」

「覚えない」

即答だった。

「我を持ち始め、此処までを歩む間、私を虐げて否定した人外に値する者を、私が血筋ごと

根絶してやった……」

「知っている」

同様に即答で返ししながら、私は心底から呆れ返る。残念ながら彼女は、人を殺めるといふ、

どの世界でも赦されない行為を此の幻想郷で初めてした訳ではない。其もあの飄々とした

様子から、相当な数を繰り返している。

「……知っていたんでしょ？私を、生涯を監視していたのなら……私の全てを」

していた。答えはそうであっても、私は口にしなかった。

「私は……人間の一個人として生きようとした私を否定した彼奴等が悪い……」

人として天寿を全うしようとする私は、何も悪くない……」

其の様子は、最早自分に言い訳をしている様にしか見えない。もしくは発狂しているか。

そうとしか私には見えない。

「化物『赤色之他人』!!」

いきなり赤はスペルを発動し、足元辺りから出現した真紅の螺旋に飲み込まれていった。

私が手を出さずに其を見てみると、少しやがて赤を包んでいた渦が消えた。だが、其処に私を真似た姿はなかった。

「魂魄…妖夢…」

旧友の従者の姿があった。身長、体系、服装…憤怒の表情と紅色のベストとスカート以外全て

本人そっくりに化けられている。

「よりによって妖夢に化けるなんて……未熟さが目立つ様な真似をして……」

赤色に染まっている妖夢を見ると、本物の彼女にストレスが溜まっていないか心配になって来る。

天衣無縫が付く二つ名は、伊達じゃないのよね…幽々子は。

「お前が素直に……格下だと認めないなら……!!」

そう言うのと本物の妖夢と同じ様に背中から、二本の刀を取り出した。

だが、鞘に納まっている筈の刀身は其処にはなかった。

「今の私にとって……此の剣で切れない物は……」

「皆無なのよ!!!」

筒の先端から放電と共に赤い光が、一直線に伸びた。赤い電気の剣……

『英知の結晶』ね。なら此方は、緑の光の剣でも持って対抗すれば良かったかしらね……

何はともあれ……私も、傘を剣の様に持った。

YUKARI

VS 〈半人半赤の殺鬼〉 八雲赤

く 緋なる亜空間

「『頂門赤針』!!」

妖夢の姿に化けた偽者は楼観剣、白楼剣とサイズがそっくりの『英知の結晶』を振り、
其の軌跡から赤い針を大量に飛ばす。また、私の真似を……

「……『頂門紫針』」

私は其の基となったスペルで対抗した。傘を振った軌跡から紫色の針を殺到させる。
互いの針が私達の間で交差し、ぶつかり、火花を散らして舞っていった。

『開けて悔しき玉手箱』

私は頭上から墓石を落として不意打ちをかけようとした。『赤色』の影響で効かない事は知っていた。

だが直ぐに其を察知した彼女は、別のスキマの中に逃げ込んで回避した。彼女は自作の機械の

特性にすら頭が回らなくなっている。完璧な我を穢した私を、排除する事しか頭に無いらしい。

そして容姿だけでなく、ステータスもそっくりコピーされている様だ。あの不意打ちに

気付くところから、本物と同じ位の俊敏さを持っている。

言葉遣いもコピー出来ているかと期待はしたけど、『紫様』といつも呼んでいる彼女の言葉遣い

は、今の彼女にとっては性に合わないらしかった。

スキマを利用した不規則な動きで、私を翻弄している（…）と思い込んでいるのだろうけど、

当然私には通用しない。妖夢が私のスキマを使用している……本人が見るときつと複雑な

気持ちになるだろう。

そして不意打ちをり返したつもりか、目の前に突如開かれたスキマから赤い刀身が一直線に伸びて来た。

私はわざと紙一重でかわし、スキマを使つて後退した。あの刀身、自由な長さに伸び縮み出来る

らしい。便利ね……妖夢にお土産として持つて帰りたいわ。

「魔影『マクスウエルの魔』!!」

スキマから出て来た赤の左右に開かれたスキマの中から赤色と青色、それぞれに彩られた

彼女の分身が出現し、此方に向かつてきた。本者同様、各自で二本ずつ剣を所持している。

私は敢えてスキマを使わず、次々と斬撃を避けていく。

此の剣の動き……単に適当に振っている訳ではなさそうね。一人ひとりが私が反撃

しにくい

箇所を狙っている。剣の扱いにも慣れていると見て間違いない。

そして最後には、彼女自身が分身達の後ろから二本の剣を私に振り下ろしてきた。私は避けず、

再び傘で其を受け止めた。

「……こんな傘、スパッと切れると思っただけ？ 妖怪を舐めないでよ」

そう皮肉は言ったけど、正直なところ彼女の剣の存在を何故か私は恐ろしく感じた。其を持つ彼女

だけでも恐ろしく思える。此の双剣が放つ赫々たる光は『英知の結晶』、そして『赤色』

なせる色とは思えなかった。

彼女自身の怒りを具現化したものか、其ともあの剣で巧妙に殺めた人の生血によるものか……

人の生血を錆とせず、際限無く啜る妖剣に操られている……そう私には見えた。

が、此の妖剣も所詮機械……なら、創造したのは彼女だ。

純粹に人を殺め、元來彼女と同じ様な人間になる筈だった配下をも失敗すれば殺し、己の欠陥の露呈を免れた快感を糧とし、生きている……其はある意味で妖怪の感情に似ている。

殺人鬼という妖怪に、無意識に変わり果てている……と、解釈した方が良いのかしらね……？

「……私ばかりを見ていると、足元すくわれるわよ？ 敵は私だけじゃないんだから」

傘を断ち切り、私に身体に刀身を押し込もうとする彼女の両手の下にスキマを出現させ、

其処から新たな標識を真上に突き出した。

其の標識は黄色の菱形にエクスクラメーションマーク。

「……『その他の危険』に気を付けなさいよ？」

もう一度仕掛けられた不意打ちには流石に怯み、赤は思わず後ろに下がった。其の際
標識に

両手を突き上げられ、大きな隙が生まれた。
私は其の先端を勢いよく突き出し、ガラ空きとなった……

右の眼窩に捻じ込んだ。

「!!っ~~~~……」

悲鳴は上げずに直ぐに私から離れ、右手の『英知の結晶』を手放し目を押さえる。其の指の

間から、大量の赤い血が流れ始めた。

「ああ……血が……!!」

右目の失明や痛みよりも、自分の身体から血が出たことの方に驚いていた。

赤にしては鮮やか過ぎる其の鮮血が、妖夢と同じ白いシャツをも赤く、赤く染めていく。

すると赤の身体が再び『赤色』の螺旋が囲まれ、姿が見えなくなった。今度は誰に化けるの

かしらね……そう思っていると再び彼女の姿が現れる。

だが期待は外れ、妖夢の姿から元の私の真似をした様な姿に戻っていた。

「私の……!! ああ……『赤色』がああ……!!」

紅い白衣の下に来ている黒いロングスカートは血飛沫を隠していた。あの黒……もともとの服

の色なのか、其とも長い月日による血の変色によるものか……其すらにも不審を抱いてしまう。

左手にはいつの間にも持ち替えたのか剣ではなく、赤色の角縁眼鏡のつるを握っていた。が、其の手が震えている。

「……此で、出来損ないの気持ち判ったかしら？」

私は傘の先端に付着した血と、そして眼輪筋の一部を振り払い取り除いた。赤が私を見る

其の左目から怒りの色は消えなかったが、同時に別の感情が宿っている事に気が付いた。

直ぐに何かが判った。私に恐れをなしたのだ。

妖怪という超然的な存在に畏怖の念を抱かない人間はまずいない。其の人間が抱く畏怖の念こそ

妖怪なのだから。例え最新鋭の科学技術で本気で対抗しようとも、決して其の差は縮まらず、

ましては追い抜く事は不可能に近い。

其に挑もうとするでしょうもない輩には、其の差を思い知らさなければならぬ。私は血塗れた傘を開き、スキマの上に座った。

かつて初めて霊夢と出会った時にしていた、あの格好だ。

「……どうせ行く場所は最上階でしょ？」

赤は何もせず只見ていた私に怯えている。顔や仕草に出なくても其が判る。そして、自分の

スキマに時間差で穴を開け、逃げる様に其処から外に出ていった。

私は追わなかった。去る者は追わず。其に私は、もう彼女を追う必要もなくなつていった。

YUKARI

く博麗神社 屋上

私は自分のスキマで赤のスキマから脱出し、異変の現場から遠く離れた博麗神社の屋上に立っていた。

遠くに要塞が見える。白いサーチライトを下から浴びて夜空に其の巨軀を鮮明に曝け

出している様は森林に突如出現した、場違いな巨大建造物を彷彿とさせる。

所詮真似をされただけの『赤の他人』である私が、其処まで今回の異変に干渉する必要が

あるのか？よくよく考えると、比較的安易な事に私はどうしてあそこまで向きになつてしまった

のだろうか？其の風景を見ながら、私はそんな事を考えていた。

同時に私は、過激な手段を選択してしまった自分を今更ながら悔いていた。

理由は判っている。彼女の正体だ。

「……年月が経つと、此処まで思想は変わってしまうのね……」

彼女は元々此の幻想郷の住民ではない。私の能力を機械で疑似的に再現し、其を利用して

此の幻想郷に來た。キレ者という事以外は、彼女は只の人間だ。だが人間とはいつても、

私にとっては十分に関係を持てる人物だ。

だが、彼女は此の幻想郷が欲する存在ではない。まさに自然の中の人工物だ。

何が何でも私を始末しようとした彼女が、私を畏れて逃げた。彼女の危険思想を幾分か

薄める事が出来た。

其だけでも、もう十分だ……そう判断した私は、残りは霊夢達に託す事にした。今の彼女なら、

自分の正体を霊夢達に曝すだろう。凶行の理由を聞けば、説得する事が格段に容易になる。

「……悪いけど、私は抜けさせて貰うわ。霊夢。後は彼女としっかり向き合って、

馬鹿な真似を止めさせなさいよ……」

「霊夢達が進行している其の要塞を最後に一瞥した私は自分のスキマを開けた。

「そして、二元の世界に帰してあげなさい……」

スキマに入る瞬間、彼女の本当の名前を呟いた。
彼女の正体……やはり其だけは私にとつても、何処か重くのしかかって来ていた。

「……博麗 白昼夢（はくれい しらむ）……貴方の……博麗の、最後の末裔を……」

蒼魔の本性 (キャラ紹介②)

オリキャラ (?) 達の解説③◎

No. 9 〈色相の境界〉八雲 赤 (やくも ふち) ③

〈暁空のメディアの末裔〉博麗 白昼夢 (はくれい しらむ)

今回の異変の黒幕である、紫そっくりの人物。

今まで使用していた八雲 赤は偽名である事が判明。そして今回其の本名も遂に明らかとなった。

紫が言った、博麗の名字。其の正体はなんと別次元の未来からやって来た博麗の血を引く末裔

だった。其の生涯を見てきたという紫曰く、相当なキレ者であり、天才との事。

服装は大きく変わり、紫に似た赤を基調とした衣装ではなく、足まで隠れる黒いロン

グ

ワンピースの上から真っ赤な外衣と、研究者に近い雰囲気になった。

帽子も脱ぎ、髪も紫がいつも結んでいるリボンで霊夢のような結び方をしている。

同時に彼女の秘密も次々と明らかにされていく。

紅霧異変にて登場した少女にそっくりな赤の配下。其の正体は赤がいた世界では創る

事を禁じられていたクローン（通称『レッド・クローン』、以後『RC』）だった。

異変の前に九人のDNAを採取、そして幻想郷じゅうの里から誘拐した妊婦を殺害して

取り出した胎児にDNAを投与して創り上げていたという。『RC』には右太ももの付け根に必ず

自分のコードを紅く刻まれている。

そして『RC』が失態をさらした場合、直ぐに失敗した原因となった性格を改良した新たな

『RC』を作り、失敗した『RC』は出来損ないと称して必ず自分の手で抹殺する。

そして何事もなかったかのように新たな『RC』を投入する。

判明しているだけでも美鈴似の藍雪、咲夜似の待宵知流が其の犠牲となっている。

創つては殺し、また創つては殺しとマッドサイエンティスト宜しく、本名と同時に明かされた其の本性は、凄まじく黒い。悪逆無道そのものと言つても良い。

其ばかりでなく紫が見ている限りでは彼女がもといた世界でも幼い時からかなりの人数

を殺している模様。其ほど殺しても捕まらなかつたのは持ち前の頭脳や当時の年齢により、

幾度となく完全犯罪を成し遂げたからだと思われる。

しかし現在紫によつて右目を抉り取られ、自分のやつている事に対しての無謀さは少なからず植え付けられている。

其でも謎はまだ残っている。彼女が口にした、『赫郷計画』《プロジェクト・レドランティカ》。そして何故彼女は博麗ながら八雲の名を名乗っていたのか、どうして此処まで道を外してしまつたのか……

今後、彼女の口から明らかにされていく事だろう。

本名の名前は霊夢と同じ夢の一種である白昼夢、そして「白む」から。

No. 10 RC—04×07 ヴェルメリオ (Vermelho)

赤が乳児にまで成長させた胎児に、雪と知流の遺伝子を組み込んで生み出した生物兵器。

『RC』の発展型と思われる。

青白い全裸の幼児のなりで、髪の毛が真ん中から藍色と金色

の二色に分かれている。また、赤に注入された『赤色』が全身に血管の様に浮かび上がっている。右太ももには赤く自分のコード『RC—04×07』が刻まれている。

二人の血を持つている為、両者の能力を持ち、其等を使用する事が可能である。只まだ成長していない不完全な中、緊急で投入された為に言語を解する事が出来ず、ひたすら赤に組み込まれた使命に従って霊夢達に襲い掛かった。

名前はポルトガル語で「赤」を意味する「ヴェルメリオ」(Vermelho)から。

No. 11 へ久遠に蒼き幼き月 RC—08—B マステア・アズール (Maste

ma Azure) ①

赤の側近であるアズール姉妹の姉であり、赤の八人目の配下。

レミリアにそっくりだが、服は赤いところは青く、右目、左手、左翼、右足が欠損している。

其の部位を右目以外が『英知の結晶』に改造され、サイボーグのような外見をしている。一番赤の傍にいた影響かレミリアと違って冷静沈着、頭脳明晰で他の配下からも厚い信頼を寄せられている。難しい言葉を多用するのが難点。

レミリアとパチュリーの様に、ヘフェリーとは『マスィ』『ヘフィ』と呼び合う程の親友だった。

其の正体は、赤が他人の胎児にレミリアの遺伝子を組み込んで創り上げた『RC』。

レミリアの遺伝子には適合した素体の胎児が『赤色』には馴染まなかったらしく、拒否反応

により上記の部位が吹き飛んでしまう。しかし赤が万が一の為に用意していた『英知の結晶』

により彼女は一命を取り留める。

しかし常に赤から手解きを受け、赤の性格を知り尽くしていた彼女は、何が何でも自分を生かそうとしていた其の様子から、自分は『貴重な』道具に過ぎない事をすぐに見抜き、彼女に不信感や

反感を抱く様になる。以後は赤や他の配下から『赤色』を体内に入れる様に要求されても拒否し続けていた。

また、異変を起こしてから赤が『RC』や『英知の結晶』の研究で彼女と向き合う機会が

少なくなった事から、外の世界に何度も出るようになっていた。

此がマスターが赤に対しての反感を募らせ、維持させる事に繋がっていく。

現在は異変を止めに来た霊夢やレミリア達と遭遇し、自分の正体を知った彼女は赤の横暴を

止める為に赤を裏切り、彼女達と共に行動している。其以降赤からは、彼女のコードの

最後に出来損ないを意味する『B』（Badの頭文字）を付けて呼ばれている。

マステアは、レミリアの名前の由来となったといわれる墮天使「レミエル」（Remiel）と

同じ墮天使「マステイマ」（Mastema）から。名字は「赤」を意味する英語「スカレット」

（Scarlet）に対して「青」を意味する「アズール」（Azure）から。

No. 12 〈青魔のメイド〉RC-07 待宵 知流（まちよい ちる）①

赤やマステア達に仕える「蒼魔塞」のメイド長であり、赤の七人目の配下。

咲夜をベースにしているが、赤いメイド服に金色の髪から其の姿は、寧ろ霊夢達が以前魔界で

遭遇したメイド、夢子にそっくりである。

右頬に『赤色』による紅い時計の針の様な幾何学模様がある。

赤やマステア等、上位の者に対して忠実であり下位の者にも優しい為、人望は厚い。

ただし超が付く程のドジっ子であり、おっちょこちょい。「蒼魔塞」の五階より下にあるトラップの管理も請け負っているが、点検の際に解除し忘れる事が多く、其で死んだメイド妖精の数は

計り知れない。また非常に内向的であり、急に話しかけると飛び上がってしまう。戦闘の際に

慌てて出せないのを防ぐ為に、腰にはびっしりとナイフが備え付けている。

性格や失敗の多さ故か、本来彼女より立場の低い雪からは「駄メイド」と酷評され、ヘフエリー

同様、負傷させられる事が多い。

咲夜同様時を操る能力を持っているが、彼女が可能なのは時を『戻す』だけの様だ。其の能力が何処でどのように使われているのかは謎に包まれている。

其の正体は、赤が他人の胎児に咲夜の遺伝子を組み込んで創り上げた『RC』。

マステアの策により『RC』や『英知の結晶』を創る極秘の研究所への侵入を

赦してしまった彼女は無論殺され、現在は其とは別の『RC』である彼女が「蒼魔塞」

にいる。

名字は十六日の月、十六夜月と満月を挟む十四日の待宵月が由来となっている。名前の知流は咲夜の名前の由来となったと思われる富士山の神様、コノハナノサクヤヒメ（木花咲耶姫）の別称、

コノハナチルヒメ（木花知流姫）から。

東方双魔塞　　＼　Sister　of　Azure
人工少女達の前夜祭

REIMU

＼蒼魔塞　6階　とある一室

どれ程目を瞑っていただろうか。目を開けると、私達は薄暗い部屋に立っていた。其処で私は、さっきの間に何が起こったのかを思い返していた。

赤が「ワープ装置」といつていた。パネルみたいな機械……多分『英知の結晶』だろうけど、

し、其の上に私達四人が乗ると、突然足元から赤い大量の数字や記号で出来た結界が出現し、

逃げる間もなく囲まれた。そして其等が複雑に動き、紫や其の式神、藍が解いてそうな色んな

方程式を形作り始める。

動きが完全に止まると、其の公式達が紅く光り始めた……あまりの眩しさで思わず目を瞑ったん

だっけ……

洒落た移動方法を考えたわね……目にはすこぶる悪いけど。

「……どうやら、一方通行らしいな……」

「赤がアンタの言った奴なら、此の部屋に何かあるのかしら……？」

光らなくなった足元の機械を踵で数回踏み付けた後に、マステアが呟き、

其の隣でレミリアが同じ声で呟きながら部屋を見渡している。

「!? ヴツ……!!?」

其の部屋の空気に不快を覚えた私は自分の両手で鼻を押さえた。

「何……此の部屋……臭い……!!」

アリスが呻く様に発した其の声も鼻を押さえた為か吃って聞こえる。

其の部屋にはとんでもない悪臭が立ち込めていた。生き物が腐った……そんな臭いが

充滿している。

其の時だった。

「……………来……………ない……………」

声が聞こえた。部屋のどこかにいる。私達はすぐに身構えた。

「来ない……………来る……………来ない……………」

一言と共に何かを千切る音が聞こえる。花占いでもしてるのかしら……………?

すると私の目の端で何か動いた。皆も其に気が付き、其に視線を向ける。部屋の奥で誰かが

座っているのが見える。私達に背を向けて何かをしている。

私達がソイツに近付こうとした。

「!!……………」

するとマステアが機械のアームを私達の前まで伸ばして制止させた。隻眼で私達に目配せをして、

其のまま一人で近づいて行った。

そしてマステアが其の人物の直ぐ真後ろに立つと、

「…来た……やっぱり来てくれると思っていたわ、赤様……」

来るのを待っていたかのようにその人物は朗らかに言つて勢いよく振り返つた。

其の私の知っている顔だったが、マステアを確認すると、たちまちにして表情が曇つていくのが

暗い中でも確認できた。失望と驚きが入り混じつた複雑な表情だった。

!!!

相手の顔を見たレミリアが息を呑んだ。驚くのも無理はなかった。

「フ、フラン……!?!」

レミリアの妹、フランドール・スカレットにそっくりだったからだ。

服装も全てフランと同じで、背中にも宝石を付けた様な歪な羽もある。

ただしフランの紅い部分を全て青くした感じで銀髪であり、其の宝石は全て色が無く
モノクロ

だった。よく見ると本者のフランとは反対側にサイドテールにまとめている。額の
真ん中に太陽を

模した紅い模様が有り、其処から顔中に紅い様々な幾何学模様が広がっている。今なら判る。基が人間でありながら此処まで吸血鬼の容姿を再現できるあたり赤は此の幻想郷からでは考えられない技術、いわゆるオーバーテクノロジーを持っている。

クローンや、そして「英知の結晶」を作る所から、生物学的にも工学的にも長けている事が思い知らされた。

「…御姉様……？ どうして御姉様が、其処から……？」

右目以外がレミリアそっくりの顔を意外そうに見上げてフランそっくりの声で訊ねる偽フラン。

そんな彼女にマステアが言った。

「マドウ、帰って来たぞ」

知流にも行っていた、自身の妹の名前だった。思わず私も囁く。

「……マドウレイト・アズール？」

雪が言っていた、赤の最後の配下の名前だった。フランそっくりの配下。二人が実在する

スカレット姉妹と同様、アズールという姓で繋がれた姉妹という揺るぎない証拠だ。

そして同じ妹であるフラン同様とんでもない事をしでかしている彼女は、あの暴力的とされた

雪も、其の名を口にさせた時には心の底から怯えさせたほどの訳あり少女だった。

「今日は何匹殺した？」

同じアズールの姓を与えられた姉は、蒼の妹を見下ろしながら静かに聞いた。

アリスが怪訝な顔をしている。あの配下の所業を知らないまま異変に巻き込まれた人形遣いは其の

凄まじい事情が判っていないらしい。

彼女の傍により、其の耳の傍で私は呟く。

「妖精よ…あの配下が気まぐれで選んで殺したのが沢山いるの。でも主の赤は其を赦しているのよ」

其を聞いたアリスの顔は強張り、唾を飲み込んだ。

「う〜んとね……………」

え、そんなやり取りをしている間に、質問されたフランもどきは暫くあざとい仕草で考え、

「沢山つ!!!」

座ったまま両手を広げ、いかに大量に虐殺したのかを子供っぽく表現する。

「ねえねえ、ところでさあ。私何で御姉様達が来たの判ったと思う?？」

「?来る、来ないと言つてたから、花占いでもしていたか?赤から花を貰つたか?真つ赤な花弁の?」

赤色が好きな赤ならやりかねないかもね…私は思った。『赤色』を抜いた其処ら辺の花から一本に

だけわざわざ戻して彼女に渡しただろう。いくら配下を道具として扱う赤もお願い位は

聞いてくれる筈だ。

でも其に対して彼女が出した答えは、私の予想の斜め上を行くものだった。

「あ、やっぱり花占いだと思つたんだ?違うよ…ほら!」

そう言うも持つていたものをマステアに差し出した。

「やってるのは指占いだよ!!」

其の掌には五本の指を人とは思えない力で引き千切られた青く染まつた小さな手首

があった。

「!!ヒイイツ……!!」

完全に怯えたアリスは私の袖をギュツと握った。首吊りした人形だの人形を組み立てる時に

バラバラになった四肢のパーツだの、ずっと気持ち悪いもの見て来ている癖に……生になると途端

に駄目なのね……情けない、と思ってる私も、見てて気持ちの良いものとは感じられない。

よく見ると部屋の隅にはボロボロにされ、バラバラにされた妖精の死骸が大量に積まれている。

知流のミス等で死んだ妖精の死骸を、すべて玩具としてマドウの部屋に放置していたのだ。汚い

わね。ゴミ溜め場なの、此処は……？

「ねえ、其処の蒼白と隣の御姉様そっくりなソイツは私の玩具？玩具よね!」

其処で首を曲げてレミリアと、そして奥の私とアリスの方を見ながら言った。興味津々で見ている。

「……アレ？ 私の事、言っていない……??」

隣から小声でアリスの声が聞こえる。

だが、マステアは静かに首を振り、

「残念だが、もう私はお前の味方ではなくなってしまった。だから彼女達もあげられな
い」

「知ってる」

即座に返されたフランもどきの言葉にマステアがハッとする。

「蒼魔塞で何が起きているのかは全て知ってるのよ。だから御姉様が帰ってたのも知ってた!!」

私には判るのよ」

「…じゃあ、私達が人間から生まれた存在だという事も、全て知っていたというのか……!？」

でも、マドウはそう訊かれても首を振り、

「……其は流石に知らなかったわ……一部の……ごく限られた場所だけ……結界があつて

……其の内部の詳細は……知る事は出来なかったの……」

千切った指の付け根をしゃぶって青い血を吸い始めた。そのせいで言葉が途切れ途切れになる。

結界の内部……あの研究所の事ね。其処まで考えて結界を張ってたなんて赤も用意周到ね……

…にしても、とんだ英才教育です事……フランなら絶対に言いそうにない言葉を、さつきからコイツ

は赤子のやる動作の間に次々と並べて来る。赤の影響の大きさに驚かされた。

「そうやって配下を洗脳して来た訳…真実を知っていると此処まで見方が変わるのね。知って

なければ、赤の真似をした只のませガキにしか見えない筈だったのに。

「でも、其の事は気になるわね……私達が生殖じゃなく、製造で創られたって事」

そう言うのと直ぐに飽きたのか、しゃぶるのを止めて素早く立ち上がる。

そして持っていた手首を投げ捨てた。其は弧を描く様に飛んで死体の山へと消えていった。

するとマスターが一步後ろに下がり、背中越しに私達を見た。

「お前たちは下がってろ……!!」

そう言った顔には汗が流れている。妹の脅威を十分理解できている様だ。

マスターは今度はレミリアを見やる。

「マドウレートはお前の妹、フランドールよりもずっと幼く、ずっと猟奇的だ。比なんて

もの

にはまるでならない……!!」

其の言葉にレミリアはカチンと来たらしく、眉が僅かに動いた。

「…私のフランより凶悪なの？」

マステアの隣に進み出て、同じくフランもどきの前に立つ。

「なら面白いわ……フラン以上に私を愉しませてくれるのね……??」

「…あら、私にせがんで来るの？なんて活きのいい玩具♪」

レミリアの妹とそっくりな声を出しながら嬉々として両手を合わせる。

さっきの赤子みたいな生物兵器とは違って立派な成功作みだから、油断は出来ないけど、勝機もある。悪魔の妹そっくりとはいっても素体は人間。欠損した部位を

マステアが再生出来ないなら吸血鬼と全く同じ性質は持つてはいない筈…なら、人間と同じく死ぬ。

「妹がどれ程か…見させて貰うわよ。アンタの方が下がったら？自分の妹を殺り合うのは

乗り気じゃないだろうし」

「いや……赤が創った人造吸血鬼を妹と位置付けられた事を知った今なら……出来る！！」

此の二人、何だかんだと言って仲が良くなっているわね……二人のやり取りを聞きながらそう

思う。

「ふくん、御姉様まで相手になるのね……私、其も初めてかも」

実の姉…と位置付けられたマステアが敵となった瞬間でも、少しも動じない。

紅魔館の中でも特に畏れられているフランの遺伝子を持っているだけに、やっぱり今までの配下

とは違う。オリジナルの狂気を其のまま採用している所からもう違ってる。心血を

注いで創った

なかで、一番期待が込められている。まさに殺戮という赤の理想が形となった配下と言っても

良い。私は内心で震えた。

「アリス、私達も行くわよ！此のままだとレミリア達が危ない……！」

「……………行かないやダメ？」

「何言ってるの、腰抜け!!異変に巻き込まれたのなら、やるしかないのよ!!」

私達もマステア達の両端に立つ。

すると、部屋の壁の一部が開き、中から太陽型の電球が出現して一斉に点灯した。

部屋は一気に

明るくなり、目に悪い紅い光で満たされた。

さつきまでは暗くて判らなかつたが、此の部屋もさつきの実験場と同じくらい広がった。私達は

部屋の一室に立っていた。

「なら、私は倒せないわ……赤様が私を創ってるのなら、尚更……」

偽フランはそう言うと、青い血にまみれた右手を頭上高くにかざした。

すると、其の手の先……空中から酷く湾曲したハートが付いた棒が空中から召還された。

フランのとは違って其の棒は混じり気のない純白だったが、握った瞬間、青い血で汚れていった。

「何故なら……」

『赤色』の力を發揮させたのか顔全体の幾何学模様が紅く光り始め、其と同時に両目も白目になった。

私達も構える。最後となる赤の配下は元となった吸血鬼らしく狂気じみた形相で吼えた。

「私は、永遠にコンティニュー出来るのさ!!!」

アリアドニ・オリヴァは彼女の主なのか？

RC—08—B MASTEMA

VS〈蒼魔の妹〉RC—09 マドウレート・アズール

蒼魔塞 6階 屍体貯蔵室

「気を付けて!!今までの配下とは違うわ!!」

マドウレートの霊夢が叫んだ。言われなくてもそんな事は判っている。赤が他の配下より此処にいるのも、赤に死体で遊ぶ

「神槍『スピア・ザ・グングニル』!!」

「宝具『陰陽飛鳥井』!!シューート!!!」

すると其を合図としたのかレミリアは青い光の槍を、博麗の者は巨大な青と白の陰陽玉を蹴って敵に攻撃を仕掛けた。

だが、そんな攻撃に少しも動じない所か口を三日月状にして微笑むと、

「禁忌『ダーインスレイヴ』!!!」

白い棒が赤い光に染まり、其を振る。先に辿り着いたレミリアの青い槍が其と衝突し、バラバラに打ち消された。更にもう一度振ると今度は陰陽玉を弾かれ、消滅した。あれだけの威力の技を二度弾いても、両足は其の場から後ろに動じていない。其どころか弾いた後の表情も涼しげだ。

「！ダーインスレイヴ：一度鞘から抜けば生血を浴び、完全に吸収するまで鞘に収まらない魔剣か：!!」

「そうよ？で、其の生血を啜られるのは、いったい誰かしらね？」

そう言つて、半ば見下した態度で棒を持っていない方の手と指を此方に向かつて振り始めた。

「フランの『レーヴァテイン』を真似したつもりか!？」

其の挑発を真に受けたレミリアは、其のまま相手に突進していった。マドウは背中に棒をしまうと両手で其を受け止めた。だが今度は衝撃を受け止め切れずに両足とも後ろに下がった。其の間、金属でもないのに其の勢いによって靴底から火花が発生している。

「……あら、御姉様並に素早いし、力強いわね…ドツペルゲンガーさん…!？」

力を力で對抗しながら余裕で言葉をかける。しかし互いに地に足を付けて両手を組み合ったまま、一步を譲ろうとしない。

「神槌『ハンマ・ザ・ミヨルニル』!!!」

私は飛び、光で出来た柄を瞬時に伸ばしながらレミリアの後ろから敵の頭に向かって槌を振り下ろした。マドウはすぐに気が付き、レミリアを突き飛ばして空中へと逃げた。捉え損ねた私の槌はレミリアの目の前、マドウが立っていた金属の床をへこませた。

私は諦めずに、地面から槌の頭を抜くと、天井に向かって飛んでいく敵に向けて柄を伸ばした。

だが到達するまでの間に、敵は此方に振り向き素早く背中に手を伸ばしてもう一度杖を持った。そして自分の前にかざして槌の頭を受け止めた。

激しく散る赤色と青色の火花に照らされる中、其の表情は嬉々としていた。其に比べて私は、自分の予測を遥かに上回った敵の其の力に顔を歪めている。右の眼球が嵌っていた空洞に汗が流れ込み、チクチクと痛みが走る。

すると棒を振り上げ、私の槌を弾かれた。伸びた柄は大きくしなり、其につられて私の両腕も上がり、身体が無防備となった。其の隙を見逃さなかった敵は、直ぐに高速で接近しながら胸に向かって、青い血まみれの棒を真っ直ぐに突き出した。

だが私も咄嗟に左翼で身体を覆い、電磁バリアの紅い翼膜で攻撃を防ぐ。攻撃を弾かれ、今度はマドウが仰け反って懐をがら空きにした。左翼を戻した私は直ぐに光の槌を横に振った。

今度はしっかりと敵の側面を、槌の打面に捉えた。

「!!ゴッ……!!」

敵は真横に叩き飛ばされて床に墜落して何度か転がるものの、モノクロの羽を使って飛翔し、直ぐに体勢を立て直して着地した。

「其の剣に誰の血も吸わないまま、此の戦いを終わらせてやる……!!」

マドウは口から一筋流れていた青い血を手の甲で拭い、其を見下ろした。

「…フヒッ」

すると顔中の紅い幾何学模様が更に輝きを増し始めた。白目だった其の双眸が、逆に真っ赤に染まり始め、猫のような黄色い瞳が現れた。

あの特徴は……!!

「気を付けろ!! 『赤色』の力を最大限にいい”…!?!?”」

そう皆に向けて叫んでいると最中に突然、腹部に激痛を感じた。

「お返しよ、御姉様」

何時の間に移動したのか、私の目の前に立っていたマドウの右の拳は、私の腹に深く食い込んでいた。残っていた左目が飛び出そうな程の痛みに堪え切れず、私は両手で腹を押さえて背骨を曲げた。

腹から拳を引き抜き、素早く右側に移動したマドウは、私の義足の膝部分を横から思い切り踏み付けた。

「!?ガッ……!!?!」

義足は砕けながら不自然な角度に折れ、バランスを崩した私は其の場で片膝を付いた。私の足元に黒い金属の破片が、甲高い音と共に散らばる。

「弱いわね……御姉様が弱いのも、『赤色』じゃなくて『英知の結晶』で意地を張ってるのがいけないのよ?」

其の言葉と共に、今度は後ろに背中が強く引つ張られた。

「!? ウウ……!!!」

そして其の間も無く金属の碎ける音と配線が切れる嫌な音と共に、左の義翼を翼膜ごと切断された。あの棒ではなく、手刀で切断したのだろう。此も痛みが無かったが切り取った羽と、私の背中に残った一部の断線した配線からは赤い漏電が起き、私の背中や後頭部に小さな火傷を創っていく。

「身体の『英知の結晶』さえ破壊してしまったら、弱体化できるものね、御姉様は……」
そう言うのと私から切り取った義翼の断面を、漏電を諸共せずにかじり燃料となつている『赤色』を吸収し始めた。

其の間も私の背中に手を置き、地面にうつ伏せにしようとしてくる。私を無力化しようとすると共に、霊夢達からだど私が盾となつて容易に攻撃出来ない様になつている。

「いい加減、赤様から『赤色』を貰つたら？」

「……今更考えを変えたつて、手遅れよ……奴は私を見限つた。もはや……抹殺の二

文字しか、私に対する考えは無い……！」

私は不安定な姿勢の中で、身体にかけられる力に抵抗しながら其を断った。私の背中の火花で髪の毛が焦げていく臭いが鼻に付く。

「……そ。此でも駄目なのね」

頑なな拒否に素っ気なく答えたマドウは、私の義翼の断面から口を離して投げ捨てた。地面に落ちた機械で出来た翼は完全に『赤色』を吸い尽くされ赤いラインや翼膜がすっかり消えていた。

そして未だ立つ事が出来ず、垂れていた私の頭に向かってパンチを繰り出した。

『身代わり人形』!!!」

其の瞬間に盾を持った人形が割り込み、代わりに其の一撃を受けた。人形は盾ごとバラバラになって吹き飛び、空中で爆散した。

「嗚呼もう…!! 呪符『上海人形』!!!」

「!? アリス……」

声と共に私の傍で新たに展開された人形からマドウにレーザーを繰り出した。敵はレーザーを避けながら後退して私から遠ざかった。

私を助けた人形遣いが直ぐに寄って来て肩を貸してくれた。目の前で霊夢とレミリアが、二人掛りでマドウの相手をしているのが見えた。

「アンタ、随分とやられたけど大丈夫!?」

「義足と義翼だから痛覚は無い……腿での噴射でバランスは取れる……」

機能しなくなり、邪魔だと判断した右膝から下を左のアームで千切り取りながら私は言った。直ぐに右腿の裏、ハムストリングス部分のカバーを外して補助用のカバーを露出し、噴射を開始した。レミリアと同じスカートの部分が噴射を浴びている部分だけ黒く焦げ、やがてポロポロに焼け落ちていく。

私はアリスの肩を借りながら、姿勢が平行になる様に噴射する量を微調整する。

「……!!よし……此で問題は無い……!」

「…無茶はしないでよ?」

調節し終え、何とか体勢を立て直すとアリスから離れた。そして霊夢とレミリアの後ろから動きを封じようとマドウに向かって左腕のアームを伸ばした。手は変形させて四本の指を拡張し、敵の身体を鷲掴みにしようとした。

「……………懲りないわね…?」

敵は其を回避すると、白い棒を振り回し、爪の部分全て折られてしまった。だけど霊夢達の猛撃で腕までは破壊出来ずに、滑るように移動して後退する。

「もう……………面倒臭いから、全員倒しちゃおっ!……………」

着地しながら鬱陶しそうにそう叫んだかと思うと、棒を両手で持ち、其の場で振り上げた。同時に其の棒は蒼色ではなく紅色の炎に包まれていった。一般的な炎の橙色ではなくリチウム等の炎色反応で見られる、血の様な鮮やかな紅色だ。

「暁符『蒼ざめた馬』!!!」

そう唱えながら渾身の力を込めて地面に棒を振り下ろし、突き刺した。強大な力を受けた金属の床は其の力を分散しようとする表面に、地割れの様に亀裂を創っていく。すると其処から、蒼い光と共に何かが飛び出して来た。

「!!!」

其等は青い炎の馬だった。玩具の様に足がそりの様に繋がった、の大軍が荒れ狂う潮の様に放射線状に広がり、膨れ上がっていった。

其の防御も役に立たない荒れ狂う波に、私達は為す術も無く飲み込まれるしかなかった。

「んんん………雑魚いつ!!」

地割れのように綺麗に割れた金属の床の上、倒れている私達を見下ろしながら、マドウ
レート・アズールは拗ねた様に叫んだ。

「!!!
~~~~~………」

私は両手を付いて何とか体を起こした。ホバーの駆使して四つん這いになろうとも  
がく。そんな私を弱いと判断したのか、敵は既に興味を別の者に向けていた。

「…そう言えば、アンタが博麗霊夢よね？赤様が仰つてた特徴と一致してたから」



私の隣で立ち上がろうとする霊夢の方を見下ろしながら、マドウは言った。其の黄色い瞳は、不気味と言つて良い程キラキラと輝いていた。一方の霊夢は何も言わずに口から一筋垂れていた青い血を、手の甲で拭いながら彼女を見返していた。

「じゃあ、此処でアンタを仕留めたら、赤様、機嫌直してくれるかも？」

そう呟くと霊夢に向かつて羽を使わずに走つて来た。其の途中で棒を両手で持ち、後ろに振りかざしたのが見えた。危機を感じた私も四つん這いの状態から霊夢に向かつて飛んだ。残つた私の、本当の羽と足を使つて。

出来るだけ遠く、霊夢の近くに……

其の瞬間から万物がスローモーションの様に、其の動きを遅らせていった。

走る途中から見せ始めた、敵のオリジナルと変わらない狂気より快樂を見出した表情。

其処から振りかぶり、霊夢に向かつて棒を突き出した。

反応が遅れた霊夢が、大幣でガードをしようとしている。

間に合わない……!!私は爪の折れたアームを伸ばして霊夢の身体を掴み、後方に向かっ

て投げ飛ばした。

突然自分にされた事が判らず、驚きを顔から隠せないまま後ろ向きに飛ぶ巫女の身体。

彼女が立っていた場所に、私が其の身体を滑り込ませた。

よって、霊夢に向かって突き出した棒は、代わりに私の胸を貫いた。

「!!!」

ハート形の先端が心臓に到達し、其のまま背中を貫くのが判った。

痛みは全くない。胸が少しずつ熱を帯びていくだけだ。熱い、只其だけだ。痛みはおびたらしい出血と共に後に襲ってくる事は判っていた。

「あら……結局御姉様が、生血吸われるんじゃないの……」

姿勢を低くしていたマドウは、その姿勢を私に顔を寄せて来た。其の頬には私の青い血飛沫が点々と付いている。『赤色』によって色が変わった其の目は血に飢え、誰か死を渴望していた。

本当にそっくりだ：蒼世界で見た、レミアアの妹に……噂から、地面を掘り進んでまで地下室を見た甲斐があった。

やはり彼女は、赤にとつて最適なDNAの持ち主だった様だ……

良い機会だ：私はそう思った。赤が胚や胎児からクローンを創る研究所を目撃した時から考えていた、秘策を実行するチャンスが来た。私が事故から生き延びた、もう一つの理由：赤による外的要因ではなく、私による内的要因、其を利用した方法だ……

只、其の憶測が役に立つか：もし此が、失敗してしまつたら……

「マステアアア!!!」

後ろから霊夢が私を呼んだ。油断していた自分の代わりに刺された私を本気で悲痛な声で呼んだ。

鋭い彼女は、人間をベースとした私が此の一撃で無事じゃ済まない事に瞬時に気付いただろう。吸血鬼の力を人為的にもたせても、人体の再生速度を変えろという事までは流石の赤も出来なかつたのだ。でなければ、側近であるアズール姉妹の量産に失敗しない筈が無い。

「傍に来るな!!」

私は、近付く事も拒否した。

迷っている暇は無い。此の脅威は、確実に葬る。霊夢達に、此以上の霊力の空費と手傷を被らせる訳にはいかない。

赤は、私が殺したかつたが……止むを得ない……私は霊夢達の方にマドウが行かない様に、自分を刺した棒を持つ其の腕の一本を右手で握った。

「!?……」

マドウが其の動作に驚いた。私が事切れていない事に動揺したのか、血に染まった眼球の中で黄色い瞳が小さく揺れる。

己を犠牲にしても……此処からが、勝負だ……!!

## ベジタリアン・ライトネス

RC—01 GOL A

く蒼魔塞 赤の部屋前

「くくく、赤様あ……」

赤様の部屋の前で私、ゴーラがいた。

普段赤様は此の扉の向こうで難しい作業を日夜行っている。だから出来るだけ邪魔に聞こえない様に扉を丁寧にかつ静かな音で二回、確実にノックの音を響かせる。そして

赤様の御名を呼び、其の場で待つ。此が鉄則だ。

でも今の私はお腹を空かせてしまっていた。今の声はあまりにも情けない。崇高な御名が霞んで聞こえてしまった。

もし今の声で御立腹になられたらどうしよう……と思つてると、扉が開く。

「あら、ゴーラじゃない。どうしたのかしら？」

「ふ、赤様……」

また擦れた声を出してしまった私思わず口を閉じた。

今日の赤様は導士服ではない赤色のドレスを着てらっしゃった。

赤様の後ろに見えた、清潔に保ってらっしゃる真紅の机の上に何枚もの紙が束の様に重なっていた。

間違いない……ナンバープレートだ。

「……ナンバープレート『ス』よ。また間違えて覚えてるの？顔に出てるわよ、ゴーラ？」

！また違った……私は顔が赤くなるのが判る。

ナンバープレート、通称ナンプレ。三×三、計九個の正方形の升を九個、更に大きな

正方形に並べたパズルだ。九×九となった其の升の中に縦横で重複しない様に数字を記入

し、埋めていくものだ。

以前私にも挑戦させて下さったが、流石に全て解けなかった。赤様は落胆されたに違いない…

そう思った私は死のうとしたのを、赤様が慌てて止めて下さったのが嬉しかった。

「あ、あの…作業をしてらっしやる処…非常に…申し訳無いのですが……」  
「もしかして御腹空いたの？」

赤様の声に赤様は私が思っている事を見事に見抜かれた。

「其も顔に出てるから……判り易いわね、貴方は……」

そう仰ると赤様は自分の机に戻り、椅子に座られると、

「全く、困ったものね…知流は…」

メイド長、知流こそ私がお腹を空かせた最大の原因だった。あの慌てつぷりに何処か



癒される処があるけど其を甘く見てはいけない。決して侮ってはいけない。

今日も罨を解除し忘れていたせいで、いざ駆け付けてみると数十匹のメイド妖精が四方から

突き出た槍に貫かれて絶命していた。

死体の処理にどのくらい時間をかけられたか…あのドジっぷりには何とか出来ないのかしら？

だから立場が下の筈の門番の雪にも舐められ、拳句には殴られるんだ…

「此、食べるかしら？」

御皿の上に載っていたのは、二枚のパン。でも、只のパンではない。茶色い耳が二枚重ねられている食パンが三組、計六枚が御綺麗な皿の上に置かれている。

そして私は目を奪われた。其の、其の間に挟まっていたのは…赤く光沢のある、フレッシュな野菜…!!!

「あ…赤パプリカサンドオオ…!!!」

「貴方、肉が嫌いで野菜が大好きだったわね？野菜を好むのは良い心がけよ」

「知流の手伝い、御疲れ様」

死体を片付けるのを手伝って良かった……!!報われたのかああ……!!!

ああ、美味しいのか……

「赤様、」

し、しまった。つい言葉が口に出てしまった。

「!ありがとうございます?」

「でも、ウォルモ達にも差し入れをしてあげなさい。」

「は、はい!承知致しました!!」

赤様の為にもっと